

IMAGINE THE FUTURE.

令和元年度
筑波大学

教員免許状更新講習報告書

2019~
2020



筑波大学
University of Tsukuba

はじめに

令和元年度筑波大学教員免許状更新講習を終えて

令和元年度の筑波大学教員免許状更新講習が無事終了しました。今年は、この制度が導入されてから11年が経過し、新免許状所有者も受講対象となる2年目の更新講習となりました。

今年度は、対象受講者数が減少することを考慮し、昨年度より4講習減らした127講習（受講定員6,638人）を開講する計画を立てました。実際には124講習を開講して受講者総数4,491人の先生方に受講していただきましたが、受講者数は、昨年度よりも1,239人少なくなっています。受講定員に対する受講者総数の割合は約68%で、昨年度平均から約18%下回りました。これは、対象となる受講者数の減少や通信制の更新講習の受講者増加が原因の一つとして考えられます。

そのような中で、筑波大学を選択して多くの先生方に受講いただきました。関東地域の先生方が殆どでしたが、今年度も北海道から九州までの全国の先生方（31都道府県、1,434人）に受講いただきましたことに、改めてお礼申し上げます。

例年、講習終了後のアンケートでは、4.0点満点の評価を実施しています。各講習の評価平均点の範囲は、必修A(教育の最新事情)で3.4～3.7点、選択必修a(教育の最新事情：現代の教育課題等)で3.5～3.8点、選択B(教科指導や生徒指導等に関する内容が中心の指導力を高める講習)で3.7～3.8点、選択C(教師の総合力や応用力、教師力を高める講習)で3.7～3.8点、選択D(附属学校における実践演習)で3.7～3.9点でした。選択Dは、筑波大学附属学校を講習会場として、附属学校の教員が中心となって行う講習で、教育現場を想定した演習や実習が豊富に組み込まれています。今年度も開講した講習全体に良い評価をいただきました。アンケート結果の詳細等につきましては、本報告集に掲載されておりますので、ご覧いただければと思います。

筑波大学は、更新講習について4つの特色を謳っています。①総合大学の特色を活かした豊富な講習の開講、②講習を5つに区分した筑波カリキュラムの実施、③筑波キャンパスと東京地区での開催、④障害のある受講者への配慮です。また、つくばと都内・市川・坂戸・久里浜など附属学校のある地域での講習、視覚障害・聴覚障害のある受講者への支援等も積極的に行い、多様な方々に受講いただけるような工夫もしております。

また、筑波大学では、更新講習の実施状況の報告と次年度講習の説明等のためのシンポジウムを更新講習開設時から毎年開催し、受講される先生方への発信の場とさせていただいております。今年度は、令和2年2月15日に「学び続ける教師のための教員免許状更新講習」をテーマに開催いたしました。今回は、わが国で開催される2020オリンピック・パラリンピックに向けて、ロンドン五輪のフェンシング男子フルーレ団体の銀メダリスト千田健太氏をお招きして「オリンピックの舞台裏～3大会のオリンピックチャレンジを通して～」と題した講演をしていただきました。千田氏の講演は、教員にとって示唆の多い内容で、かつ一般参加の方からも好評を博しました。続いて、今年度の講習を受講された先生方からの意見発表を受けて、活発な意見交換が行われ、充実したシンポジウムとなりました。

今年度も、充実した更新講習を行うことができましたことは、皆さま方のご理解、ご支援の賜物と思っております。今後も、アンケートやシンポジウムでいただきました色々なご意見を踏まえると共に筑波大学の良さ、強み等を活かし、大学が実施する更新講習の良さを追究していきたいと考えております。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

令和2年3月

筑波大学教員免許状更新講習委員会委員長
副学長・附属学校教育局教育長 茂呂 雄二

目 次

はじめに

| | |
|-------------------------------------|-----------|
| I. 本学における教員免許状更新講習（筑波カリキュラム） | 1 |
| 1. 本年度の講習概要 | 1 |
| 2. 本学における講習の特色 | 3 |
| 3. 受講者数の推移 | 5 |
| (1) 11年間の開設講習数と受講者数の推移 | 5 |
| (2) 各県(関東圏を中心)からの受講申込みの推移 | 7 |
| 4. 受講者評価書（事後アンケート）による評価の推移 | 9 |
| 5. 各講習の本年度の現状 | 18 |
| (1) 必修A －教育の最新事情（共通）－ | 18 |
| (2) 選択必修a －教育の最新事情（現代の教育課題等）－ | 24 |
| (3) 選択B －教科・領域の指導力を磨く－ | 32 |
| (4) 選択C －教師力（総合力・応用力）の向上－ | 41 |
| (5) 選択D －附属学校実践演習－ | 52 |
| (6) 東京地区での講習 | 58 |
| ① 附属駒場中・高等学校での講習 | |
| ② 附属視覚特別支援学校での講習 | |
| II. 筑波大学教員免許状更新講習シンポジウム | 62 |
| 1. テーマ：学び続ける教師のための教員免許状更新講習 | 62 |
| (1) シンポジウムの概要 | 62 |
| (2) シンポジウムの報告 | 63 |
| (3) シンポジウムの事後アンケート結果 | 64 |
| 2. まとめ | 68 |
| III. 本学の教員免許状更新講習について | 70 |
| 今後の教員免許状更新講習の在り方 | |
| おわりに | 72 |
| 教員免許状更新講習委員会委員・室員・東京地区実施委員会委員 | 74 |
| 講習補助者一覧 | 76 |
| IV. 資 料 | 77 |
| 令和元年度筑波大学教員免許状更新講習シンポジウム関係 | |
| 令和元年度教員免許状更新講習実施体制 | |
| 申込状況（講習別，都道府県別，茨城県内） | |
| 受講履修パターン | |
| 受講者評価書集計結果（全体，必修A～選択Dの集計結果） | |
| 受講者評価書（事後アンケート）の様式 | |
| 2020年度の講習計画 | |

奥 付

I. 本学における教員免許状更新講習 (筑波カリキュラム)

1. 本年度の講習概要

本学では6月から12月にかけて、教員免許状更新講習を実施している。講習開講の期日については、2日に分け12時間実施されていた必修が、必修と選択必修に分かれて実施されるようになった2016年度(平成28年度)から同時期に行っている。

講習の開設にあたっては、筑波大学の教員免許状更新講習開設時からのモットーである「受講してよかったと思って帰ってもらえる講習」を国の動向や昨年度の実績を踏まえて実施している。

今年度は、2009年度(平成21年度)の開始から11年目となる。教員免許状更新講習を最初に受講し2度目の受講となる第1グループや、新免許状保有者が対象となる。開設に当たっては、茨城県の事前の調査を参考にして、受講予定者数の減少、講師としての勤務を予定している60代や新規雇用の受講者、また移行措置の取られている幼稚園教諭の受講者数を加味して受講講習数や定員をやや減少させて対応した。

本学の講習内容は、『必修領域講習』を必修A講習「教育の最新事情(共通)」と選択必修a「教育の最新事情(現代の教育課題等)」の区分に分けて6時間ずつ実施している。また、『選択領域講習』をB「教科・領域の指導力を磨く」、C「教師力(総合力・応用力)の向上」及びD「附属学校実践演習」の3つの区分に分け、「筑波カリキュラム」として内容の充実に努めている。

会場は筑波キャンパスを中心に、東京キャンパスや各附属学校の他、外部の施設も活用しながら講習内容の充実に努めた。

また、受講者のニーズに応じた内容になるように担当講師に対して、受講者の事前アンケート(受講者の年齢、学校種、保有免許、講習に対する要望等)を送付している。講習後は、受講者評価書(事後アンケート)により講習の内容及び運営についての検証を行い、その結果を講師へフィードバックすることを通して、講習の評価と改善に努めた。

本年度の講習概要は、以下の表の通りである。

令和元年度教員免許状更新講習概要

| 講習区分 | 本学の講習区分 ＜筑波カリキュラム＞ | 開設講習数 | 定員(人) 全体 (筑波地区) (東京地区) | 受講決定者数 (人) | 受講者数(人) 全体 (筑波地区) (東京地区) | 受講率 |
|------|------------------------------|-------|---------------------------------|-----------------------------|-----------------------------------|--------|
| 必修 | 必修A「教育の最新事情」(共通) | 4 | 1,000 (750) (250) | 826 (586) (240) | 821 (583) (238) | 約82.1% |
| 選択必修 | 選択必修a「教育の最新事情」 (現代の教育課題等) | 24 | 1,190 (800) (390) | 838 (561) (277) | 832 (557) (275) | 約69.9% |
| 選択 | 選択B「教科・領域の指導力を磨く」 | 31 | 1,267 (805) (462) | 945 (582) (363) | 945 (582) (363) | 約74.6% |
| | 選択C「教師力(総合力・応用力)の 向上」 | 52 | 2,599 (1,798) (801) | 1,482 (997) (485) | 1,475 (993) (482) | 約56.8% |
| | 選択D「附属学校実践演習」 (東京地区で実施) | 16 | 582 | 424 | 418 | 約71.8% |
| 合 計 | | 127 | 6,638 (4,153) (2,485) | 4,515 (2,726) (1,789) | 4,491 (2,715) (1,776) | 約67.7% |

以下、各講習区分の日程及び標準の時間割を示す。なお、選択必修及び選択講習は、講習の内容によって多少の時間の変動がある。

必修A講習：教育の最新事情（共通）6時間 4講習（H30と同数）
定員1,000人

| 実施日 | 時 間 | 事 項・（講習テーマ） |
|----------------------------------|-------------|---|
| 6月22日(土) 7月27日(土) 8月20日(火) | 8:30～8:50 | 受 付 |
| | 8:50～9:00 | 10分 オリエンテーション |
| | 9:00～10:20 | 80分 イ 子どもの生活の変化を踏まえた課題 |
| | 10:20～10:35 | 15分 休 憩 |
| | 10:35～11:55 | 80分 ロ 子どもの発達に関する脳科学、心理学等における最新の知見（特別支援教育に関するものを含む） |
| | 11:55～12:55 | 60分 昼食・休憩 |
| | 12:55～14:15 | 80分 ハ 国の教育施策や世界の教育の動向 |
| | 14:15～14:30 | 15分 休 憩 |
| | 14:30～15:50 | 80分 ニ 教員としての子ども観、教育観等についての省察 |
| | 15:50～16:10 | 20分 休憩・試験準備 |
| | 16:10～16:50 | 40分 認定試験 |
| | 16:50～ | 受講者評価書（事後アンケート）記入 |

※ 必修科目は、午前・午後の枠の中で講習テーマの受講順番を入れ替えて2クラス実施した。

例：1クラスは、講習内容をイロハニの順で、2クラスはロイニハの順で実施した。

※ 7月27日は、10002と10003の2講習を上記方法で2クラス実施した。

選択必修a講習：教育の最新事情（現代の教育課題等）6時間 24講習（H30より3減）定員1,190人

| 実施日 | 時 間 | 事 項 |
|----------|------------------------|---------------------------|
| 6月23日(日) | 8:30～9:00 | 受 付 |
| 7月6日(土) | 9:00～12:00 (20分休憩) | オリエンテーション、講習 |
| 7月7日(日) | | |
| 7月20日(土) | 12:00～13:00 | 60分 昼食・休憩 |
| 7月21日(日) | 13:00～16:00 (20分休憩) | 講 習 |
| 7月22日(月) | | |
| 7月23日(火) | 16:00～16:20 | 20分 休憩・試験準備 |
| 8月21日(水) | 16:20～17:00 | 40分 認定試験（特別措置該当者は別室試験） |
| 8月22日(木) | 17:00～ | 受講者評価書記入、事務連絡 |
| 8月23日(金) | | |

選択B講習：教科・領域の指導力を磨く（選択6時間）31講習（H30より2講習減）定員 1,267人

| 実施日 | 時 間 | 事 項 |
|----------|------------------------|---------------------------|
| 6月23日(日) | 8:30～9:00 | 受 付 |
| 7月6日(土) | 9:00～12:00 (20分休憩) | オリエンテーション、講習 |
| 7月7日(日) | | |
| 7月20日(土) | 12:00～13:00 | 60分 昼食・休憩 |
| 7月21日(日) | 13:00～16:00 (20分休憩) | 講 習 |
| 7月22日(月) | | |
| 7月23日(火) | 16:00～16:20 | 20分 休憩・試験準備 |
| 8月21日(水) | 16:20～17:00 | 40分 認定試験（特別措置該当者は別室試験） |
| 8月22日(木) | 17:00～ | 受講者評価書記入、事務連絡 |
| 8月23日(金) | | |
| 8月24日(土) | | |

選択C講習：教師力（総合力・応用力）の向上（選択6時間） 52 講習（H30 より 3 講習増） 定員 2, 599 人

| 実施日 | 時 間 | | 事 項 |
|-------------|-------------|-------------------|--------------------|
| 6 月 22 日(土) | 8:30～9:00 | | 受 付 |
| 6 月 23 日(日) | 9:00～12:00 | 160 分 (20 分休憩) | オリエンテーション，講習 |
| 6 月 29 日(土) | | | |
| 7 月 6 日(土) | 12:00～13:00 | 60 分 | 昼食・休憩 |
| 7 月 7 日(日) | | | |
| 7 月 20 日(土) | 13:00～16:00 | 160 分 (20 分休憩) | 講 習 |
| 7 月 21 日(日) | | | |
| 7 月 31 日(水) | 16:00～16:20 | 20 分 | 休憩・試験準備 |
| 8 月 2 日(金) | 16:20～17:00 | 40 分 | 認定試験（特別措置該当者は別室試験） |
| 8 月 21 日(水) | | | |
| 8 月 22 日(木) | | | |
| 8 月 23 日(金) | 17:00～ | | 受講者評価書記入，事務連絡 |
| 8 月 24 日(土) | | | |

選択D講習：附属学校実践演習（選択6時間） 16 講習（H30 より 2 講習減） 定員 582人

| 実施日 | 時 間 | | 事 項 |
|-------------|--|-------------------------------|--------------------|
| 6 月 15 日(土) | 9:00～16:00 講習の時間配 分は各校により 異なる | 320 分 (昼食・休憩 を含まない) | ・附属小学校 |
| 6 月 22 日(土) | | | ・附属中学校 |
| 6 月 29 日(土) | | | ・附属駒場中・高等学校 |
| 7 月 6 日(土) | | | ・附属高等学校 |
| 8 月 22 日(木) | | | ・附属坂戸高等学校 |
| 8 月 26 日(月) | | | ・附属視覚特別支援学校 |
| 9 月 7 日(土) | | | ・附属聴覚特別支援学校 |
| 11 月 2 日(土) | | | ・附属大塚特別支援学校 |
| 11 月 9 日(土) | | | ・附属桐が丘特別支援学校 |
| 12 月 7 日(土) | | | ・附属久里浜特別支援学校 |
| | 16:20～17:00 | 40 分 | 認定試験（特別措置該当者は別室試験） |
| | 17:00～ | | 受講者評価書記入，事務連絡 |

2. 本学における講習の特色

本学の講習は、次の4つの特色を持っている。

特色 1 総合大学の特色を活かした豊富な講習を開講している。また、附属学校 11 校の先導的実践を学ぶ講習を設けるなどして、受講者の多様なニーズに応えられるようにしている。

特色 2 講習を 5 つに区分（A・a・B・C・D）し、それぞれの区分から選択することで、教員に必要な理論と実践の力を総合的に養うことができるようにしている。（筑波カリキュラム）

- ・ **必修 A 「教育の最新事情」（共通）**
- ・ **選択必修 a 「教育の最新事情」（現代の教育課題等）**
- ・ **選択 B 「教科・領域の指導力を磨く」**

学校における教科指導や生徒指導の充実に役立つ内容が主である。

指導方法、指導の背景となる専門的知見、指導の方法・技術についての最新の内容

- ・ **選択 C 「教師力（総合力・応用力）の向上」**

受講者の教師としての成長を促す内容が主である。文化、歴史、科学、芸術、体育、医学など幅広い内容（現場で活かし、子どもたちに専門的な内容の提供ができる。）

- ・ **選択 D 「附属学校実践演習」**

各附属学校教員の授業参観や研究協議が中心である。附属学校の教育現場を体験し、最新の教育方法等を実践的に学ぶ。

特色 3 筑波キャンパスと東京地区（文京キャンパスと各附属学校）の主に二つの地域で実施している。

特色 4 障害のある受講者が一般の受講者とともに受講できるように配慮している。

（１） 筑波カリキュラムの充実（特色 1， 2， 3）

本学は、長い伝統と総合大学としての特色をもっている。これにより、開講当時より受講者の多様なニーズに対応できる講習を開設し、受講者から高い評価を得ている。本年度は 127 講習を設定し、受講者のニーズに応えられるようにした。特に選択必修では、免許状更新講習規則（文部科学省令）で定められている内容の 14 事項のうち、茨城県教育委員会（茨城県教育研修センター）との連携を図りながら、文部科学省が提示している 14 事項のうち「カ 教育の情報化」以外の 13 事項について開講した。

また、選択 B は教育系の講師が担当し、選択 C においては、全学の教員が講習を担当し、各分野の専門家のより最新の内容の講習が開設されている。さらに他の機関・施設と連携した講習もあり、バラエティーに富んだ講習を開設している。

受講者が必修 A と選択必修 a，選択 B・C・D をそれぞれ学ぶことで、教員として必要な理論と実践を総合的に学ぶことができると考え、「筑波カリキュラム」を継続している。

このカリキュラムの詳細については、本報告書 I の 5 に記載している。

（２） 「附属学校及び附属学校教員の積極的な活用」（特色 1， 2， 3）

本学は普通附属学校 6 校、特別支援学校 5 校の計 11 校の附属学校を有しており、いずれも歴史と伝統をもった学校である。「附属学校実践演習」では、授業実践にもとづく研究協議の他、附属学校教員の講義等も取り入れている。受講者からは実践的で大変役立つ内容であると高い評価を得ており、本学の講習の充実に貢献している。附属学校を積極的に活用する取組は、他大学では少なく、本学の更新講習の大きな特色となっている。

また、本年度も附属駒場中・高等学校と附属視覚特別支援学校を会場に選択 B・C を開講した。附属学校教員と大学教員のペアや外部講師を招いての多彩な内容の講習を開設した。

詳細は、本報告書 I の 5 の（3）～（6）に記載している。

（３） 「障害のある受講者への対応」（特色 4）

平成 28 年 4 月に「障害者差別解消法」が施行されて、教員免許状更新講習においても、開設機関は「合理的配慮」の具体的な内容を十分に検討し実施している。本学では、開設当初より、障害のある受講者が安心して更新講習を受講することができるよう、障害に対する配慮のニーズに応じた対応に対して、文部科学省の補助事業「免許状更新講習障害者支援事業」に申請し、対象経費の補助を受けることで、対応の充実に努めている。要望がある受講者については、事前の特別措置希望用紙により、障害の程度、本人の要望等を確認し対応している。要望は、障害のある受講者だけでなく、妊婦や病気等で不安や心配のある受講者に対しても可能な範囲で対応に努めている。

以下、本学で行っている具体的な対応を示す。

視覚障害の場合

- ① 講習資料：テキストデータの事前送付
- ② パワーポイント：テキストデータの事前送付、通常の「配布資料」の配布
- ③ 演習や参観：具体的な内容に即して対応（ティーチングアシスタント等の配置）
- ④ 認定試験：視覚障害の程度により特別措置（大学入試センター試験、認定試験等に準ずる）
 - ・ 点字問題／点字解答（問題点訳は入試や定期試験に準じて外注）時間延長・別室
 - ・ 拡大問題／拡大解答用紙、時間延長、別室等

聴覚障害の場合

- ① 講義：パソコンによる要約筆記者の配置（複数の場合はスクリーン投影）
- ② 演習：手話通訳を配置
- ③ 認定試験：他の受講者と一緒に受験、試験中に口頭での注意事項がある場合は文書で伝達

妊婦等の場合

- ① 座席指定（本人の希望位置）
- ② 休憩室の設置

※ 体育の実技がある講習やフィールドワークや屋外での活動が多い講習については、詳細な活動内容を示して活動が可能かどうか確認していただいている。

3. 受講者数の推移（資料「申込状況一覧」参照）

本年度の申し込みは、講習の実施時期により 3 期に分けて締切日を設定した（2017 年度から）。2016

年度まではキャンセル待ちの受付を行っていたが、事務手続きが複雑な割に効果がなかったため、2017年度から廃止している。定員数に対する受講率は、昨年度より14%下がり、約68%となった。申し込みは昨年度同様、Webによる申し込み（Kuas システムによる）のみとし、申込受付を3月26日(火)の午後1時から開始した。また、講習実施時期により、以下のように設定した。

| 講習の実施時期 | Web 受付終了日 | 受講申込書提出締切日 |
|---------------------|----------------|------------|
| 2019年 6月～2019年 7月 | 4月 19日(金)24時まで | 4月 24日(水) |
| 2019年 8月～2019年 9月 | 5月 31日(金)24時まで | 6月 3日(月) |
| 2019年 11月～2019年 12月 | 6月 28日(金)24時まで | 7月 1日(月) |

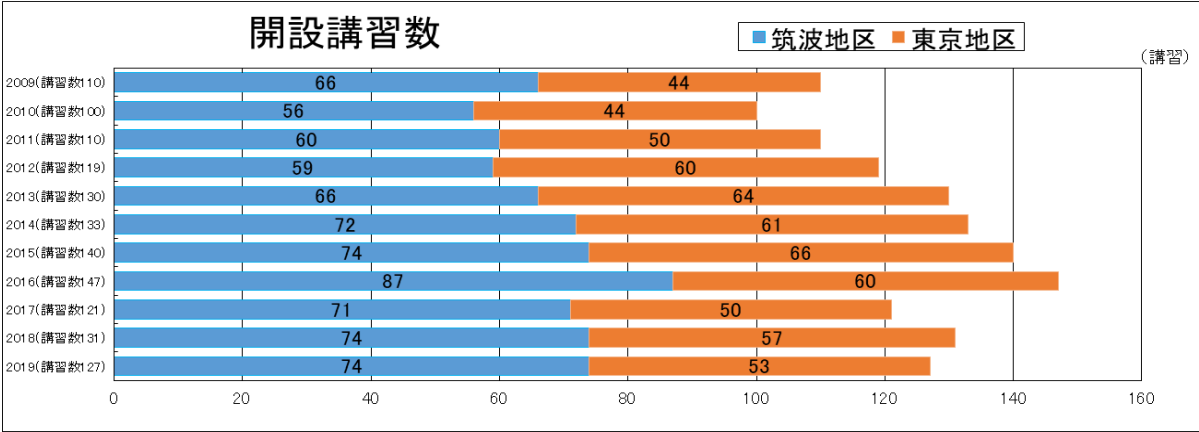
本年度の申し込み初日（3月26日）に延べ2647人の申し込みがあった。最終日までに4,515人の受講申し込みがあり、最終的な受講決定者数（受講者数）は4491人となった。昨年度のweb申込者数と比較してみる。2019年度は、申し込み初日の申込数は1729人減少し、最終的な受講申し込みは1,184人減少となっている。最終申込者数に対する初日の申込率は、58%であり、昨年度より下がっている。

「いますぐに」申し込むのではなく、他の更新講習と比較してから申し込む傾向がでてきた。人数の減少については、受講対象者の減少と通信型の講習受講者の増加によるものと思われる。

| Web 申込数比較 | 2019 (R元) 年度 | 2018 (H30) 年度 |
|-----------|---------------------|---------------------|
| 申し込み初日 | 2,647 人（最終申込者の 58%） | 4,376 人（最終申込者の 77%） |
| 最終日 | 4,515 人 | 5,687 人 |

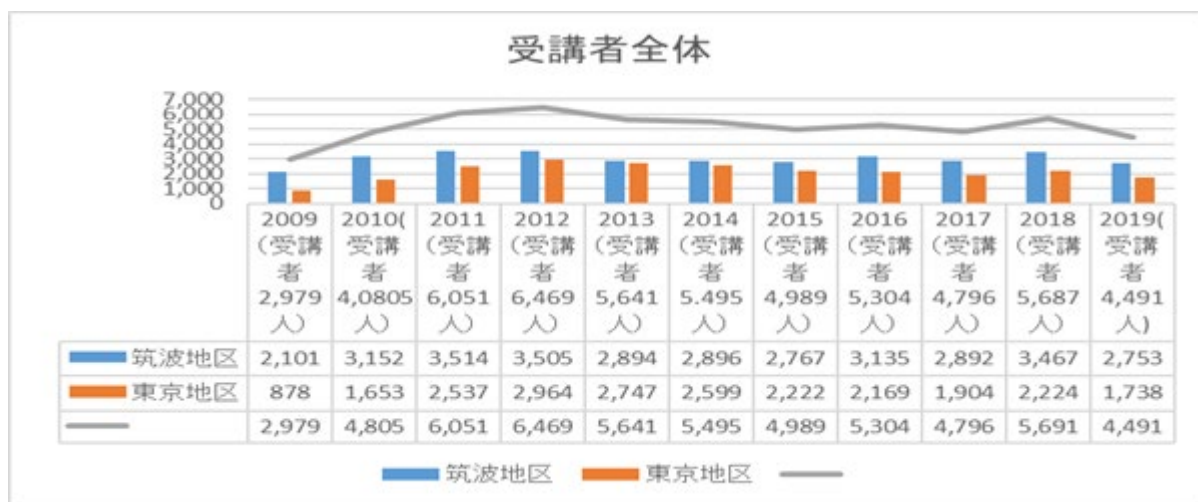
(1) 11年間の開設講習数と受講者数の推移

図 11年間の開設講習数及び受講者数の推移



令和元年度の受講者は、これまでの旧免許状を所持する第1グループと第10グループ(最終年)及び新免許状所有者が対象であった。全体的にみると免許更新制度が始まった時に多数いた50代の教員が退職し、免許更新講習が2巡目となった今年度は、新免許状を所持する30代の受講者の割合がふえている。しかし、少子化の影響で勤務する教員全体の数は減っている所以对象者は減少することが予想された。それに伴い、開設する講習を減らすなどの対応をした。

令和元年度全体では、4講習分減らして、127講習開設した。開催地区別に見てみると、筑波地区で74講習(昨年度同数)、東京地区で53講習(昨年度より4減)とした。開設講習数を減らしたものの、受講者数は予定より少なく、昨年度が延べ人数で5687人であったのに対し、4,491人(昨年度1,196人減少)となった。受講者数全体の傾向としては、2012年度(平成24年度6,469人)をピークに減少傾向が続いている。選択必修講習の導入により、必修講習と選択必修講習受講者を別カウントとした2016年



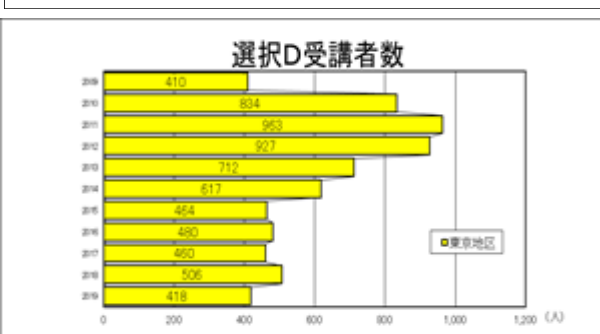
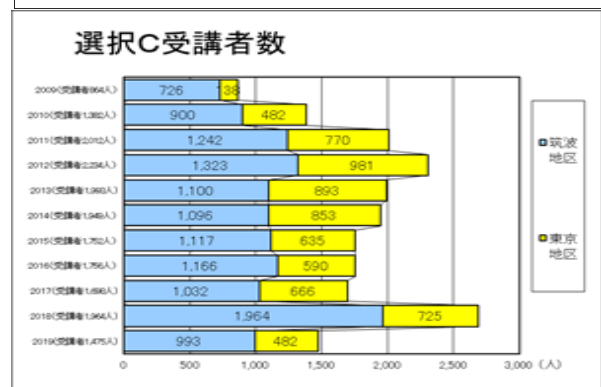
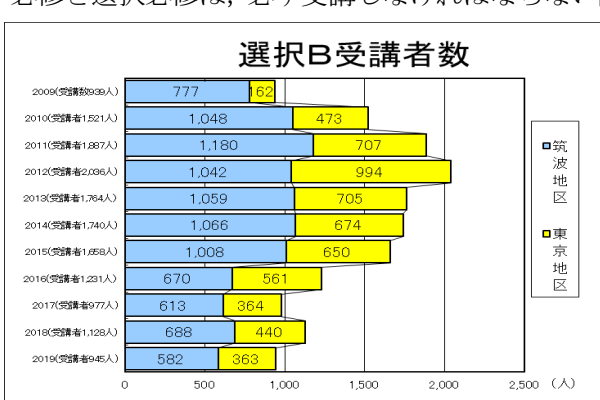
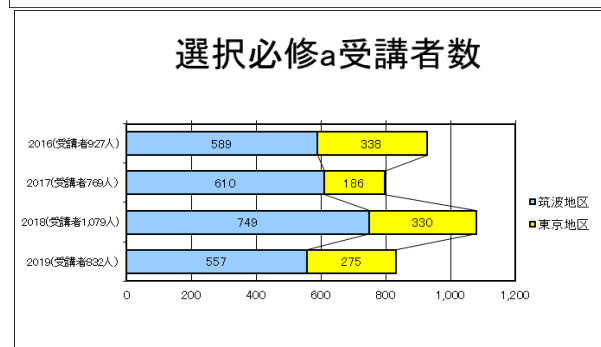
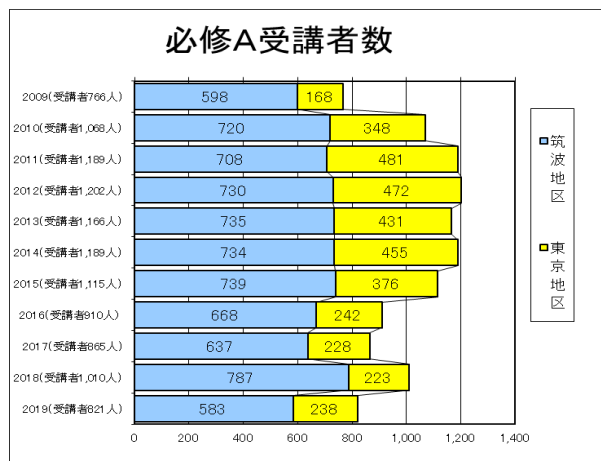
度(平成 28 年度)と、第 10 グループとその他の旧免許状所持者が対象であった昨年度は増加したが、今年度は、筑波地区と東京地区がほぼ同じ割合で減少し、全体数は大きく減少した。

茨城県の事前受講予定者調査でも、通信型の更新講習の受講予定者は増えていたが、実際に申込みが始まって増加はなく、ほぼ調査通りの数であった。今年度は、第 1 回の Web 申込み数があまりにも少なかったため、HP で周知するとともに電話での問い合わせに対して、定員に満たない講習について説明して受講者の確保に努めたが、受講者数はかなり減少した。

11 年間の各講習の受講者数について、今度と比較して省察する。

必修 A については、2016・2017 年度とほぼ同じ割合である。昨年度の筑波地区と比較すると約 200 人の減少となっているが、逆に東京地区では 15 人増えている。

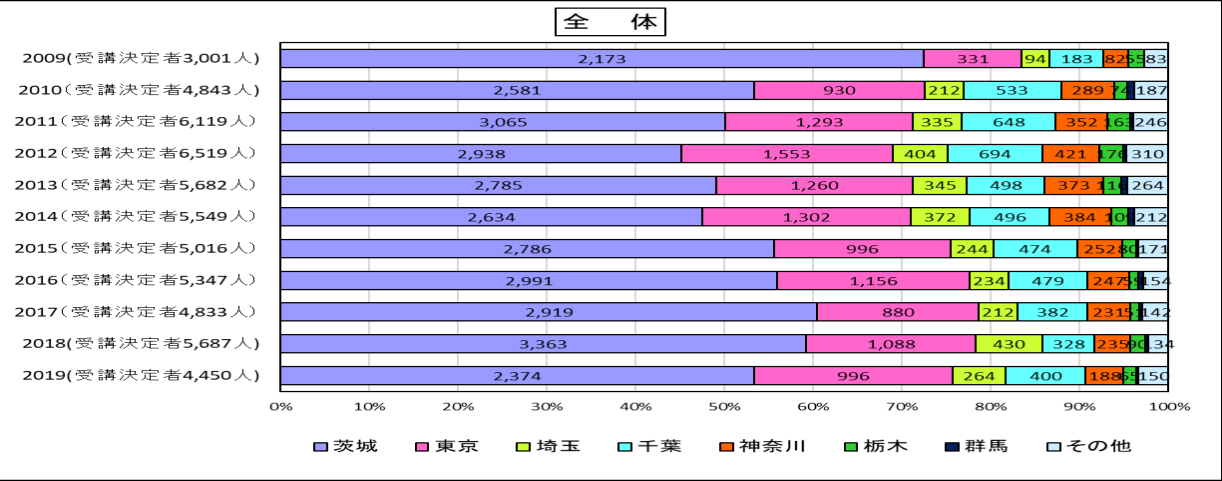
選択必修 a については、数的には、2017 年度と変わらないが、東京地区が占める割合は増えている。必修と選択必修は、必ず受講しなければならない講



習であるので、ほぼ同数の受講者数であるが、選択必修の方が、全体数は多くなっていることからみて、本学の選択必修に対する需要は高い。

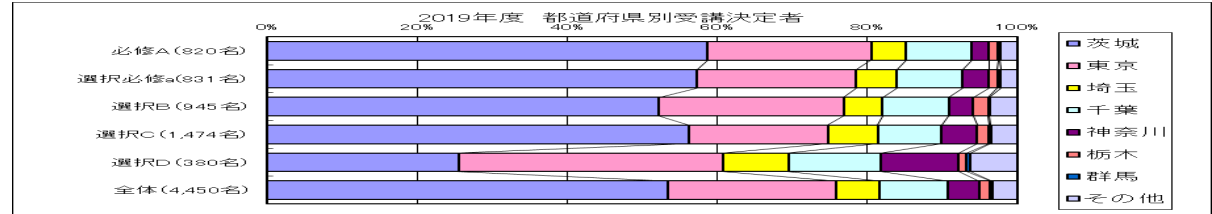
選択 B, C, D についても、2017 年度と同様の傾向にある。

（２）各県（関東圏を中心）からの受講申込みの推移



本学は、毎年全国から受講の申し込みがある。今年度は 4,491 人のうち、関東地方の 1 都 6 県からは、延べ人数約 4,300 人の申込みで、昨年度より減少したが、関東地方以外の府県から 150 人と昨年度より 16 人増えた。（詳細は、資料を参照）

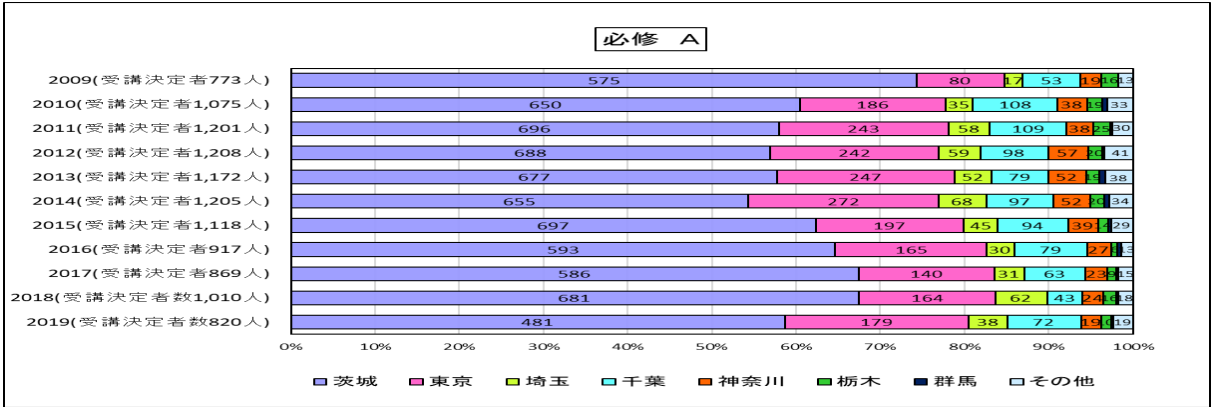
割合でみると関東 7 都県の受講者数は、受講者全体の 93.7% (昨年度より 3.9% 減) を占める。その中で、茨城県からの割合は約 42.4%。茨城県受講者実人数は 565 人（昨年度より 220 人減）となってい



る。その他の関東各都県の傾向については、東京都が 405 人（13 人減）、続いて千葉県 159 人（2 人減）埼玉県 135 人（18 人減）、神奈川県 92 人（24 人減）、栃木県 31 人（11 人減）と全体的に減少している。また、群馬県、山梨県からの受講者は例年通り少ない。

特に茨城県からの受講者数が少なかった。今年度の受講者数は 2,658 人で、昨年度の受講者(3,484 人)より 826 人少なかった。原因が 2 点考えられる。

1 点目は、対象者の減少と 2 点目は、通信制受講者の増加である。「いつでも、どこでも、学ぶことのできる」通信制は、学校の行事に左右されることがなく、定員数も多い。免許更新講習制度が導入されたところ筑波大学で更新講習を受講した 2 巡目の受講者は、受付開始と同時に申込みをしてもアクセスが多く、中々つながらないという先入観があるため、Web 申込を躊躇し、定員に左右されない通信制の受講者が増えたと考えられる。

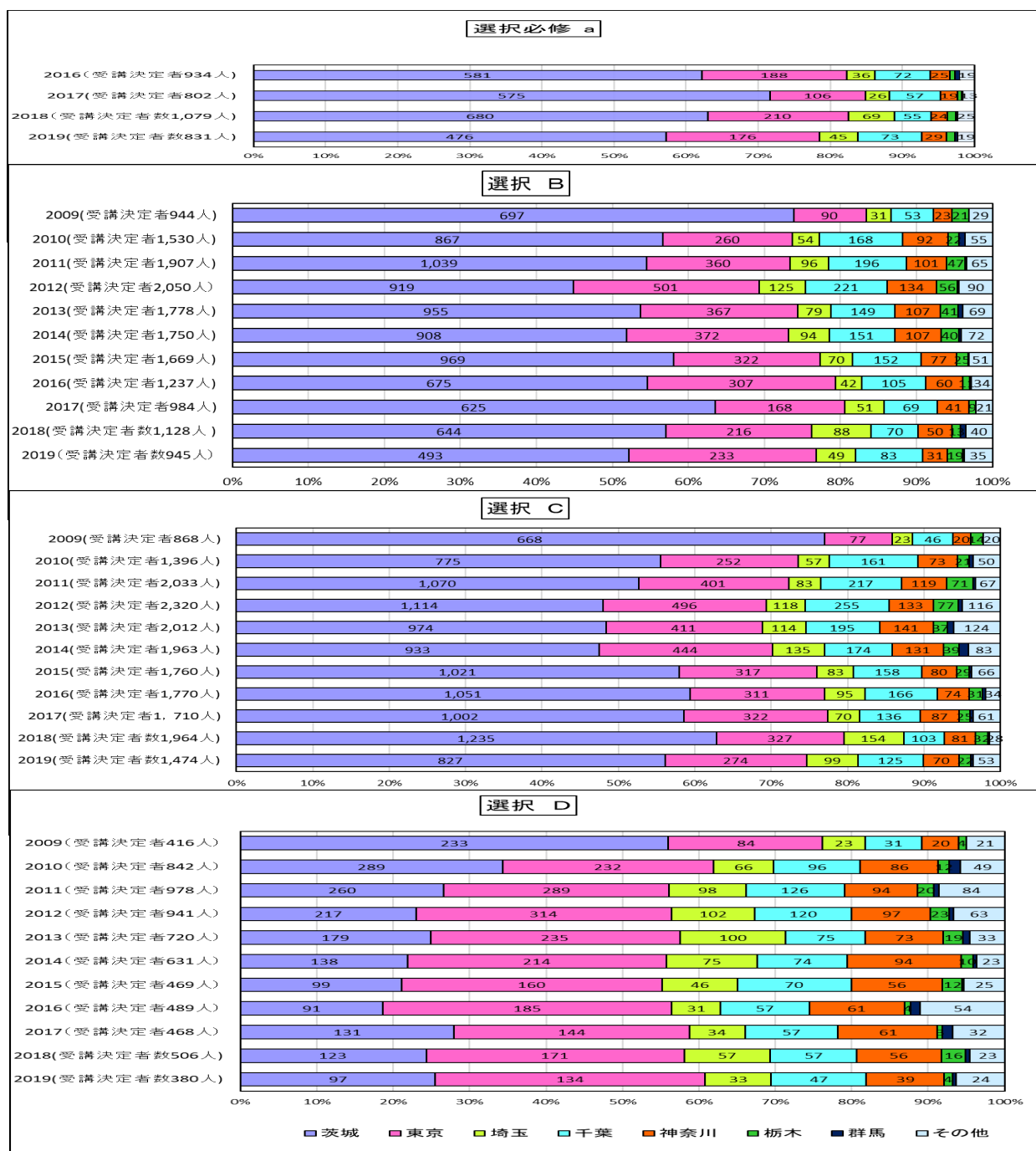


しかし、茨城県の受講者数は減少しているが近郊の関東圏の受講者数は大きくは変化していない。東京都は405人(内、昨年度より11人減)、千葉県157人(2人減)、神奈川県92人(24人減)、栃木県31人(11人減)となっている。

東京地区では、開催が夏季休業中のため、北海道から沖縄までの受講者がいる。

講習別に見ると、今年度の必修Aの受講決定者数は825人(198人減)、選択必修aの受講決定者数は838人(244人減)となった。昨年同様に、選択必修aの受講決定者は必修A講習の受講決定者を13人上回った。関東圏の受講率で見ると、茨城県内の受講者は、必修Aや選択必修aを680人前後受講している。必修科目は、近隣の大学で受講する傾向があり、東京都の受講者数も多い。この2都県で、必修A、選択必修aは、全体の約85%程度占める。全体的には昨年度と同様の傾向である。

一方、選択講習については、大まかには例年どおりの傾向であった。しかし、選択D講習の実践演習は、例年人気であるが、今年度は、定員に満たない講習があった。また、例年だと12月に開催される実践演習は、年度内更新講習単位取得のために駆け込みの受講者が多くいて定員を埋めていたが、今年度は非常に少ない申し込みとなった。これも、申込期日や受講期間が長い通信制の普及により、駆け込みの需要が少なくなったのではないかと推測できる。



4. 受講者評価書（事後アンケート）による評価の推移

（１）文部科学省指定の評価項目と本学独自の評価項目

更新講習では、講習を開設しているすべての開設機関において、文部科学省が指定した評価項目（以下、文科省指定項目）による総合的な評価を実施している。文科省指定項目による受講者評価書は、9つの視点からなる3項目（表2参照）、評価基準は表1のとおりで、4～1の中から該当する一つを選択する4件法で実施している。

本学では、平成24年度より文部科学省の許可を得て文部科学省の指定した様式を一部変更した。また、本学独自の評価項目（表3参照）を設定し、文科省指定項目の様式の下に評価欄を設けた受講者評価書（事後アンケート）を作成した（様式は資料参照）。受講者からの評価は、毎回、講習の終了時に回収している。平成24年度から使用している受講者評価書（事後アンケート）の評価項目は以下のとおりである。

表1 評価基準

◎ 本評価の基準は以下のとおりとする。

- | | |
|---|-------------------------------------|
| 4 | :よい(十分満足した・十分成果を得られた) |
| 3 | :だいたいよい(満足した・成果を得られた) |
| 2 | :あまり十分でない(あまり満足しなかった・あまり成果を得られなかった) |
| 1 | :不十分(満足しなかった・成果を得られなかった) |

表2 文科省指定項目の9つの視点と評価の3項目（Ⅰ～Ⅲ）

| | |
|----------|---|
| Ⅰ | 本講習の内容・方法についての(下記の5つの視点を踏まえた)総合的な評価 |
| ・ | 学校現場が直面する諸状況や教員の課題意識を反映して行われていた。 |
| ・ | 講習のねらいや到達目標が明確であり、講習内容はそれらに即したものであった。 |
| ・ | 受講生の学習意欲がわくような工夫をしていた。 |
| ・ | 適切な要約やポイントの指摘等がなされ、説明が分かりやすかった。 |
| ・ | 配付資料等使用した教材は適切であった。 |
| Ⅱ | 本講習を受講したあなたの最新の知識・技能の修得の成果についての(下記の4つの視点を踏まえた)総合的な評価 |
| ・ | 教職生活を振り返るとともに、教職への意欲の再喚起、新たな気持ちでの取り組みへの契機となった。 |
| ・ | 教育を巡る様々な状況、幅広い視野、全国的な動向等を修得することができた。 |
| ・ | 各教育活動に係る学問分野の最新の研究動向、これまでの研修等では得られなかった理論・考え方・指導法や技術等を学ぶことができ、今後の教職生活の中での活用や自らの研修での継続した学習が見込まれる。 |
| ・ | 受講前よりも講習内容への興味が深まり、教員としての知識技能の厚みや多様さを増す一助となった。 |
| Ⅲ | 本講習の運営面(受講者数、会場、連絡等)についての評価 |

表3 筑波大学独自の評価7項目（①～⑦）

| | |
|---|----------------------------|
| ① | 内容が自分のニーズに合っていた。 |
| ② | 自分のこれからの実践に生かせる内容であった。 |
| ③ | 講師の説明が分かりやすかった。 |
| ④ | 本講習の形式(講義・演習など)が適切であった。 |
| ⑤ | 本講習の受講者数が適切であった。 |
| ⑥ | 教室の広さや設備等の環境が適切であった。 |
| ⑦ | 申し込みから終了までのスタッフの対応が適切であった。 |

(2) 評価結果の分析

ここでは、文部科学省指定項目（項目Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）における11年間の評価平均の結果及び文部科学省が公表している全国の事後評価結果と本学の評価結果を比較して分析する。

1) 講習全体の評価

文部科学省が定めた評価指定項目はそれぞれ下記の内容を調査している。

- ・項目Ⅰ 講習の内容や方法について
- ・項目Ⅱ 受講者側の変容について
- ・項目Ⅲ 講習環境やスタッフの対応など運営面について

これら3項目の合計値を講習領域ごとに、全国と比較したグラフを以下に示す。なお、示したグラフは、全国の事後評価結果の確定値が、文部科学省からまだ公表されていないため、前年度の2018年度の全国の結果と、2018年度と2019年度の本学の結果を比較したものである。

本学独自の評価項目（1）の様式で既に示したとおり、以下の7つの項目を設定している。

- ① 内容が自分のニーズに合っていた。
- ② 自分のこれからの実践に生かせる内容であった。
- ③ 講師の説明が分かりやすかった。
- ④ 本講習の形式（講義・演習など）が適切であった。
- ⑤ 本講習の受講者数が適切であった。
- ⑥ 教室の広さや設備等の環境が適切であった。
- ⑦ 申し込みから終了までのスタッフの対応が適切であった。

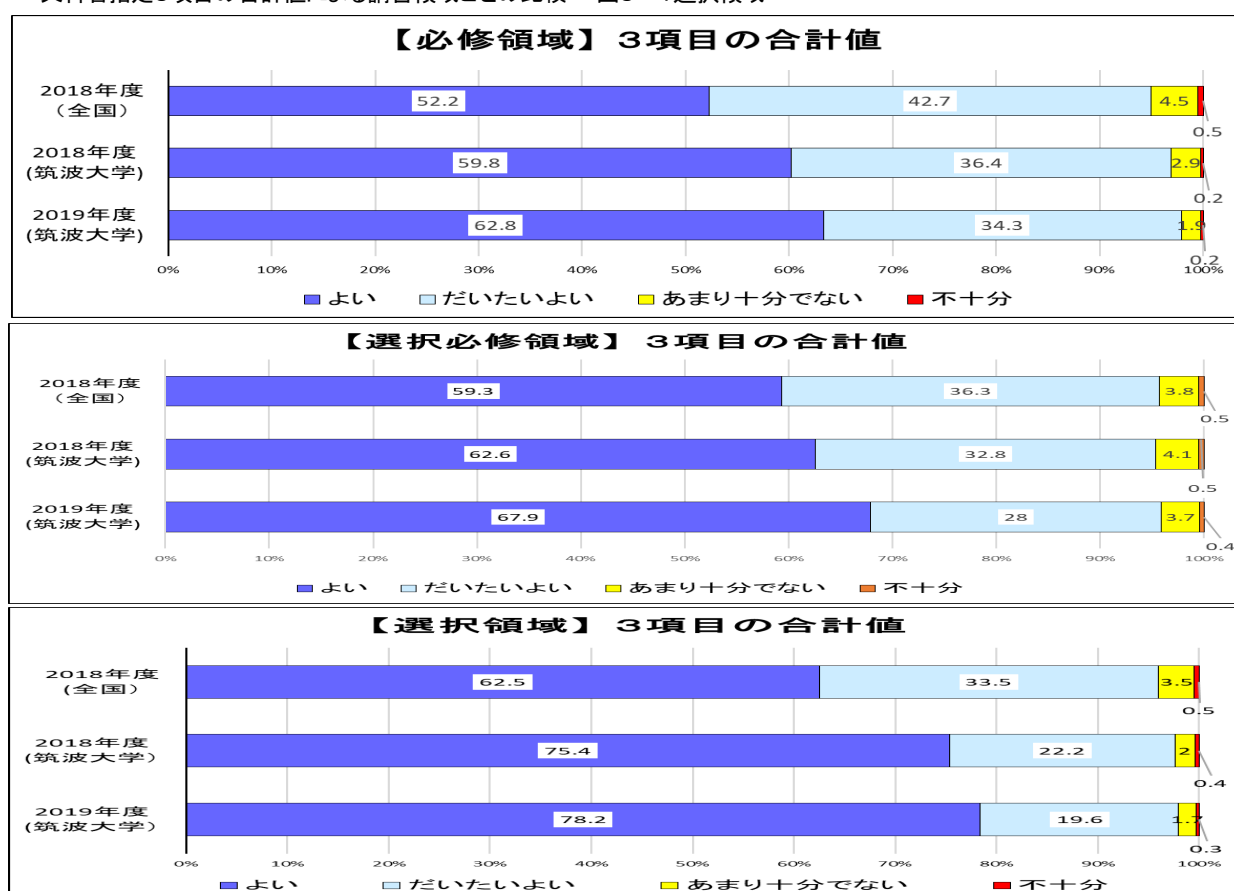
これら7つの評価項目は、文部科学省指定(以下文科省指定とする)項目をより具体的に示し、本学の更新講習の改善に役立てるために2012年度(平成24年度)から設定したものである。各項目の調査意図は次の通りである。

項目①, ②・・・講習の内容面の実態を把握するために設定している。

項目③, ④・・・講習を行う講師の対応の実態を把握するために設定している。

項目⑤, ⑥, ⑦・・・講習の運営面の実態を把握するために設定している。

文科省指定3項目の合計値による講習領域ごとの比較 図3-1選択領域

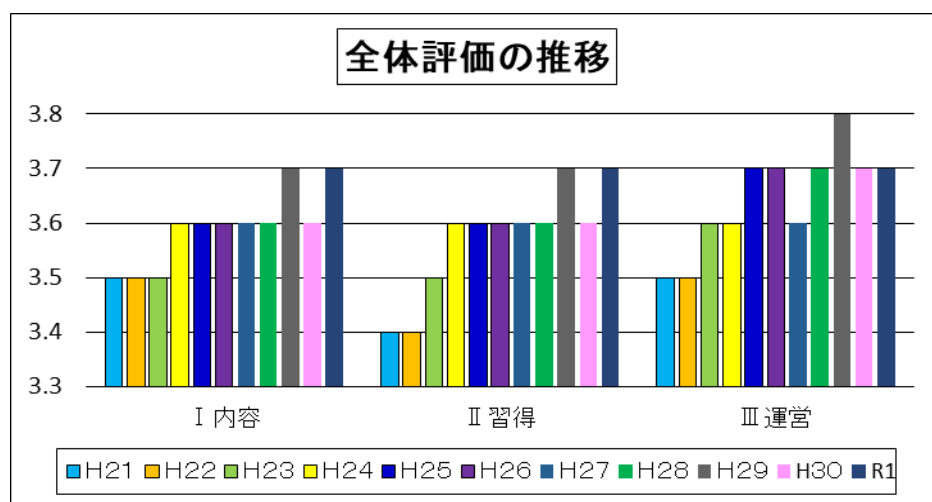


文科省指定 3 項目の合計値による講習領域ごとの比較については、2018 年度では、必修領域、選択必修領域、選択領域のいずれも全国の平均値を大きく上回っている。2018 年度は、2017 年度の全国平均と 2018 年度の本学の評価の差がほとんどなかったことを振り返り、改善点を見直したことにより、今年度は、必修領域、選択必修領域、選択領域において評価が上がっている。

文科省指定項目による本学の全体評価の推移を比べてみる。項目 I の講習内容や方法、項目 2 の受講者側の変容についても過去 11 年間の中の最高時の 3.7 ポイントとなっている。これらは、今までの事後アンケートの省察や事前アンケートを活用し、受講者ニーズを把握して、講師が講習に臨んでいることがうかがえる。

講習に当たっては、担当講師が、講習内容や講習形態など、受講者の要望を確認してそれぞれ工夫して提供しているので、項目 I・II での受講者の評価は安定してきている。各領域とも「よい」「だいたいよい」を合計の数値は、全国平均と本学とに差はあまりないが、本学では、各領域において、「よい」のポイントが高くなっていることが大きな成果である。

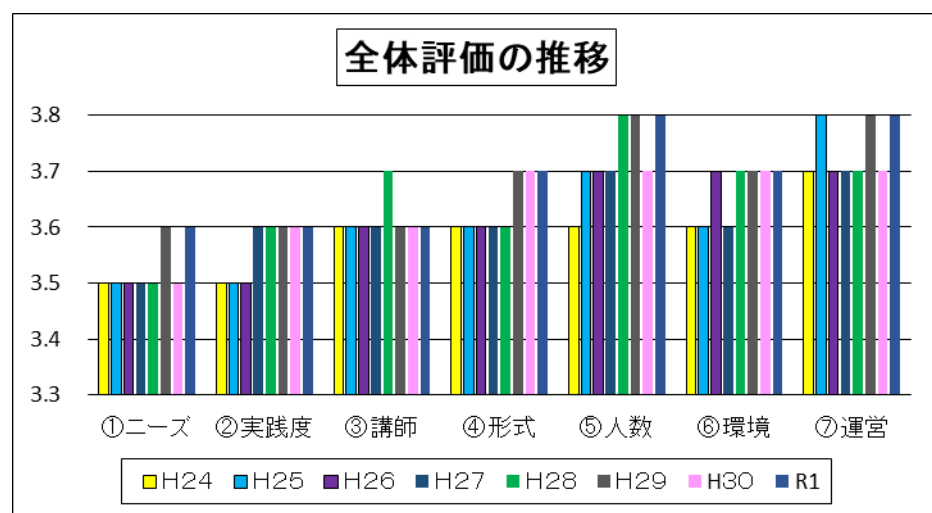
項目 I の内容についてだが、文科省指定項目を見ると、前年度より 0.1 ポイント上がっている。2018 年度と同様に一番高いポイントである。本学独自の項目（以下本学項目とする）でもニーズ、実践度、講師の説明については、3.6 ポイント、講習形式では 3.7 と講習内容に関するポイントは高くなっている。



文科省指定項目 2 の習得については、今年度は 3.7 ポイントに上がっている。

これは、通信型の講習ではなく、敢えて対面型を選択した受講者であるため、目的意識をもって受講していると考えられる。

また、文科省指定項目 III の運営面についても、3.7 ポイントと高い。本学項目の受講人数・運営では、3.8 ポイント、環境でも 3.7 ポイントと高い。これは、予備講習の段階から推進室を立ち上げ、講習に関する業務を専門に行う部署（教員免許状更新講習推進室）を設けて、受講者が 30 時間の講習を、希望する内容で、講習環境のストレスが少なく受講できるように運営方法を充実させてきた成果といえる。



昨年までは、対象者数が多くて希望する講習がすぐに定員に達してしまうという課題があった。茨城県等の事前調査により対象者数が減少することが分かったので、今年度は、4 講習分の数減らし、受講定員を 6638 人とした。実際のところ、受講者の申込状況については、開始日は（当初定員に対する割合は約 37%）の 2647 人で、最終的には 4,515 名（当初定員に対する受講者数の割合は約 68%）となった。今年度は、講習対象者減少について加味したが、大幅には定員数を減らさなかったことや、他の通信型の更新講習の利用者も増えたことにより、受講者数は減少したが、受講者側としては申し込みやすい結果となった。

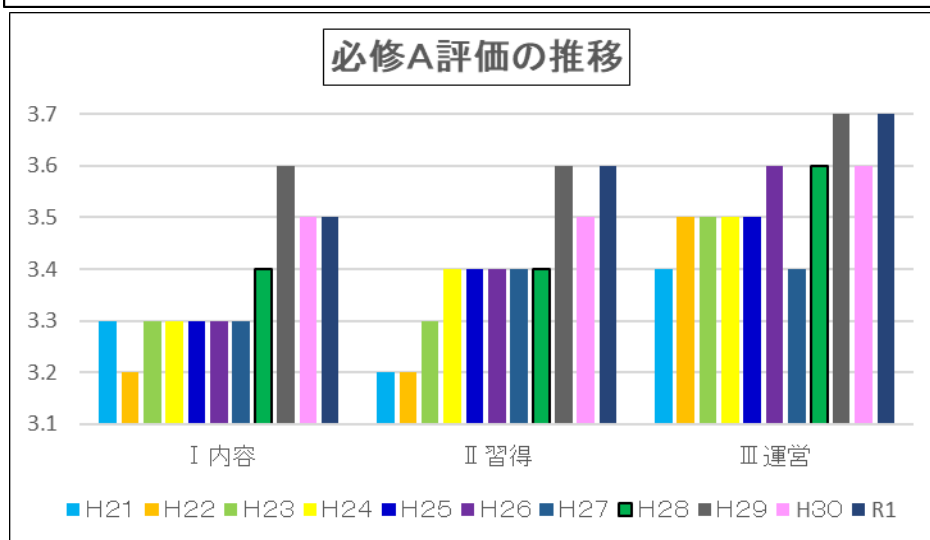
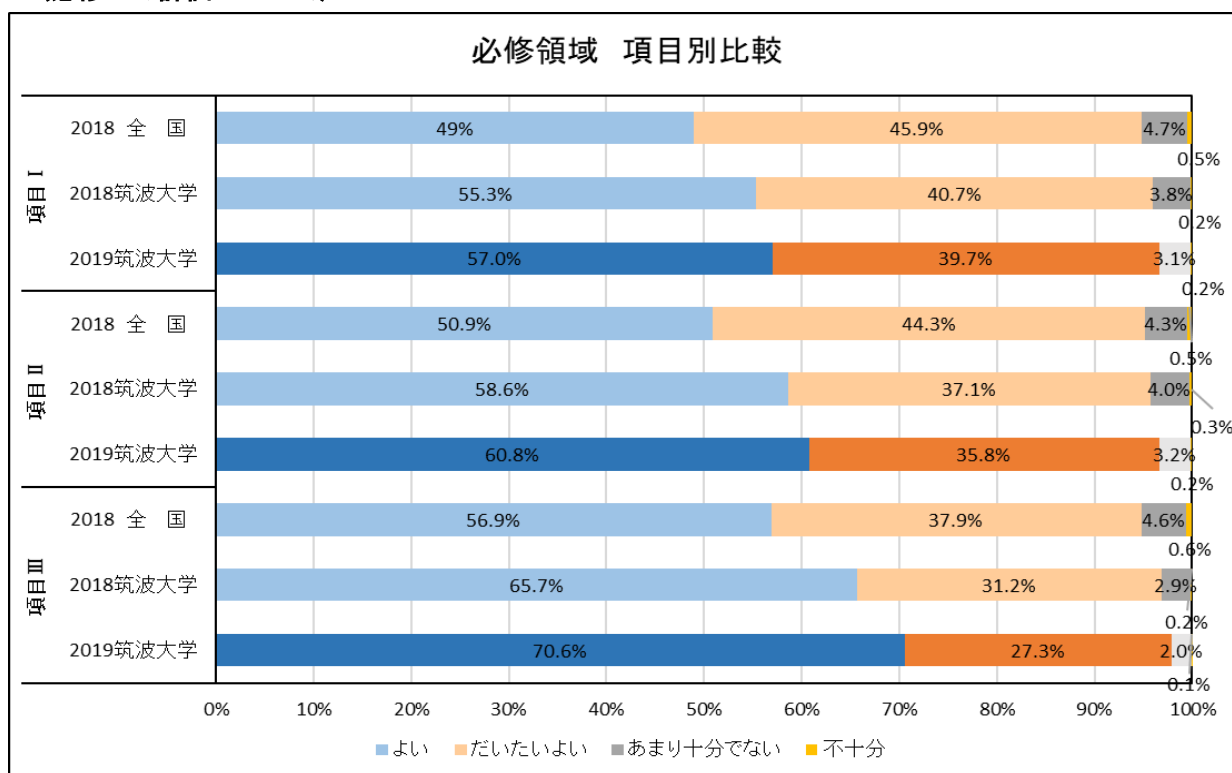
今年度の受講者は、現職の教員以外の受講者や 30 代の新免許状所持者、さらに 60 代の受講者が増えて幅広い層の受講者がいたことが分かった。現職以外の受講者(次期教職に就く予定者)に対しては、講習内容を授業に活かせるよう、また受講者の変容については経験の不足もあることから、具体的な活用例などを示していかないと実践化のイメージが掴みにくいので、講師の説明の工夫が必要になるだろう。

また、受講期は猛暑で、収容人数が多い階段教室では、場所による冷房の効き方に差があり、講習によっては環境面のポイントが低くなっている。気象状況は、不可抗力の部分であり、扇風機をレンタルするなどして対応しているが難しい面もある。

今後は、学校種別の区分や職種、さらに教員の定年延長に伴う 60 代の受講者割合の増加も含めて、受講者の年齢層等を考慮して講習内容や方法、受講者の意識高揚、運営面の三つの項目において充実・改善に向けて取り組む必要があると言える。

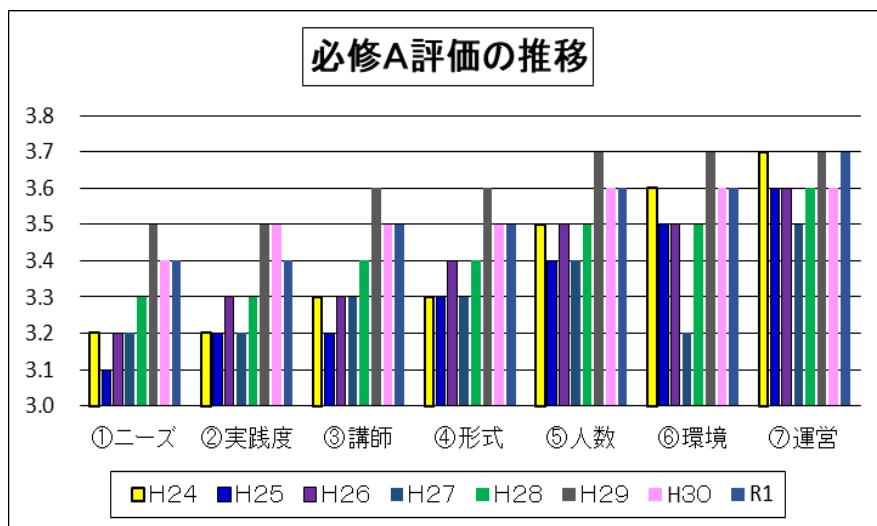
2) 領域ごとの評価

〈必修 A の評価について〉



必修講習に関する文部科学省告示上の事項は、「国の教育政策や世界の教育の動向」「教員としての子ども観、教育観等についての省察」「子どもの発達に関する脳科学、心理学等における最新の知見」(特別支援教育に関するものを含む。)
「子どもの生活の変化を踏まえた課題」である。本学の必修 A は「教育の最新事情」(共通)として 1 日(6 時間)

をそれぞれの 4 つの分野に分け、4 人の講師で分担し実施した。



必修 A は、受講対象者全員が必修の講習なので、6 時間で 4 分野を、学校種や教科、職種、さらに幅のある年代が受講する。担当する講師はすべてに共通する内容で講義しなければならないという難しさがある。

受講者については、幼保連携型認定こども園の幼稚園教諭免許を所持している保育教諭や、現在は勤務していないが今後教員として勤務予定である受講者など

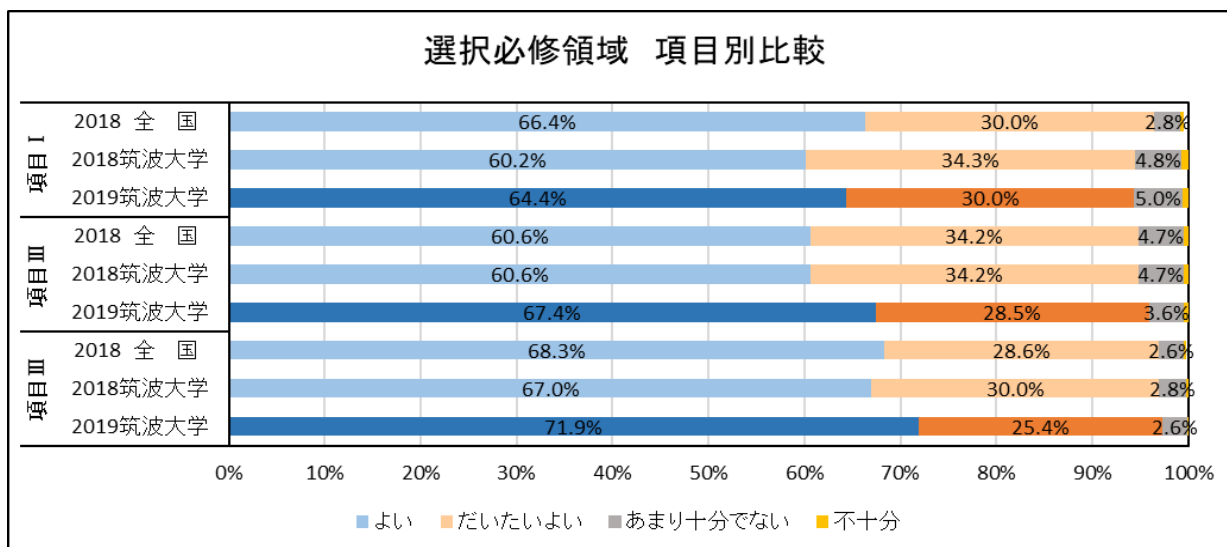
様々な受講者の割合が増えた。さらに 30 代の新免許状所持者や講師をしている 60 代の教員などの割合が増えた。このように様々な学校種で幅広い受講者が受ける必修講習において、講習の評価が全国と比較しても、今までの評価の中でも高いポイントであったことは大きな成果であった。

文科省指定項目の内容については、昨年度と同様の 3.5 ポイントで、習得・運営については、前年度より 0.1 ポイント上昇している。項目Ⅱの習得に関するポイントが上がっていることに注目したい。必修講習の担当講師の感想であるが、「今年度は認定試験の解答の平均値が上がったと感じた。」という。対面型講習を選択した受講者は、何かを修得したいという意識が高くなっていると思われる。

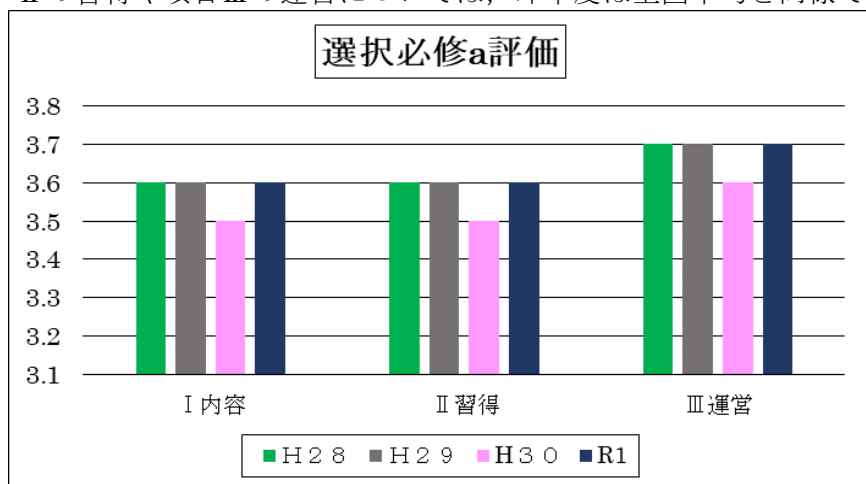
本学項目の評価は、実践度が 0.1 ポイント下がった。要因としては、前述した多様な学校種の受講者がいることが考えられる。

全国平均値と比較してよい評価だった要因について 2 つの面から考察してみる。担当講師側からみると、必修 A の担当講師はほとんどが昨年度から継続している担当者であり、昨年度の事後評価を基に講習の構成や受講者への説明などについて工夫をしていること。特に、本学では平成 29 年度から 4 つの分野を、各内容の専門家である講師が担当したことにより質の高い講習を実施することができている。その結果、受講者が納得できる講習内容と時間が確保できたことなどが要因として考えられる。また、2 クラスを入れ替わりで講義する形式であるので、2 回目は 1 回目の反応を基に多少の調整ができる利点がある。受講者側から見ると、教員免許状更新講習の必修 A を初回に受講する割合が高く、関心・意欲が高いこと。さらに、1 日で最新教育事情に関する 4 つの幅広い内容を集中的に学ぶことができ、受講者の集中力が途切れず受講できることなどが考えられる。

〈選択必修 a の評価について〉



選択必修講習は平成 28 年度（2016 年度）から導入されたので、4 年間の評価の推移を見ることになる。文科省指定項目の内容については、昨年度は全国平均よりも下がっていた。項目Ⅱの習得や項目Ⅲの運営については、昨年度は全国平均と同様で本年度は上昇している。



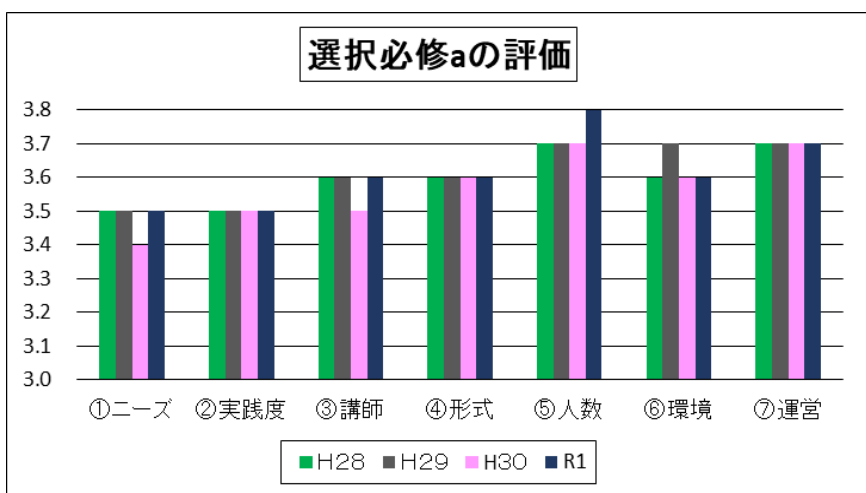
〈評価の推移〉

文科省指定項目の内容・習得・運営は、昨年度より 0.1 ポイント上がっている。本学の対応する項目においては、ニーズや講師説明で結果を見ると、0.1 ポイント上がっている。受講者の希望する講習を選択しているのでニーズが上がり、講師の説明に満足が行き、習得のポイントは上がったのだろう。

受講者人数については、定員に対する受講率が下がり各講習において余裕があったことで評価が上がったようだ。

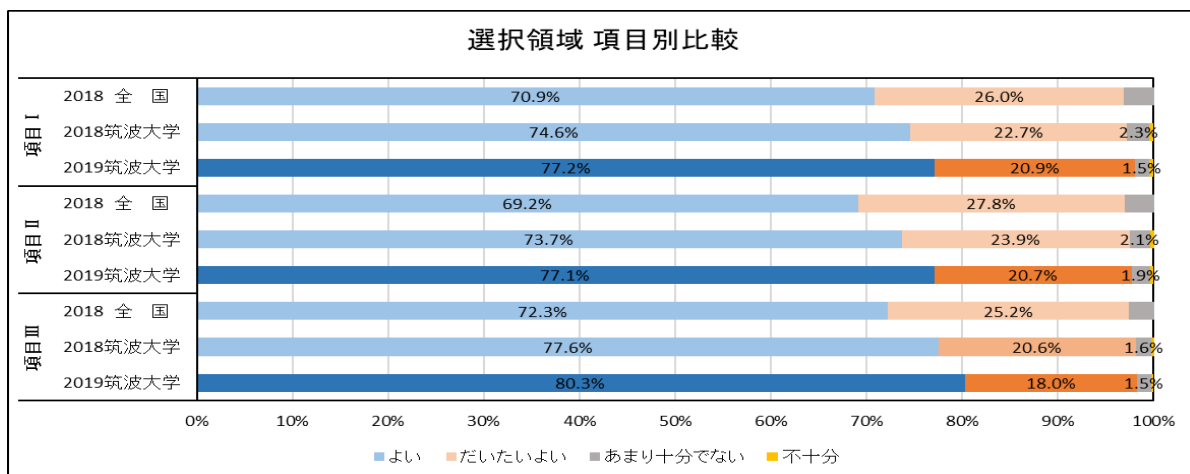
本学項目の中では講習内容や習得のポイントは上がったが、講習内容については「よい」と答えた割合が全国平均より約 2 % 低い。

選択必修講習で取り扱う事項については、14 事項あり、本学では、ほぼすべて

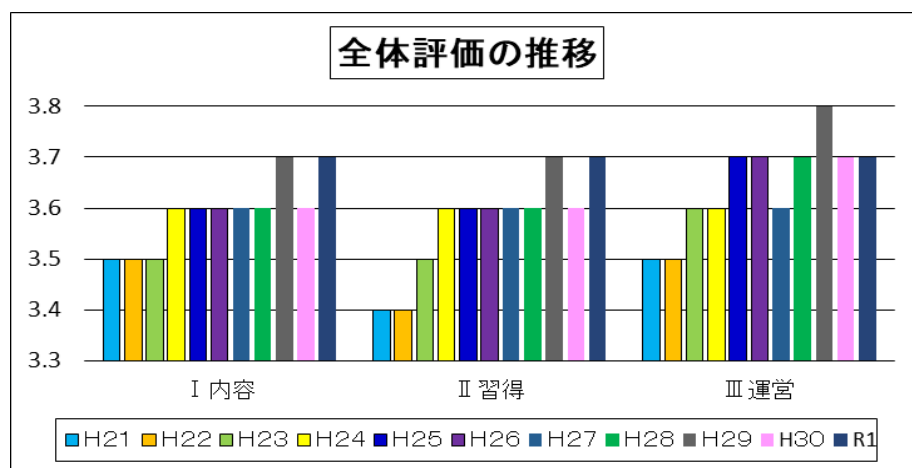


の事項にわたって開設している。受講者のニーズに幅広く対応できるようにするとともに、受講者定員を 1 講習 40～50 人に設定し、受講者の満足が得られるようにしたが、早期に定員に達する講習とそうでない講習との評価の差はある。選択必修領域の講習に対する評価が低いという課題については、今後も大学教員のみでは扱いが難しい事項等について、附属学校や県教育委員会との連携を一層重視したり、受講者ニーズの高い事項を優先的に開講したりするなど工夫・改善をしながら、継続的に実施することが重要である。

〈選択領域の評価について〉



〈選択領域全体の評価〉

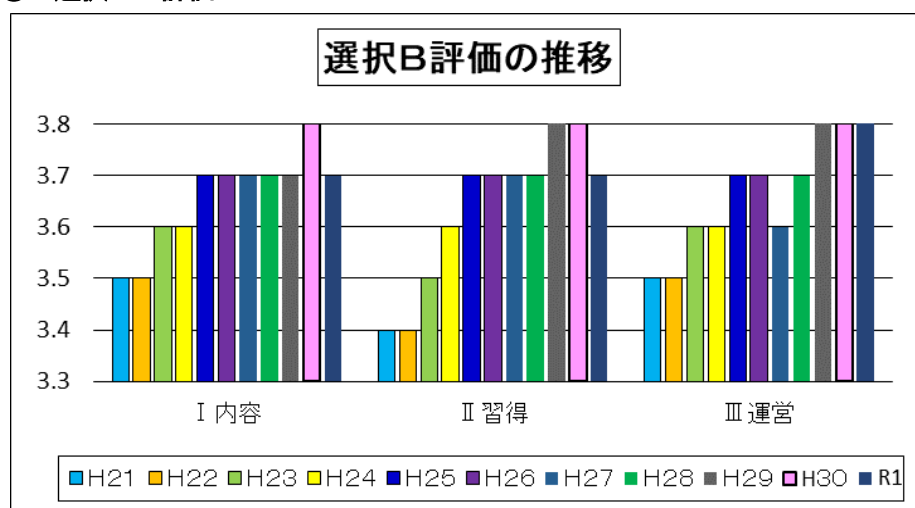


文部科学省告示上の選択講習は、「教科指導、生徒指導その他教育の充実に関する事項」と示されている。本学の選択講習は筑波カリキュラムとして選択講習を選択 B、C、D の 3 つの区分に分けて実施しているが、選択領域として 3 区分をまとめ、全国と比較した結果が先のグラフである。これを見ると、項目 I ～III すべ

てで本学が上回っていることがわかる。総合大学であるために幅広い内容の講習の開設や、附属学校を活用した実践的な講習など、受講者の多様なニーズに対応できる本学の強みが出ている。

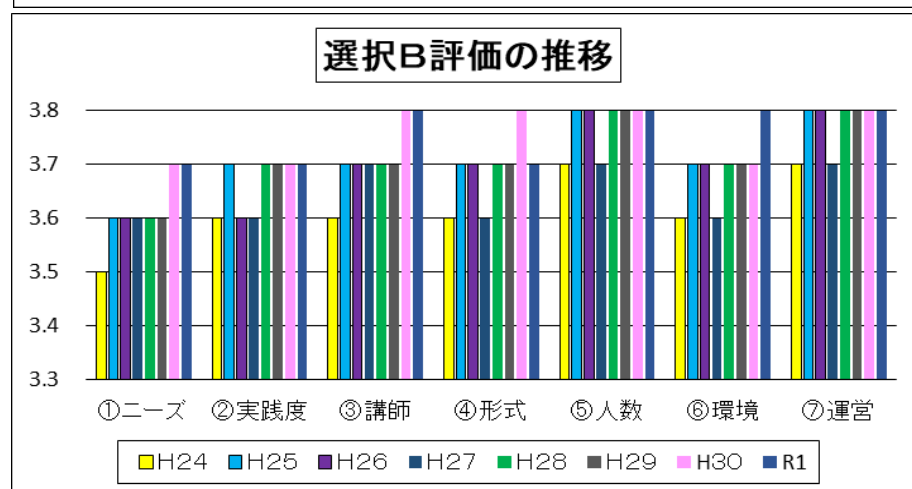
本学内での評価の推移については、文科省指定項目では、内容・習得・運営について 3.7 ポイントと高い。特に内容と習得については前年度より 0.1 ポイント高くなっている。次に各選択講習の評価結果を省察する。

① 選択 B の評価



選択 B は、「教科・領域の指導力を磨く」と題し、主に教科・領域に関する内容を扱っている。本年度は 31 講習（定員 1,267 人）を開講し、受講者は 945 人で受講率は約 74.6%であった。

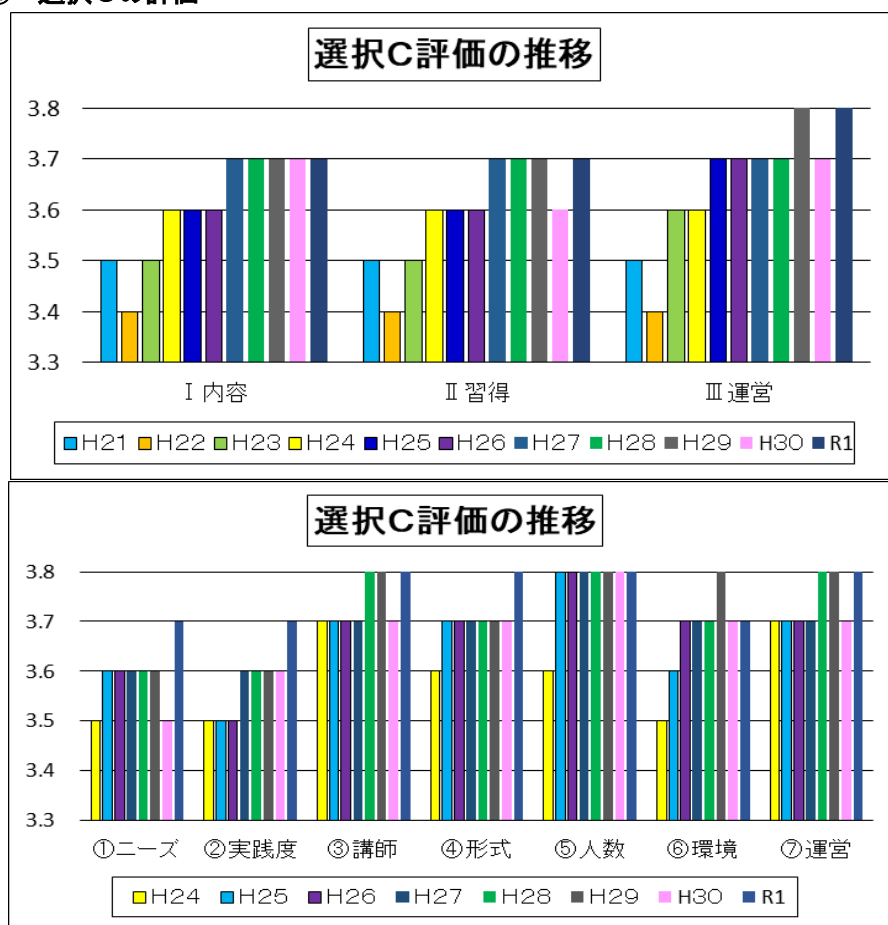
選択 B の評価は、文科省指定項目 I の内容・II の習得については、本年度は、前年度より 0.1 ポイント下がった。しかし、本学項目のニーズや実践度、講師では、前年度と変わらないが、ポイントが下がったのは、形式の項目であったが、昨年度を除けば、一昨年度以前と同様の評価であった。受講者数は、定員が 40 人前後の講習が多いので 3.8 ポイントと高い。また、ほとんどの講習に学生の講習補助者(TA)を配置しているので環境や運営面



も 3.8 ポイントと高い。この選択 B は、「教科・領域の指導力を磨く」領域で、指導法など現場で実践化しやすい領域であるにもかかわらず、ポイントが下がったことについては、受講者が具体的な実践化をイメージできなかったことが考えられる。今までも事前アンケートによる受講者のニーズは、担当講師に知らせているが、次年度からは、具体的な学校種・年齢の傾向などをまとめたデータを示して教科や領域、生

徒指導等に関する幅広い内容を提供するために、評価を基にした改善が図られるように講習の充実に努めたい。

② 選択Cの評価



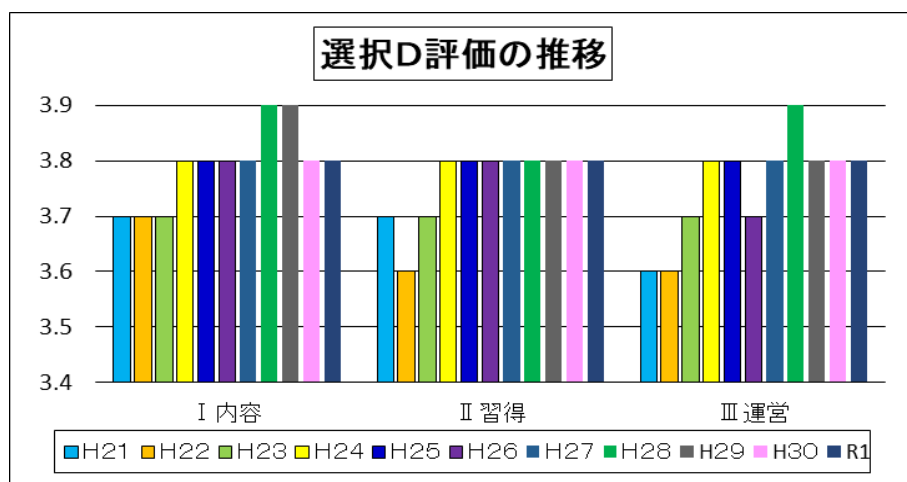
本学の選択 C は、「教師力（総合力・応用力）の向上」と題し、講師の専門分野の最新情報を学校教育と関連させて提供する講習としている。本年度は50講習（定員2,599人）を開講し、受講者は1,475人で、受講率は約56.8%と前年度の80.3%から大きく減少した。

本年度は、文科省指定項目Ⅰの内容・Ⅱ習得は、3.7ポイントで特に習得については、前年度より0.1ポイント上がりこれまでのポイントになった。本学項目においては、ニーズで0.2ポイント、実践度と講師の説明で0.1ポイント高くなっている。前年度は、受講者のニーズと講習内容について差があり課題であったが、

担当講師の工夫により改善されたといえる。講習の形式や運営の評価は、前年度から0.1ポイントあがり3.8ポイントと高評価を得ている。選択講習の運営は原則として担当講師と講習補助者（TA）が行っているが、受講者への様々な配慮が評価につながったものと考えている。

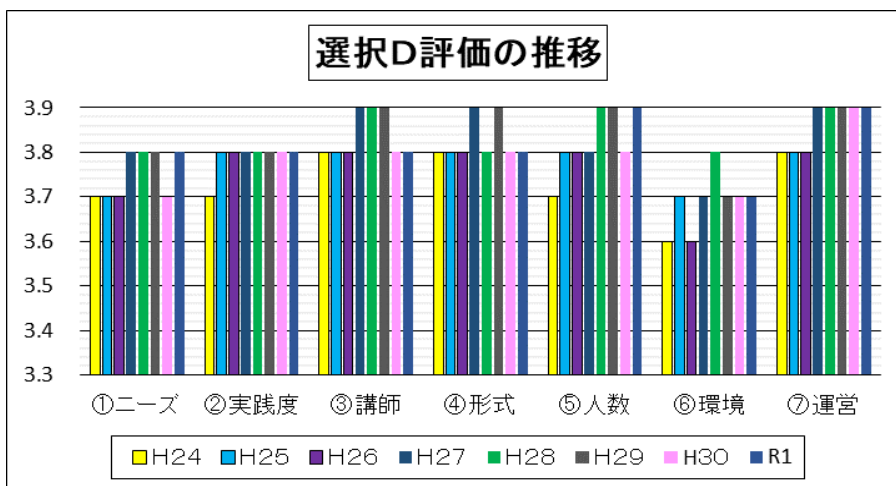
「総合大学」である本学が全学協力して開講している選択 C は、各講師の専門分野による最先端の講習内容が受けられることが特徴である。最先端で専門的な内容になることが多いため、講習の難易度には留意しなければならない。講習講師は、教職教育専門の講師ではないが、受講者がどのように学校の授業で活かせるかを分かりやすく伝える努力をしていかなければならない。受講者の多様なニーズに対応できるような内容の講習を幅広く、バランス良く準備することが受講者の「教師力の向上」につながると考えている。今後も本学ならではの選択 C の良さを活かしていきたい。

③ 選択講習Dの評価



本学の選択 D は、「附属学校実践演習」と題し、11校のすべての附属学校を会場とし実施しており、本学の更新講習の特色の一つとなっている。

今年度は、学校の改修工事のために、16講習が開設された。受講者は418人で受講率は約71.8%と低かった。各附属学校の理論を、子どもの姿を通



して実践的に示されるため、説得力のある人気講習であったが、今年度の受講率は学校差が大きなものとなった。

評価の推移については、文科省指定項目のⅠ内容、Ⅱの習得、Ⅲの運営については前年度と特に変わらず、3.8ポイントと高い。本学項目についても、ほとんどが3.8ポイントであり、受講者は満足していることが表

れている。

また、各附属学校を会場に実施するため、各附属学校はきめ細かに対応している。会場へのアクセスや施設・設備面などは十分ではないが、高評価を維持している。

前年度は、附属学校の発表会が重なった実践演習では、人数が多すぎるとの声が上がったので、今年度は、研修会と重なった講習をやめて、別日の定員を2倍にして対応したが、申込数が少なく、逆に「素晴らしい講習であるのでもっと大勢の受講者が集まるように周知するべきだ。」との声があった。

選択Dは、本学の特色の一つとして、受講者も期待している分、講習環境を整えて高評価が維持できるよう、附属学校の有効活用を図っていきたい。

〈事務局として〉

運営面の評価は、申込手続きなどの講習前の手続きと講習当日の円滑な運営及び快適な受講環境の提供が評価対象となる。

申込手続きについては、本学はWeb上で実施している。毎年度末に次年度の更新講習対象者に向けてシンポジウムを実施し、受講経験者をパネラーにいたパネルディスカッションや受講申込手続き等の説明を行っている。また、シンポジウムでの資料をHPに挙げて対応している。Web申込みに関する問い合わせは、50代・60代以降の受講者や現役ではない受講者が多い。丁寧な対応と申込みやすいシステムになるように充実を図っている。

当日の講習の運営は、一斉講習となる必修講習については事務局中心に、選択必修講習や選択講習では担当講師と講習補助者(TA)が中心となる。本学では講師対象の説明会を3回(筑波地区で2回、東京地区で1回)開催し、講習の流れや受講者の傾向・前年度の課題などの説明会を開催している。また講習補助者(TA)への説明会を2回(筑波地区のみ)開催している。受講者の実態(学校現場の様子)やTA経験者の話をまじえた具体的な業務内容について説明して講習運営等の周知徹底を図っている。その成果がより快適な受講環境として評価に表れている。

しかし、受講者の声の中で、教室によっては、スクリーンやITC機器の不備などが挙げられた。前日にプロジェクターや音声機器等のチェックを実施しているが、プロジェクターや音響設備の調整の対応がすぐにはできない場合もあるので、よりよい環境づくりのために関係諸機関とさらに連携していくように努めたい。

また、講習開催時期は、近年は猛暑が続いており、室温の調整が難しい。空調設備だけでは足りない場合は、レンタルするなどして環境を整備しているが、全ての座席に快適な温度調整にすることは無理があるので、受講者に情報提供をして協力を仰ぐことを進めていきたい。

5. 各講習の本年度の現状

(1) 必修A－教育の最新事情(共通)－

① 必修A「教育の最新事情」の概要

本年度の必修A「教育の最新事情」(共通)は、4講習(筑波地区で3講習、東京地区で1講習)実施した。筑波地区実施の講習10002と10003は、同一開講日で実施した。定員は、昨年度より200人減らして、1,000人に設定した。実施に当たっては、2017年度から各講習を2クラスに分けて講習事項の順番を入れ替える形で、午前・午後にそれぞれ2つずつ実施し、4つの事項を受講できるようにしている。また、講習前のオリエンテーション及び認定試験の運営については、1講習当たりの受講者数が多いため事務局スタッフが2人組で担当した。

受講者数は平均すると1,000人の定員に対して821人で受講率は約82.1%であった。傾向としては、筑波地区では講習番号順に受講者が多い。また、今年度は、欠席者が必修全体で5人と少なかった。

表 必修A 一覧 教育の最新事情(必修6時間)

| 開設地区 講習番号 | 講 習 事 項 | 開催日 | 講 師 | 定員 | 受講決 定者数 |
|--------------|--|------------|--------------|---------------|------------|
| 筑波 10001 | 子どもの生活の変化を踏まえた課題 | 6月22日 | 相川 充 | 250 | 239 |
| | 子どもの発達に関する脳科学、心理学等における最新の知見（特別支援教育に関するものを含む） | | 野呂 文行 | | |
| | 国の教育政策や世界の教育の動向 | | 川口 純 | | |
| | 教員としての子ども観，教育観等についての省察 | | 館 潤二 | | |
| 筑波 10002 | 子どもの生活の変化を踏まえた課題 | 7月27日 | 外山 美樹 | 250 | 237 |
| | 子どもの発達に関する脳科学、心理学等における最新の知見（特別支援教育に関するものを含む） | | 宇野 彰 | | |
| | 国の教育政策や世界の教育の動向 | | 川口 純 | | |
| | 教員としての子ども観，教育観等についての省察 | | 小山 浩 | | |
| 筑波 10003 | 子どもの生活の変化を踏まえた課題 | 7月27日 | 佐藤 有耕 | 250 | 110 |
| | 子どもの発達に関する脳科学、心理学等における最新の知見（特別支援教育に関するものを含む） | | 宮本 昌子 | | |
| | 国の教育政策や世界の教育の動向 | | 藤井 穂高 | | |
| | 教員としての子ども観，教育観等についての省察 | | 大野 新 | | |
| 東京 10004 | 子どもの生活の変化を踏まえた課題 | 8月20日 | 飯田 順子 | 250 | 240 |
| | 子どもの発達に関する脳科学、心理学等における最新の知見（特別支援教育に関するものを含む） | | 小島 道生 | | |
| | 国の教育政策や世界の教育の動向 | | 藤井 穂高 | | |
| | 教員としての子ども観，教育観等についての省察 | | 小林 美智子 | | |
| 合 計 | 4 講習 | 定員 1,000 人 | 受講決定者数 826 人 | 定員充足率 約 82.6% | |

② 必修A「教育の最新事情」（共通）の講習内容

本学の必修Aは、「教育の最新事情」（共通）と題し、文部科学省の講習区分に習い、4つの事項で構成している。講習は、1事項を1人の講師が80分間を担当して4事項を実施した。さらに試験時間を40分設定して6時間の講習とした。

下の表は、文部科学省で示している必修講習の内容と筑波大学の必修講習の内容の関係を示している。

免許状更新講習規則(文部科学省令)の講習区分と筑波大学の講習区分

| 領域 | 事項 | 取扱う内容 | 開設方法 | 筑波大学の開講区分 |
|----|---|-------------------------------------|-------------------------|--------------------------|
| 必修 | イ 国の教育政策や世界の教育の動向 | a 国の教育施策 | 事項欄に掲げた事項(取扱う内容)を網羅的に開講 | 【必修A】 教育の最新事情 (共通) |
| | | b 世界の教育の動向 | | |
| | ロ 教員としての子ども観,教育観等についての省察 | c 子ども観,教育観等についての省察 | | |
| | | d 教育的愛情,倫理観,遵法精神その他教員に対する社会的要請の強い事柄 | | |
| | ハ 子どもの発達に関する脳科学,心理学等における最新の知見(特別支援教育に関するものを含む。) | e 子どもの発達に関する脳科学,心理学等の最新知見に基づく内容 | | |
| | | f 特別支援教育に関する新たな課題(LD,ADHD等) | | |
| | 二 子どもの生活の変化を踏まえた課題(網掛け部分はいずれかの内容を含んでいれば可) | g 居場所づくりを意識した集団形成 | | |
| | | h 多様化に応じた学級づくりと学級担任の役割 | | |
| | | i 生活習慣の変化を踏まえた生徒指導 | | |
| | | j 社会的・経済的環境の変化に応じたキャリア | | |
| | | k その他の課題 | | |
| | | l カウンセリングマインドの必要性 | | |

次に6月22日に実施した必修A講習の様子について、講習補助者からの報告等を基に簡単に紹介する。

【講習名】必修A「最新の教育事情」1 【実施日】令和元年6月22日(土)

【講習テーマと担当講師】

- | | |
|---------------------------------|----------|
| ① 「子どもの発達に関する脳科学,心理学等における最新の知見」 | 講師:野呂 文行 |
| ② 「子どもの生活の変化を踏まえた課題」 | 講師:相川 充 |
| ③ 「教員としての子ども観,教育観等についての省察」 | 講師:館 潤二 |
| ④ 「国の教育施策や世界の教育の動向」 | 講師:川口 純 |

【講習形態】

受講者数は160名で、オムニバス形式の講義で4コマ(1コマ80分)と40分の認定試験の計6時間の講習が実施された。

【講習内容】抜粋

「子供の生活の変化を踏まえた課題」 相川先生

授業内容は、生徒に安心と希望を与える教師になる方法でした。先生のご専門であるソーシャル・スキルについて説明された後、教師として具体的にどう実戦に活かしていくかというお話をされました。先生の子供の話など私的体験も交えながら説明され、大変わかりやすい講習でした。ただ、マイクの音量をもう少し上げた方がより鮮明に聞こえたと思いました。

「国の教育政策や世界の教育の動向」 川口先生

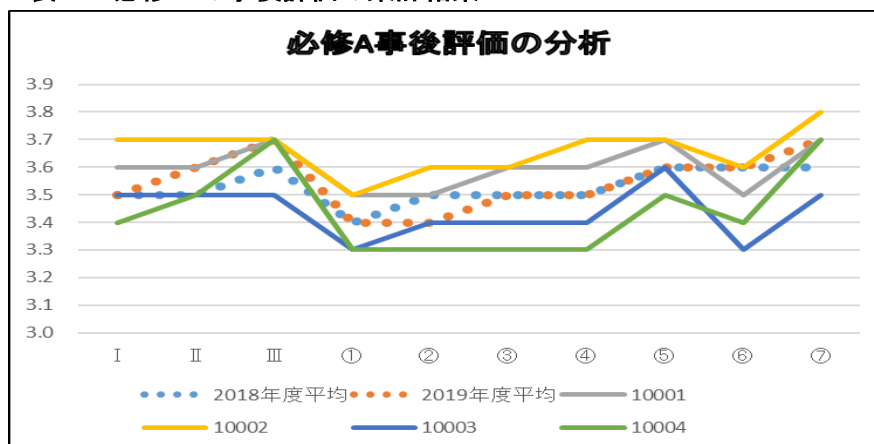
授業内容は、主にPISAの結果と日本の政策策定状況から見る日本の生徒の成績、幼児教育、成人の学力、教員の仕事内容の国際比較でした。先生独特のユーモアで常に受講者を笑わせ、終始和やかな雰囲気の中で授業が行われました。また、受講者にマイクを渡して意見を聞く場面もいくつかあり、質問が少し難しかったようですが、ほとんどの方が悩みつつも自分なりに考えて答えていました。先生のご専門のアフリカでの話に興味を持った方が多かったように見受けられました。

【課題】

- ・プロジェクターの不調により、スクリーン画面の色の調整が悪い時間帯があった。前日に確認をしても当日映らないということもあり得ると思うので、予備のプロジェクター、パソコン、ケーブル、延長コードを当日1限前に部屋に準備しておくべきだと感じた。(本部に取りに戻っている時間がタイムロスであるため)
- ・特別な配慮という点では問題なかったと考えるが、皆さんがロクにおっしゃっていた「寒い」「暑い」という声に言われる前に即座に対応できるよう、こまめに冷房の調節が必要だ。
- ・部屋に備え付けのマイクが機能せず、受講者に指名するときにハンドマイクを先生→受講者→先生とリレーのように動き回って渡さなければならず苦労した。マイクは2種類使えた方がいいと思う。
- ・女子トイレが休憩時間に混み、焦る方々が多かったので、他の階のトイレへの誘導をした方がいいと思う。

③ 必修A「教育の最新事情」に対する事後アンケートの分析

表2 必修Aの事後評価の集計結果



ここでは、必修Aの評価について、さらに詳細な分析を加えてみる。

今年度の必修Aの事後評価の平均と各講習の事後評価を項目ごとに比較したものが左のグラフである。

- | | | |
|-----------|-----|---|
| 文科省指定評価項目 | I | : 本講習の内容・方法についての総合的な評価（内容） |
| | II | : 本講習を受講したあなたの最新の知識・技能の修得の成果についての総合的な評価（習得） |
| | III | : 本講習の運営面（受講者数、会場、連絡等）についての評価（運営） |
| 本学独自の評価項目 | ① | : 内容が自分のニーズに合っていた。（ニーズ） |
| | ② | : 自分のこれからの実践に生かせる内容であった。（実践化） |

- ③ : 講師の説明が分かりやすかった。(講師)
- ④ : 本講習の形式(講義・演習など)が適切であった。(形式)
- ⑤ : 本講習の受講者数が適切であった。(受講者数)
- ⑥ : 教室の広さや設備等の環境が適切であった。(環境)
- ⑦ : 申し込みから修了までのスタッフの対応が適切であった。(対応)

○ 全体的な評価(昨年度との比較)

本年度の必修 A 全体の評価は、項目Ⅱ(習得)Ⅲ(運営)⑦対応において、昨年度を 0.1 ポイント上回りよい評価である。

項目①のニーズについては、講習により差が出る。これは、講習を受講者の学校種等により評価が異なる。必修講習は、受講内容を網羅するために講習としては一斉授業の形式とならざるを得ない。対象受講者の学校種は、幼稚園から高等学校までと広いが、講習内容の具体例は小中学校に勤務する受講者が中心となる事例が多くなる。そのため、幼稚園教諭の割合が多い講習では項目①ニーズや②の実践化が他項目と比較すると低くなっている。

項目⑥の環境については、温度管理が課題となっている。近年は猛暑続きで多くの受講者を受け入れるために階段教室を使用している。座席位置によって冷房の利き方が異なること、中央の座席はかなり暑く感じたことなどがアンケートに寄せられた。暑さ対策として、受講日の天気予報に応じて扇風機をレンタルして対応したが、室温の調整は難しかった。

必修講習は、4 事項を各分野の専門の講師が担当する。講師 1 人当たりの担当時間が 80 分であることと 1 クラスの受講者数が 125~175 人と多数であるため、どうしても講師中心の講義となってしまう。そのような中で、担当講師は、受講者が知りたい情報・実践に活かせる情報を講習内容に活かせるようにしている。受講者が求めている情報は、本学では事前アンケートという形で、web 申し込みの際に記載してもらい、それを推進室がまとめて担当講師に送っている。全ての職種・学校種が対象の講習であるが、担当講師の工夫により、分かりやすく受講者のニーズに合った内容になっていた。特に 10002 の講習の受講内容や実践化、授業形式については、評価が良かった。これは、講習の各事項の中で「これまでの実践を振り返る」時間を設定し、「これからの実践を支える知見を得る」ことができるように授業構成されていたため、受講者の関心・意欲が高まり、よい結果を得た。

また、2020 年の新学習指導要領の全面実施が近づき、受講者が教育の最新情報に関心があり、かつ対面型の大学の講習を選択しているという意欲の高さが高評価の要因となっている。

○ 受講者からのコメント

ここでは、第 1 回の講習の事後評価書(事後アンケート)から、プラス評価とマイナス評価に分けて、受講者のコメントを紹介する。

・プラス評価の主なコメント(一部抜粋)

- ・小・中・高の教員向けの講習のように勝手に感じていましたが、実際参加して幼児教育にも役立てられる内容が、とても興味深かったです。更に、講師の先生方の実体験を話していただき、より楽しく分かりやすく聴くことができました。
- ・会場案内も分かりやすく、ありがたかったです。
- ・学生気分に戻り、興味深い講義が沢山あった。対象が中学生教諭のものが多く感じたので可能であれば幼稚園教諭に深く関係しているものもあるといいと思った。ソーシャルスキルや子どもの発達に関する講義はとても参考になった。
- ・どの講義もとても勉強になりました！特にソーシャルスキルについての講義は現在子育て中である自分にとって、教育の現場で活用するだけでなく、自分の子育てにも役立てられるようなヒントがいっぱいで大変ためになりました！

- どの講師の先生もとてもおもしろく、素晴らしい講義で本当に充実した時間となりました！ありがとうございました！
 - 教師としての熱い思いを感じることができました。”
 - 今、現場で困っている事の、ヒントが得る事ができて良かったです。ありがとうございました。
 - 資料が充実していた。
 - 専門的な内容を、分かりやすい言葉で説明してくださり、とても楽しく講義がきけました。ありがとうございました。
 - 丁度、10年前初めて筑波大学で講習を受け、その対応の良さから今回も受けさせていただきました。10年前とかわらず丁寧な対応、講師の方の熱量を感じることができ、一回も眠りませんでした。他の講座も受けたいと思います。
 - 各講師の先生方が熱心に教えてくださり、時間が足らず、足早に進んだ気がした。もっと、お話を聞き、最新の動向等、教えていただきたい。学校現場に来ていただいて、お話いただければ、元気、やる気が出ると思いました。
 - 筑波大に来るまでや大学内に入ってからでも教室までの案内看板があつて迷わずにすみ、とてもありがたかったです。
 - 教室の広さ適当。進行も問題なく良かったです。
 - 最初のプロジェクター不具合にも迅速に対応していてよかった
 - 普段は保育園に勤務しているので、小学校などの話を聞いて分かるだろうかと不安でしたが、子どもと関わる職業としては同じなので、共通する部分もあり勉強になりました。すでに知っていることから、新しく知ることもあり、参加できて良かったと思える時間を過ごすことができました。
 - 今まで自分が積み重ねてきた経験や学びと、時代の変化に伴い必要なスキルや知識、考え方がつながり、とても有意義な1日でした。不易と流行を大切に、子どもたちのためにこれからも自己研修と現場実践を頑張っていきたいです。
 - 職種が特殊なため実際の仕事につなげられるものが少なかったが、世の中の事情がわかり、実のある講習でした。
 - 3人掛けにフルだとキツイので、2人掛けになってよかった
- クラス分けの名札が2色に分かれていてわかりやすかった。トイレ表示もわかりやすかったです。はじめに、事後アンケートをいただいたので見通しがつきやすくよかった。ありがとうございました。
- 複数の大学の講習をうけましたが、貴学が最も丁寧で対応が良かったので、本日も参加しました。
 - 文京学習センターは駅から近く、設備も使いやすく良かったです。
 - 長年、特別支援学校に勤務しているので「教育の最新事情」において、幅広い視野から講義を受けることも大事なと思った。(他校種の先生方とともに)他大学での受講もしてみたがクーラーのきいた部屋にずっと座っていることがふだんないので、とにかくそれがつらかった。その点、ここは、クーラーがききすぎず救われた。スクリーンに字幕が出るのが役立ちました。

・ 課題点の主なコメント（一部抜粋）

- 10年前に受講した時よりも、改善されていて、講義もとても良かったです。80分という枠は、教員は慣れていないので途中休憩をはさんでいただけるとありがたいと思いました。時間切れで説明がなくなることがあり残念でした。
- 授業内容に対しては熱い思いが伝わって十分なのですが、先生の授業で受講者が50代、40代、30代、とおっしゃっていたのですが、60代もいることも忘れないでくださいね。
- 講習の中には、分かりきっている初歩的なものもありました。多数の人が受講するので、無理かもしれませんが、キャリア(年齢)によって受講するものを区別するのも、一つの方法かなと思いました。
- トイレは混んで休憩時間で間に合うか心配してしまった。
- 講義の内容は大変役に立つものでした。テスト時間が短く、ほぼ書き殴りになって見直す暇もないのがどうかと思います。(私の教員としての国語力が足りないのでしょうか…)せっかく良い講義をしていただいているので、よく考えてちゃんとした文章にしたいので…。
- せっかくの良い講義なので、質問の時間があっても良いと思う。
- 4つの講義を一つのアンケートで評価するのは難しい。

- ・窓がわだった為、冷房がききすぎていて、カーディガンを着ていましたが、寒かったです。冷房のきき具合について助言があっても良かったかも・・・。
- ・暑い季節なので、自動販売機が教室の近くにあると良いかなとも感じました。
- ・午後2コマ目の演習は人数が多すぎと思いました。この規模のグループワークは難しいと思います。
- ・昼食を食べられる場所がもう少し広い(ある)と思います。(例えば教室で食べてよいなど)狭く混雑していた。
- ・室内が暑かったです。途中から努力してくださっていることは感じられたが、それでも暑かった。

受講者のコメントから、講習内容面、運営面、日程に関する事等に分けて振り返ってみる。内容面では、学校現場で課題となっていることに近い内容を扱い、受講者が興味関心をもって受講している様子が分かる。コメントにもあるように幼稚園から高等学校までの受講者が同一の講習を受けるが、担当者の工夫によりどの学校種でも活かせる講習となった。

2 巡目以降の特徴としては、受講者の年齢の幅が広いということである。次の表は、年齢と学校種による受講者数であるが、30代の受講者が増えたことや、60代以上の受講者もいることが分かる。このようなことを踏まえて、話す速度や音量、文字の大きさ等にも気を配りたい。

| 科目別受講者層(学校種・世代・性別) | | | | | | 0人 | 5人～9人 | 10人～14人 | 15人～ | | | | | | | | |
|--------------------|--------------|-----|-----|-------------|-------------|-------------|----------------|--------------|----------------|----------------|--------------|----------------|---------------|----|------------------|----------|-----|
| 講習科目名 | 受講者数 | 内訳 | | | | | | | | | | | | 合計 | | | |
| | | 世代 | 性別 | 幼稚園に勤務している者 | 小学校に勤務している者 | 中学校に勤務している者 | 義務教育学校に勤務している者 | 高等学校に勤務している者 | 中等教育学校に勤務している者 | 特別支援学校に勤務している者 | こども園に勤務している者 | 認定こども園に勤務している者 | 認可外施設に勤務している者 | | 幼稚園と同一設置に勤務している者 | その他(非現職) | |
| 10001 | 【必修】教育の最新事情1 | 238 | 30～ | 男 | 0 | 9 | 4 | 1 | 8 | 0 | 7 | 0 | 0 | 0 | 2 | 31 | 102 |
| ～39 | 女 | 2 | 12 | 11 | 2 | 7 | 0 | 8 | 0 | 13 | 0 | 16 | 71 | | | | |
| 40～ | 男 | 0 | 0 | 6 | 0 | 6 | 0 | 6 | 0 | 5 | 0 | 0 | 0 | 7 | 24 | 53 | |
| ～49 | 女 | 2 | 12 | 2 | 1 | 2 | 0 | 5 | 0 | 2 | 0 | 3 | 29 | | | | |
| 50～ | 男 | 0 | 14 | 3 | 1 | 6 | 2 | 5 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 33 | 66 | | |
| ～59 | 女 | 0 | 16 | 4 | 0 | 8 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 33 | | | |
| 60～ | 男 | 0 | 2 | 3 | 0 | 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 9 | 14 | | |
| | 女 | 0 | 3 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 5 | | | |
| 合計 | | | | | 4 | 68 | 33 | 5 | 40 | 4 | 31 | 0 | 15 | 0 | 35 | 235 | 235 |

今年度同様、来年度も受講者数が多いことが見込まれている。受講者の意識の高め方としては、効果的な方法を担当講師と共有していくとともに、オリエンテーション等において事務局側からも受講者に向けて講習の意義等を説明するなどして意欲を高められるようにしたい。

また、運営面では、申込時の Web 上の操作については改善しているので特に問題はなかった。筑波地区は大学内が広いので講習会場が分かりにくいのが、運営側の努力により解消できている。使用機材等については、事前点検を行い、万全を期しているのだが、PC との相性等でうまくいかないこともあった。受講者の期待に応えられるように運営側の改善を心掛けたい。

しかし、空調については、広い教室での猛暑対策として、運営側も空調の調整や施設点検を入念に実施していくとともに、冷房の状態は座席により差があること、教室の椅子が硬いことなどの情報を提示し、受講者側の協力を受けて講習を共に作り上げていくようにしていきたい。

日程に関しては毎年様々な意見をいただくが、今年度は意見がなかった。日程の都合が合わない場合は、通信型の講習を選択しているためだと思われる。

必修講習は、1日で4つの領域を4人の講師が担当しているため、一斉授業となることが多い。しかし、対面型のよさを生かすグループ協議の時間や場所の環境を整えることは、受講者数が多いので中々難しい。対面型のよさがいかに策としては、要望にもあったように、質疑応答の時間も多少入れることであろう。今年度も、講師の交替時間に、受講者が質問をするために多くなっている様子が見受けられた。

(2) 選択必修 a ー教育の最新事情(現代の教育課題等)ー

表 第1回選択必修 a ー覧

● 会 場 筑波キャンパス (2 講習) 6 月 23 日(日)

| 講 習 名 | 講習 番号 | 講 師 | 定員 | 受講決 定者数 |
|--|----------|---------------------|-----|------------|
| 学習指導要領の変遷と学校教育をめぐる今日的課題 | 10005 | 蒔苗 直道・江口 勇治 | 100 | 81 |
| 「教育法規と教育政策を理解する」及び「学校における危機管理上の課題」 | 10006 | 濱本 悟志・大谷 奨 奥谷 雅恵 | 50 | 21 |
| 合 計 2 講習 定員 150 人 受講決定者数 102 人 定員充足率 約 68% | | | | |

表 第2回選択必修 a ー覧

● 会 場 筑波キャンパス (14 講習) 7 月 6 日(土)・7 日(日)・20 日(土)・21 日(日)

| 講 習 名 | 講習 番号 | 講 師 | 定員 | 受講決 定者数 |
|---|----------|-----------------------------|----|------------|
| 国際バカロレア教育と日本の教育課題 | 10007 | 川口 純・犬飼 キャロル | 40 | 36 |
| 次期学習指導要領が求めるキャリア教育の在り方 | 10008 | 藤田 晃之 | 50 | 14 |
| 開かれた学校 | 10009 | 上田 孝典・小田倉 稔 | 40 | 38 |
| 道德教育の最新動向-「考える道德」・「議論する道德」へ- | 10010 | 田中 マリア | 50 | 49 |
| 学校を巡る近年の状況の変化 | 10011 | 樋口 直宏・岡本 智周 | 50 | 48 |
| すぐに役立つ、児童生徒の望ましい人間関係づくりを身につけよう | 10012 | 青山 晴美 | 40 | 39 |
| アクティブ・ラーニングの理論と方法 -主体的・対話的で深い学びの成立を目指して- | 10013 | 唐木 清志 | 40 | 37 |
| いじめ・不登校の理解と対応 | 10014 | 濱口 佳和 | 80 | 77 |
| カリキュラム評価から見たカリキュラム・マネジメント | 10015 | 根津 朋実 | 40 | 0 |
| 開かれた学校 | 10016 | 手打 明敏・小田倉 稔 | 40 | 29 |
| 学校を巡る近年の状況の変化 | 10017 | 田中 統治・京免 徹雄 | 50 | 12 |
| グローバル時代の教育課題 | 10018 | 平田諭治・タスタンベコワ クアニシ 菊地 かおり | 50 | 32 |
| コミュニケーション能力の定義をもとにした英語教育の基本的認識と指導補法概論 | 10019 | 野口 敏郎 | 40 | 8 |
| すぐに役立つ、児童生徒の望ましい人間関係づくりを身につけよう | 10020 | 青山 晴美 | 40 | 40 |
| 合計 13 講習 (14 講習の内 1 講習不開講) 定員 650 人 受講決定者数 459 人 定員充足率 約 70.6% | | | | |

表 第3回選択必修a一覧

● 会 場 東京キャンパス文京校舎（8 講習） 8 月 21 日(水)・22 日(木)・23 日(金)

| 講 習 名 | 講習 番号 | 講 師 | 定員 | 受講決 定者数 |
|--|----------|------------------|----|------------|
| 次期学習指導要領が求めるキャリア教育の在り方 | 10021 | 藤田 晃之 | 50 | 18 |
| 新学習指導要領に基づく小学校英語教育の理論と実践 | 10022 | 名畑目 真吾 鈴木 はる代 | 50 | 29 |
| 学習指導要領の変遷と学校教育をめぐる今日的課題 | 10023 | 木村 範子・平井 悠介 | 50 | 47 |
| 「教育法規と教育政策を理解する」及び「学校における 危機管理上の課題」 | 10024 | 窪田 眞二・下山 直人 | 50 | 20 |
| 進路と教育 | 10025 | 稲永 由紀 | 50 | 35 |
| カリキュラム・マネジメント | 10026 | 田中 統治 | 50 | 20 |
| アクティブ・ラーニングの理論と方法 ー主体的・対話的で深い学びを通してー | 10027 | 唐木 清志 | 40 | 39 |
| 学校で苦戦する子どもの援助～チーム学校の視点から～ | 10028 | 石隈 利紀・相樂 直子 | 70 | 69 |
| 合 計 8 講習 定員 370 人 受講決定者数 277 人 定員充足率 約 74.9% | | | | |

下の表は、文部科学省で示している選択必修講習の内容と筑波大学の選択必修講習の内容の関係を示している。

免許状更新講習規則(文部科学省令)の講習区分と筑波大学の講習区分

| 領域 | 事項 | 開設方法 | 筑波大学の 開講区分 |
|------------|---|--|--|
| 選 択 必 修 | イ 学校を巡る近年の状況の変化 | 事項欄に掲げた 事項を選択的に 開講（1 事項 6 時間として開講、 ただし、イ～ホに ついては 2 事項 を 6 時間で開講 することができる。）（受講定員 は、必修講習と同 数以上に設定す ること。） | 【選択必修 a】 教育の最新事 情 （現代の教育 課題等） |
| | ロ 学習指導要領の改訂の動向等 | | |
| | ハ 法令改正及び国の審議会の状況等 | | |
| | ニ 様々な問題に対する組織的対応の必要性 | | |
| | ホ 学校における危機管理上の課題 | | |
| | ヘ 免許法施行規則第 2 条 1 項の表備考第 5 号に規 定するカリキュラム・マネジメント | | |
| | ト 育成を目指す資質及び能力を育むための主体 的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善 | | |
| | チ 教育相談（いじめ及び不登校への対応を含む。） | | |
| | リ 進路相談及びキャリア教育 | | |
| | ヌ 学校、家庭並びに地域の連携及び協働 | | |
| | ル 道徳教育 | | |
| | ヲ 英語教育 | | |
| | ワ 国際理解及び異文化理解教育 | | |

| | | | |
|--|---|--|--|
| | カ 教育の情報化（情報通信技術を利用した指導及び情報教育（情報モラルを含む。）等） | | |
| | ヨ その他文部科学大臣が必要と認める内容 | | |

① 選択必修 a「教育の最新事情（現代の教育課題等）」の概要

選択必修は、以前、必修講習(12 時間)で取り扱っていた「教育の最新事情」の中で「教育の最新事情(現代の教育課題等)」に関する事項を取り扱う講習(6時間)として、平成 28(2016)年度から設置された講習である。選択必修 a が定められたことにより、2 日間受講しなければならなかった必修講習が 1 日となり、現代の教育課題等の事項の中で、受講者が選択して受講できる形式になった。受講者にとっては、現状に合う必要な講習を選択できるので主体的に講習が受けられるようになっている。

本学では、6 月～8 月の期間を 3 回に分けて、合計 24 講習開設し 23 講習開講した。本学の更新講習は、文部科学省で定められている 15 事項の全ての事項に関わる講習を開講している。これは、総合大学である強みを生かしてのことである。会場は、第 1 回と第 2 回を筑波キャンパスで、第 3 回を東京キャンパスの文京校舎で実施した。募集定員については、必修 A の定員である 1,000 人と同数以上の確保に努め、選択必修 a の定員を 1,190 人とした。これは、「選択必修領域講習の総定員数を必修領域講習の総定員数と少なくとも同数程度（又はそれ以上）開設することを原則とする。」と定めた文部科学省からの通達によるものである。本学では、選択必修講習の定員を原則 40～50 人と設定しているが、選択必修講習の開講数を確保する観点から、講習の質が確保できる範囲で 1 講習の定員は 30～80 人で設定し、最終的には 838 人が受講決定者数となった。定員（1,190 人）に対する定員充足率は約 70.4%であった。必修 A の受講決定者数が 826 人、選択必修 a は必修 A より 12 人多い受講決定者数となったがほぼ同数程度である。

また、選択必修 a を開設するに当たっては、茨城県教育委員会（茨城県教育研修センター）と連携し、実務経験が必要となる事項については、校長経験者など実務家教員を講師として依頼した。また、一部の講習では、理論面と実践面に分けて本学教員と複数で対応するなどして講習内容に具体性をもたせ、受講者のニーズにあった対応ができるように努めた。

② 選択必修 a「教育の最新事情（現代の教育課題等）」に対する事後アンケートの分析

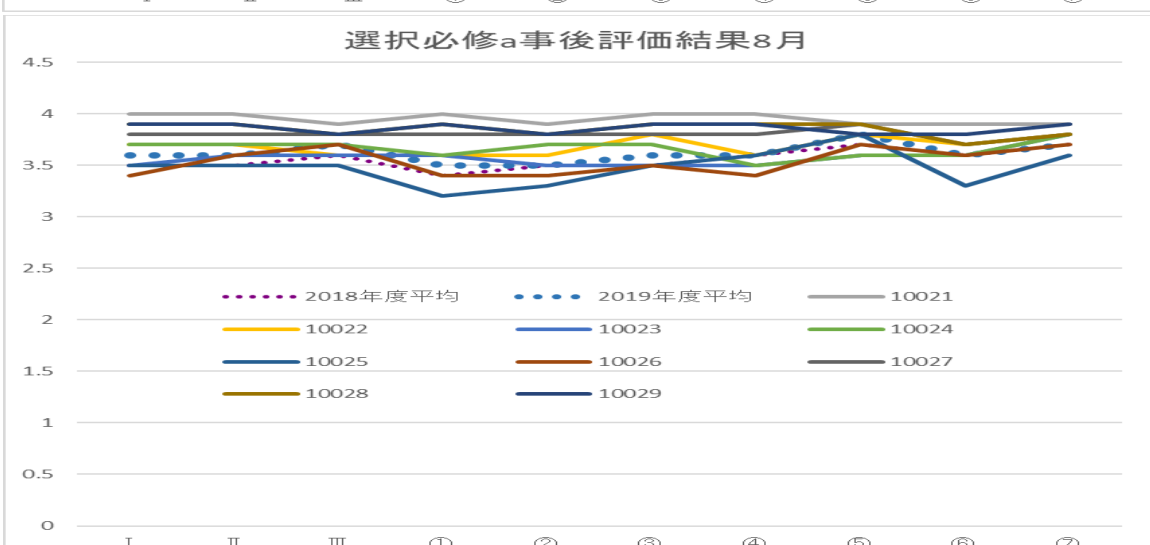
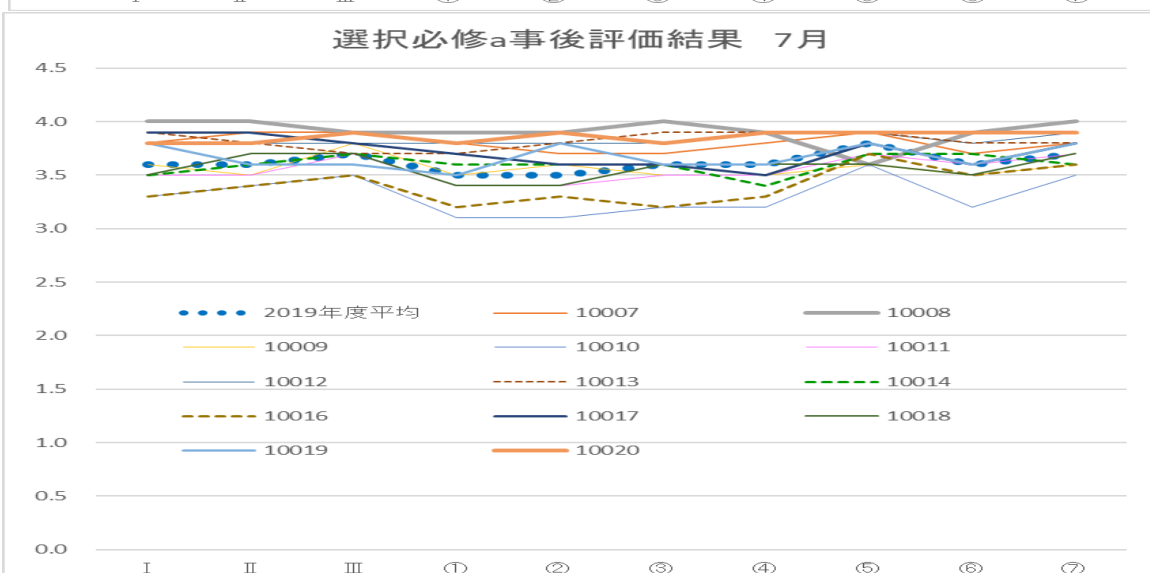
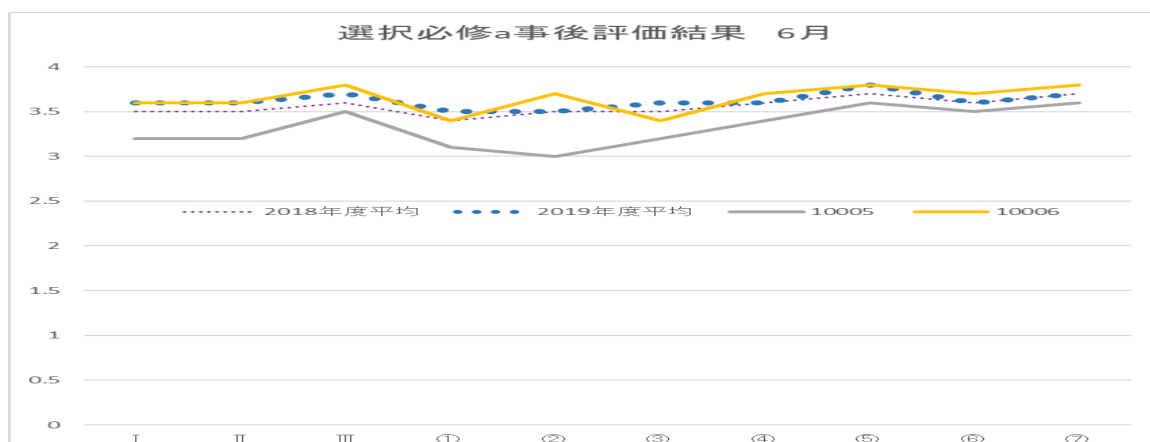
ここでは、I の 4 で分析した選択必修 a の評価について、さらに詳細な分析を加えてみる。

ア) 選択必修 a の評価分析

本年度の選択必修の講習は、第 1 回と第 2 回（6 月と 7 月）を筑波キャンパスで、第 3 回を東京キャンパス文京校舎で実施した。開講数は第 1 回が 2 講習、第 2 回が 13 講習、第 3 回が 8 講習の全部で 23 講習を行った。講習における評価結果を比較してみると、選択必修全体の事後評価を 2018 年度と 2019 年度で比較してみるとほとんど変わらない。

しかし、講習別にみても、評価にばらつきがあることが分かる。選択必修 a は取り扱う内容が定められているため、受講者が講習を選択できるが、必修 A 同様に高評価を得るのは難しい面もある。さらに、多くの講習で定員を 50 人前後に設定していることか

ら、希望講習が選択できず、日程等の都合を優先して選択したことにより受講者の希望と受講講習が一致していない場合もある。



つまり、課題意識と講習内容の差が評価に表れている傾向がある。また、講習ごとの受講者数にもかなりのばらつきがあるため、単純に比較するのは難しい面もある。そのことを念

頭に置きながら、高評価を得た講習の傾向を見ると、教育相談や実技を伴う講習、またアクティブ・ラーニングなど新学習指導要領に関する具体的な内容の講習、さらに特別支援教育など学校教育の中で喫緊の課題となる講習の評価が高かったことが分かる。共通しているのは、いずれも実践的な内容であることである。職務上の日々の悩みや課題意識と講習内容がマッチし、新たな情報や手立てが実用性を伴って受講者に届いたとき、満足度の高い講習になると考える。

イ) 講習の様子と受講者のコメントからの分析

例えば勤務する学校種によって、選択する講習に違いがある。10012「すぐに役立つ、児童生徒の望ましい人間関係づくりを身につけよう」は小学校教員が多く、中でも、30代の教員の割合が多くなっている。10007「国際バカロレア教育と日本の教育課題」については、高等学校の受講者や30代の受講者の割合が高い。高等学校で国際バカロレア教育を取り入れている学校が増えたことなどが影響しているものと思われる。

ここでは、2つの講習の受講者層と講習の様子や受講者の主なコメントを紹介し、その内容から選択必修講習について分析したい。

10012「すぐに役立つ、児童生徒の望ましい人間関係づくりを身につけよう」

| 科目別受講者層(学校種・世代・性別) | | | | | 0人 | | 5人～9人 | | 10人～14人 | | 15人～ | | | | | | | |
|--------------------|--------------------------------------|----|-----|-------------|-------------|-------------|----------------|--------------|----------------|----------------|--------------|---------------------|-----------------------|---------------|----------------|----|----------|----|
| 講習科目名 | 受講者数 | 内訳 | | | | | | | | | | | | | | 合計 | | |
| | | 世代 | 性別 | 幼稚園に勤務している者 | 小学校に勤務している者 | 中学校に勤務している者 | 義務教育学校に勤務している者 | 高等学校に勤務している者 | 中等教育学校に勤務している者 | 特別支援学校に勤務している者 | しこも園に勤務している者 | 幼保連携型認定こども園に勤務している者 | 認可こども園及び認可保育所に勤務している者 | 認可外施設に勤務している者 | 幼稚園と同一施設に設置する者 | | その他（非現職） | |
| 10012 | 【選択必修】すぐに役立つ、児童生徒の望ましい人間関係づくりを身につけよう | 39 | 30～ | 男 | 0 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 20 |
| | | | ～39 | 女 | 0 | 10 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 3 | 16 | |
| | | | 40～ | 男 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 | |
| | | | ～49 | 女 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 4 | |
| | | | 50～ | 男 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 3 | |
| | | | ～59 | 女 | 0 | 7 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 8 | |
| | | | 60～ | 男 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| 合計 | | | | | 0 | 26 | 5 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 6 | 39 | 39 | |

この講習の様子について、講習補助者からの報告等を参考に紹介する。

【講習形態】

講義→演習の形式で行われた。比重としては演習により重きが置かれた。

【講習内容の概要】

①SGE（構成的グループエンカウンター）・②SST（ソーシャル・スキル・トレーニング）・③アドラー心理学を活用した「クラス会議」の三つのテーマで構成されていた。それぞれのアクティビティについて、まず理論の解説が行われ、その後実際にアクティビティに取り組んだ。

①②についてはペアワークもしくは4人のグループワークの形がとられ、③については机を移動させて椅子を円形に配置して行った。

【受講者の様子】

それぞれのアクティビティに積極的に取り組んでいた。楽しんで取り組みつつ日頃の教育実践と関連付けて学びを深めている様子が見られた。演習の時間が多く受講者同士で話し合う時間が講習時間内でも多かったためか、休憩時間や昼食時間においても受講者間の活発な意見交換が行われていた。

【感想】

理論を講義したすぐ後にアクティビティで実践を行うという講習の形式は、受講者にとっても理解を深めやすかったと思う。また1コマの講習の中に時間の区切りが設けられることにより、長時間の講習でも集中を維持することが可能な形式だった。

アクティビティの時間が多く受講者の活気のために室温が上がりやすかったために気温を低めに設定していた。暑い・寒いという意見が聞かれなかった点は、受講者が講習に集中しやすい環境であったという意味でよかったと思う。

休み時間を通して講師の先生とグループの編制や机の移動を話し合っておいたため、講習に支障が出ることなく対応することができた。

次に、受講者評価書（事後アンケート）に記載された受講者からのコメントを紹介する。

【主なコメント】

- ・ディスカッションが多く盛りこまれており、楽しみながら1日過ごすことができました。児相の話はショッキングなものが多いけど、「虐待する側だけが悪いわけではない」という言葉に、とても考えさせられました。教育の現場も、児相の現場も休みなんてほとんどないような状態であることも知り、大変な職業なんだと改めて感じました。
- ・実践してみたい内容ばかりでした。実際に、教育現場で実践するとなると、時間をどう確保すればよいかが悩みです。時間確保についてもお話をしていただけると嬉しかったです。（欲を言えば…です。）
- ・知らない人同士ではありましたが、様々なグループ活動により、仲が深まりました。子ども同士もこういう風に仲を深めていくのだなと実感をもって学べました。
- ・たくさん演習の時間があつたので楽しくできて時間もあつというまででした。クラス会議をやってみたいと思います。
- ・演習がたくさんあって飽きずにできました。資料もたくさんあって勉強できて良かった。バランスが最高でした。
- ・生徒への声かけなども、考えさせられるものもあり、非常に有意義でした。
- ・同じグループになった方達と、昼食を食べながら、色々話せたのも、楽しく、ためになりました。このような形をとって下さったので、同じ教員同士色々話げできたのだと思います。（校種は異なりましたが、それはそれで…よかった。）
- ・児童生徒だけではなく先生のためのスキルは初めて見たものだったのでとても勉強になりました。先生ご自身のお話も全て今日の講義の内容とつながっていてとても有意義な1日でした。
- ・先生のゆったりとした優しい話し方が、聴いていてとても分かりやすく、学校現場で是非やってみようという気持ちになったものがたくさんありました。5日間の受講初日、とても緊張してこの教室に入りましたが、すぐに緊張もほぐれました。先生の実体験でのお話しにも自分を振り返ることができ、たいへん勉強になりました。
- ・先生の、はじめの体験談が、まだ、心に残っています。これからも、子どもたちをよくみていきたいと思いました。
- ・演習が充実しており、体験を通して学ぶことができた。実践できそうです。
- ・SGE、SSTなど具体的に活動しながら、楽しく学ぶことができました。
- ・「子どもは毎日新しい子ども」という言葉にとても心を動かされました。忘れないようにしたいと思います。
- ・いろいろな活動の中で、よりよい人間関係が構築できるよう、日々努力したいと思います。

「すぐに役立つ、児童生徒の望ましい人間関係づくりを身につけよう」では、現在の児童生徒を取り巻く環境の変化による発達の段階を考え、各学校で取り組まなければならない児童生徒の人間関係づくりの在り方を、講義や演習を通して身につける講習である。人間関係づくりの理論や演習の研修を受講していても、勤務校で活用方法や時間の確保等の課題を

持つ教員が多いので、本講習の中で十分に時間をとり、勤務地で実践化できるようにしていた。理論の講義の後に演習構成的グループエンカウンターを取り入れ、講義と演習をバランスよく構成して、集中して講習を受けることができるようにしている。教職経験が10年目の教員にとって、演習を通してスキルを学び、すぐに実践できることを実感したようであった。この講座は、平成28年度から開講し、本年度で4年目になるが、毎年人気がありすぐ定員に達する講習であるため、7月に2回実施し、いずれの講習でも高い評価を得ている。

10007「国際バカロレア教育と日本の教育課題」

| 科目別受講者層(学校種・世代・性別) | | | | 0人 | | 3人～9人 | | 10人～14人 | | 15人～ | | | | | | | | | |
|--------------------|-------------------------|----|-----|------------------|------------------|------------------|-------------------------|-----------------------|-------------------------|-------------------------|-----------------------|------------------------|-------------------------|----|-------------------------|-------------------------|-------------------------|-------------------------|-----------------------|
| 講習科目名 | 受講者数 | 内訳 | | | | | | | | | | | | 合計 | | | | | |
| | | 世代 | 性別 | 幼稚園に 対する 者 | 小学校に 対する 者 | 中学校に 対する 者 | 義務教育 学校に 対する 者 | 高等学校 に 対する 者 | 義務教育 学校に 対する 者 | 特別支援 学校に 対する 者 | こども園 に 対する 者 | 幼児連携 園に 対する 者 | 認定こども 園に 対する 者 | | 認定こども 園に 対する 者 | 義務教育 学校に 対する 者 | 義務教育 学校に 対する 者 | 義務教育 学校に 対する 者 | その他 一歩 進んだ 者 |
| 10007 | 【選択必修】国際バカロレア教育と日本の教育課題 | 36 | 30～ | 男 | 0 | 0 | 0 | 0 | 5 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 7 | 18 |
| | | | ～39 | 女 | 0 | 1 | 2 | 0 | 3 | 0 | 2 | 0 | 1 | 0 | 2 | 11 | | | |
| | | | 40～ | 男 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 7 | |
| | | | ～49 | 女 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 3 | | | |
| | | | 50～ | 男 | 0 | 1 | 1 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 9 | | |
| | | | ～59 | 女 | 0 | 1 | 1 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 5 | | | |
| | | | 60～ | 男 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | | |
| | | | | 女 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | |
| 合計 | | | | 0 | 4 | 5 | 0 | 16 | 1 | 4 | 0 | 2 | 0 | 3 | 35 | 36 | | | |

この講習の様子について、講習補助者からの報告等を参考に紹介する。

【講習内容】

講義内容は、国際バカロレア教育の概要説明と、そのコアの概念となるTOK (Theory of Knowledge, 知の理論)についてであった。まず午前中の1時間半ほどで川口先生が概要説明を、その後1時間10分ほどでキャロル先生が国際バカロレア教育の背景となる社会の変化について講義を行った(通訳: 川口先生)。

午後の2時間40分は、キャロル先生をファシリテーターとして実際にTOKのアクティビティを示し、教室に戻った時に何か少しでも適用できるようにとの考えのもと、先生方が7人1組でグループ学習を行なった。ほとんどの先生方が英語での講義ということで緊張されて、馴染みのない国際バカロレアについての授業ということで不安なようだったが、最後には有意義だったとおっしゃった先生方が多かった。

【課題】

- ・先生のパソコンでは、PPTが映らなかったため予備のパソコンの速やかな準備。
- ・冷房の調節、直に当たるところを見定めておいた方が良さそう。
- ・グループ学習の7人1組は人数が多すぎたようだ。
- ・スクリーンの下の方が見えないと言う方がいらした。

次に、受講者評価書(事後アンケート)に記載された受講者からのコメントを紹介する。

【主なコメント】

- ・英語力に自信がなく、心配していたが、わかりやすく、楽しく翻訳していただき、1日楽しく学ぶことができた。
- ・パワーポイントの資料が欲しいです。できれば講座前に入手できると有難いです。(内容+英語+やることでいっぱ

いいっぱいでした。)

- ・時間的に講義内容が多く、初心者にはむずかしかった。
- ・講師の先生には、とても気をつかっていただき、和やかな場をつくり出していただきました。IBについて、誤解していた点もあり、今回学習し、正しい知識を身につけられて大変有意義な時間でした。
- ・お二人の先生のお話は両方とも、たいへん興味深く、大変、勉強になりました。IB、や、Tokについて、これからも、もっと知りたいと思いました。
- ・夏休み中の平日に講座がたくさんあるとありがたいです(難しいとは思いますが…)
- ・バカロレアの講習、大変になりました、有意義な時間でした。
- ・ルーブリックや相互評価等、評価の仕方について、もっと時間をかけて教えていただきたいかった。
- ・特別支援学校でもIBの考え方や方法は取り入れられるなと思いました。
- ・聞けば聞くほど興味深く、もっと知りたいと思う講義でした。
- ・オリエンテーションの資料もいただけると嬉しかったです。
- ・グループワークは7人くらいだと少し遠く感じました。5人くらいが話しやすいと思います。

10007「国際バカロレア教育と日本の教育課題」は、IBの基本的な理念や教授法を学ぶことで、指導方法の工夫・授業改善の一助とする内容で、具体的には、アクティブ・ラーニング形式のIB教育の授業を体験し、受講者が課題をIB教育の教材を用いて探求的に解決していきます。このような学びをいかすことで、学校教育において「主体的・対話的で深い学び」の実現化を図っていく講習である。アクティブ・ラーニングについて演習を通して学ぶことができるので、演習を通して受講者同士が実践的に互いに学びを深めていることが分かる。受講者は高等学校の教員が多かったが、他の学校種での取り入れることができさらに学びたいという受講者のコメントを見ても、新たな意欲を喚起しているがわかる。

これら2つの講習に共通していることは、課題の共有のさせ方、話しやすい雰囲気作り、理論を具体的に実感し理解できるような講義と演習のバランスの取れた構成等、受講者数に応じた工夫が、評価結果に表れていると推測できる。

一方で、教師にとって知らなければならない大切な内容にもかかわらず、実践に活かすことが難しいと受講者が感じた講習は評価が低い傾向にある。選択必修は取り扱う事項が定められているため、受講者への伝え方や講習形態の工夫が大切になってくると言えよう。

受講者の選択肢は増えているが、受講者は、「すぐに役立つ」実践的な講習を好む傾向がある。実践化しやすいものだけでなく今後の10年間を見通して、近隣の教育委員会と連携して、法令に関する内容や学校組織に関する項目も重要であることを受講者にアナウンスをしていきたい。

(3) 選択B 一教科・領域の指導力を磨く

① 選択B「現代教育の課題と展望」の概要

選択Bは、「教科・領域の指導力を磨く」と題し、特に教科・領域の指導や生徒指導の充実に役立つ情報を提供する講習として設定している。実施時期を6月、7月、8月の3回に分けて、合計31講習を開講した。今年度の対象受講者数が減ったので、2講習減とした。

会場と開講数は、第1回(6月)を筑波キャンパスで4講習、第2回(7月)を筑波キャンパスで13講習と附属高等学校で2講習、第3回(8月)を東京キャンパス文京校舎と附属視覚特別支援学校及び附属駒場中・高等学校で12講習をそれぞれ開講した。

申込状況は、最終的には945人の受講決定者数となり、選択Bの定員(1,265人)に対する定員充足率は約74.6%であった。これは、昨年度の選択Bの受講率83.4%より約9%低くなるが、講習の約6割が受講率80%を超えている。今年度の特筆すべきことは、受講決定以降のキャンセルや当日の欠席者が0と、受講者の意欲の高さがうかがえる。

選択講習については、講習の運営を担当講師と講習補助者(TA)で行うことを原則として実施している。以下、本年度の選択B講習の一覧を示す。

表 第1回選択B一覧

● 会場 筑波キャンパス(4講習)

6月23日(日)

| 講習名 | 講習番号 | 講師 | 定員 | 受講決定者数 |
|--|-------|--------------|----|--------|
| 特別なニーズのある子どもの理解と支援 | 10029 | 園山 繁樹・米田 宏樹 | 50 | 48 |
| 理科好きな子どもを育てる授業 | 10030 | 山本 容子・遠藤 優介 | 40 | 39 |
| 国語科における教育課程の動向と対話活動の充実 | 10031 | 甲斐 雄一郎・長田 友紀 | 40 | 36 |
| 社会科(地理歴史科)のための地理情報システム(GIS)の活用 | 10032 | 森本 健弘 | 25 | 17 |
| 合 計 4 講習 定員 155 人 受講決定者数 140 人 定員充足率 約 90.3% | | | | |

表 第2回選択B一覧

● 会場 筑波キャンパス(13講習)

7月6日(土)・7日(日)・20日(土)・21日(日)

| 講習名 | 講習番号 | 講師 | 定員 | 受講決定者数 |
|---|-------|----------------------|-----|--------|
| 図画工作・美術教育を複眼的に考える | 10033 | 石崎 和宏・橋本 時浩 | 30 | 28 |
| 英語教師の自己教育力ブラッシュアップ | 10034 | 久保田 章・中田 元子 宮腰 幸一 | 40 | 15 |
| 「おや?」「なるほど!」による算数・数学科問題解決の指導 -愉しく・優しく育まれる人の心, 生きる術, 卓越した叡智 | 10035 | 磯田 正美・小石沢 勝之 | 100 | 31 |
| 性や薬物乱用等の現代的課題に対応した保健教育の考え方と進め方 | 10036 | 野津 有司 | 40 | 37 |
| フィールドワーク取り入れた社会科(地理歴史科)の授業の構成 | 10037 | 井田 仁康 | 40 | 32 |

| | | | | |
|---|-------|--------------|-----|----|
| オリンピック・パラリンピック教育の授業づくり | 10038 | 宮崎 明世・真田 久 | 50 | 43 |
| 心の教育からの脱却と道德教育 | 10039 | 吉田 武男 | 100 | 84 |
| 英語で進める授業の基礎・基本 | 10040 | 久保野 雅史・久保野りえ | 40 | 19 |
| 体づくり運動の教材づくり ～楽しく動いて動きを身につけよう～ | 10041 | 三田部 勇 | 40 | 36 |
| 世界の授業, 日本の授業 ー算数・数学授業の国際比較ー | 10042 | 清水 美憲 | 40 | 39 |
| 書写・書道教育の今日的課題 | 10043 | 菅野 智明 | 40 | 13 |
| 特別なニーズのある子どもの理解と支援 | 10044 | 佐々木銀河・岡崎 慎治 | 50 | 47 |
| 4 技能を伸ばし, 測定するテストと評価 | 10045 | 久保野 雅史 | 40 | 18 |
| 合 計 13 講習 定員 650 人 受講決定者数 442 人 定員充足率 約 68% | | | | |

● 会 場 附属高等学校 (2 講習) 7 月 22 日(月)・23 日(火)

| 講 習 名 | 講習 番号 | 講 師 | 定員 | 受講決 定者数 |
|--|----------|-------|----|------------|
| エクセルとフリーソフトを用いたやさしい統計教材の作成 | 10046 | 川崎 宣昭 | 30 | 11 |
| エクセルとフリーソフトを用いたやさしい統計教材の作成 | 10047 | 川崎 宣昭 | 30 | 13 |
| 合 計 2 講習 定員 60 人 受講決定者数 24 人 定員充足率 約 40% | | | | |

表 第3回選択B一覧

● 会 場 東京キャンパス文京校舎 (4 講習) 8 月 21 日(水)・22 日(木)・23 日(金)

| 講 習 名 | 講習 番号 | 講 師 | 定員 | 受講決 定者数 |
|--|----------|---------------------------|-----|------------|
| 考える算数・体験的算数 | 10048 | 細水 保宏 | 100 | 96 |
| 特別なニーズのある子どもの理解と支援 | 10049 | 柘植 雅義・岡崎 慎治 | 50 | 48 |
| オリンピックを題材とする体育理論の授業づくり ー文化としてのスポーツ学習を中心にー | 10050 | 中塚 義実 | 30 | 22 |
| 幼稚園や小中学校等に在籍する気になる子への支援 ～発達障害に焦点を当てて～ | 10055 | 若井広太郎・森澤亮介 田丸 秋穂・宮崎 善郎 | 60 | 51 |

● 会 場 附属視覚特別支援学校 (4 講習) 8 月 21 日(水)・22 日(木)

| 講 習 名 | 講習 番号 | 講 師 | 定員 | 受講決 定者数 |
|---|----------|-----------------------|----|------------|
| 視覚に障害のある児童・生徒等の様々なサポート | 10051 | 江村 圭巳・明比庄一郎 | 16 | 14 |
| 授業のユニバーサルデザイン化を考える ー見える子も, 見えない子も一緒に学ぶためにー | 10052 | 山田 毅 ・浅野 慎子 中村里津子 | 16 | 12 |
| 触って考える数学 | 10053 | 内田 智也・清和 嘉子・ 丸山 訓英 | 20 | 16 |
| 見えにくさ・読みにくさへの配慮って何だろう?ー拡大教科 書や教材・試験問題のアクセシビリティなど学習環境から考えるー | 10054 | 宇野 和博・成松 一郎 | 16 | 14 |

● 会 場 附属駒場中・高等学校（4 講習） 8 月 23 日（金）・24 日（土）

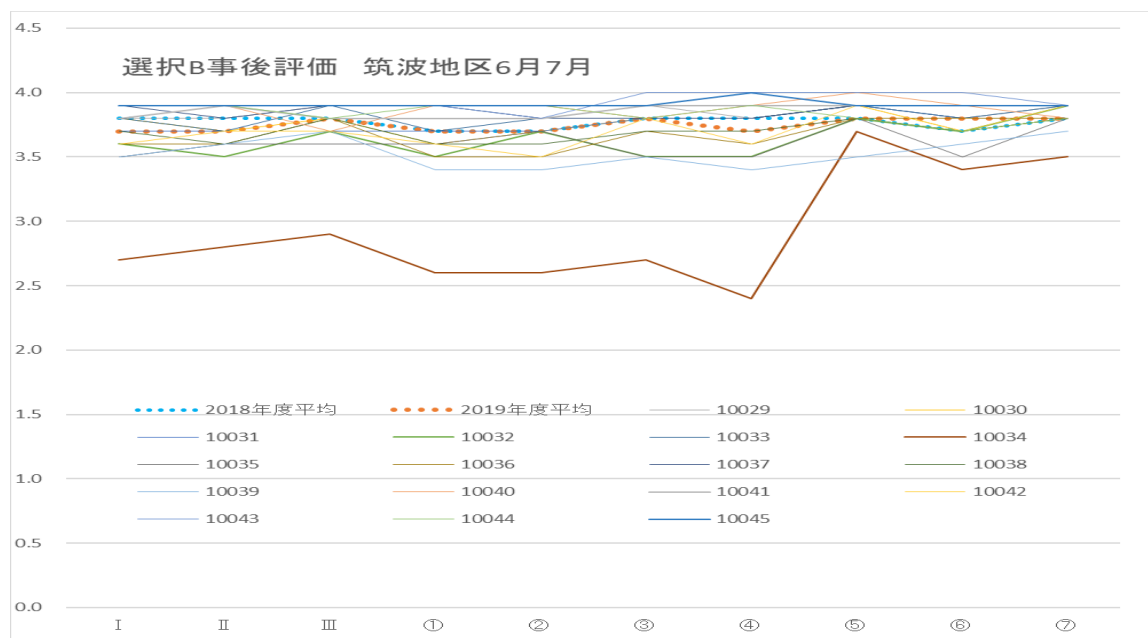
| 講 習 名 | 講習 番号 | 講 師 | 定員 | 受講決 定者数 |
|---|----------|------------|----|------------|
| 演劇の専門家とつくる教室 | 10056 | 平田 知之 | 20 | 19 |
| 書写指導～児童・生徒の文字への関心を高めるために～ | 10057 | 鹽谷 健・小倉 太郎 | 24 | 22 |
| 漢文訓読 ～高等学校国語での漢文教材の工夫と有効活用～ | 10058 | 鹽谷 健 | 30 | 6 |
| 5年後のICT技術と授業・教室—エバンジェリストと教員の対話— | 10059 | 渡邊 隆昌 | 20 | 19 |
| 合 計 12 講習 定員 402 人 受講決定者数 339 人 定員充足率 約 84.3% | | | | |

② 選択B「教科・領域の指導力を磨く」に対する事後アンケートの分析

ここでは、I の 4 で分析した、選択 B の評価について、さらに詳細な分析を加える。評価の集計結果のグラフは、昨年度と今年度の選択 B 講習の受講者評価書(事後アンケート)の評価平均と、各講習における各項目の評価平均の比較を表している。 選択 B の「教科・領域の指導力を磨く」ことがねらいの選択であるので、1 講習当たりの人数は 40 人を基本としている。また、選択講習には講習補助者(TA)を配置し、受講者のサポートを行っており、その対応も適切であったことが数値から伺える

講習の構成により指導者がグループでの指導を行ったり、TA がサポートできたりする講習については、100 名の定員にしているが、受講者に対して十分に説明等がなされているので事後評価でも特に問題はない。

表 第 1・2 回選択Bの事後評価の集計結果



ア) 第 1・2 回講習の評価分析

筑波キャンパスで実施した第 1 回、第 2 回の選択 B の評価について述べる。第 1 回は 6

講習内容に関しては、昨年度と同等か 0.1～0.2 ポイント高くなった講習が多い。全体的には受講者の内容面での満足度も上がっていると言える。特に、特別支援教育に関する内容や演習や実技を伴う講習の評価が高い。特別支援教育は、学校の指導においての関心が高い分野であるし、演習や実技で得られた知識や技能は、翌日から即実践できると手ごたえがあったからだ。また、対象の受講者の学校種を限定したり、講習内容をシラバスに明記したりして専門的な講習を必要とする受講者が選択をしやすいようにした。その結果、昨年度は評価の数値が低かった講習も、今年度は受講者のニーズと合致して高い評価となった。

ここでは、第1回と第2回（6～7月）に行われた2つの講習の様子と受講者の主なコメントを紹介する。

10029 「特別なニーズのある子どもの理解と支援」

この講習の受講者は、全学校種の教員が受講しているがその中でも 30 代の小学校教員や特別支援学校の教員が多かった。日々の指導の中で模索している部分があると思われる。

講習前半（講義1・2）は、講義中心であったが、後半（講義3・演習）は、講義ののち、8グループに分かれ、仮想事例を想定したグループ討議による演習が行われた。最後に、グループごとに話し合いの結果を発表し、全体で共有した上で、それを基に講師が補足とまとめを行った。

本講習では、前半は園山先生、後半は米田先生による講義が行われた。

後半の講義3では、特別支援学級・通級と通常学級の連携に関して、学習指導要領の改訂点を押さえつ

つ、子どものニーズと支援の方向性を検討、共有するための在り方や、またその計画や情報を実際の教育課程編成（自立活動を中心に）へ反映させていく手順、そして通常学校における授業改善の観点や具体的な支援方法等について講義を行った。その後、困った行動を示すアスペルガー障害の児童、及び選択性緘黙の児童を仮想事例として、その理解や支援の在り方に関して45分程グループで話し合い、全体で共有したのち、最後の約25分間で講師が討議内容について解説、補足等を行った。

次に、受講者評価書（事後アンケート）に記載された受講者からのコメントを紹介する。

【主なコメント】

- ・現場ではなかなか学べない事を学べて刺激になった。日常での子どもとの生活や学びへの直接的な援助のヒントになって良かった！
- ・3時間目の授業は少し難しかった。4時間目のディスカッションでは他の先生方の意見をきくことが出来てとても勉強になった。
- ・実際に、講師の先生方の取り扱った事例や学校での実践例（写真）などが多く、参考になった。障害理解についての参考文献や指導要領の参考にすべきところを教授いただいたので、読んでみようと思う。
- ・演習もあったので、実際に考え話し合い、学校場面で困っていることを共有することができた。
- ・具体的な事例や関わり方を知ることが出来て、大変勉強になりました。また、他の学校の先生方の話を聞くことも出来、自分1人では思いつかない考えをたくさん聞くことが出来深い学びとなりました。

10040「英語で進める授業の基礎・基本」

| 科目別受講者層(学校種・世代・性別) | | | | 0人 | | 5人～9人 | | 10人～14人 | | 15人～ | | | | | | | | | |
|--------------------|--------------------|----|-----|-------------|-------------|-------------|----------------|--------------|----------------|----------------|---------------------|---------------|---------------------|----------------|----|----------|----|---|---|
| 講習科目名 | 受講者数 | 内訳 | | | | | | | | | | | | | 合計 | | | | |
| | | 世代 | 性別 | 幼稚園に勤務している者 | 小学校に勤務している者 | 中学校に勤務している者 | 義務教育学校に勤務している者 | 高等学校に勤務している者 | 中等教育学校に勤務している者 | 特別支援学校に勤務している者 | 幼保連携型認定こども園に勤務している者 | 認可保育所に勤務している者 | 認定こども園及び認可外施設に勤務する者 | 幼稚園と同一施設に勤務する者 | | その他（非現職） | | | |
| 10040 | 【選択】英語で進める授業の基礎・基本 | 19 | 30～ | 男 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 7 | | |
| | | | ～39 | 女 | 0 | 0 | 1 | 0 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 6 | | | |
| | | | 40～ | 男 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 3 | | 7 | |
| | | | ～49 | 女 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 4 | | | |
| | | | 50～ | 男 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | 2 | 4 |
| | | | ～59 | 女 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | 2 | |
| | | | 60～ | 男 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | 0 | 1 |
| | | | | 女 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | 1 | |
| 合計 | | | | | 0 | 1 | 4 | 0 | 10 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 19 | 19 | | |

この講習は、主に中・高の外国語（英語科）の教員を対象にしている講習である。

シラバスを見て課題意識をもって受講している中学校・高等学校の英語科で30～40代の教員が多かった。講習後のコメントや事後評価が高いことから見ても満足のいく講習だったことが分かる。

【講習概要】

- ・英語で行う授業の中で、教科書本文はどのように扱うか。英語でのQ&Aだけで表面的理解に終わるのではなく、英語を通して生徒の理解を導き、発信にまでつながる方法を、中学・高校の教科書を使ったモデル授業で提示する。教科書の内容に関して英語で語りかけることを通して英語を理解させ、学習者に実際に英語を使わせることを通して身につけさせるための授業を演習形式で学ぶ。

また、英語教員に求められる音声表現力についても、実習を通したトレーニングで身に付ける。

【講習内容】

＜講義と演習（１）＞「授業を英語で進めるために（基礎編）」

- ① 学習者の弱点と対応策 ② プロソディを意識した音声表現
- ③ 「英語で授業」の光と影 ④ 教科書本文の口頭導入演習（グループ内発表）

＜講義と演習（２）＞「英語で授業を行うために（実践編）」

- ① 教科書本文の口頭導入（全体発表）とディスカッション ② 口頭導入の体験的理解
- ③ 本文を使った音読練習の要点 ④ 発信に繋がる練習・活動

次に、受講者評価書（事後アンケート）に記載された受講者からのコメントを紹介する。

【主なコメント】

- ・義務ではなく自身の研修のためと思える内容でした。ご準備いただきありがとうございました。実践します。
- ・講師の質が高く、非常に実戦的で有益な内容であった。
- ・質問にも丁寧に答えていただき、非常に良かった。詳細な点までうかがうことができた。
- ・人生で英語教育に関する講義でNo. 1のショッキングな偉大な1日となりました。もっと早く受けたかったです…これからもっと努力していきたいと思います。

ウ) 第3回講習の評価分析

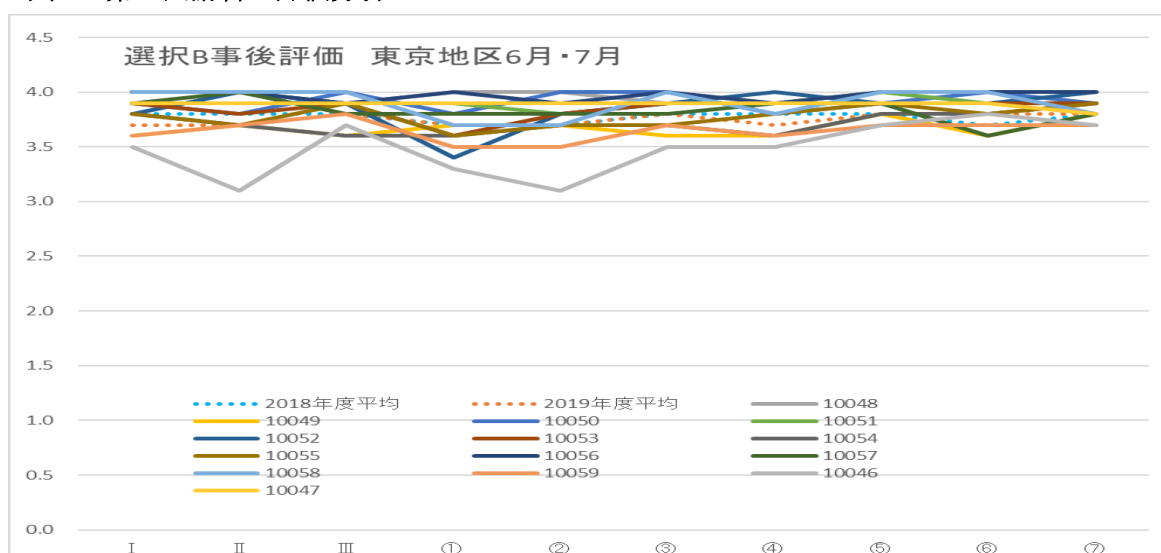


表 第3回選択Bの事後評価の集計結果

第3回の講習は、8月に東京地区で15講習実施した。内訳は、15講習のうち4講習を附属視覚特別支援学校（講習番号10050～10053）、4講習を附属駒場中・高等学校（講習番号10061～10064）、2講習を附属高等学校（講習番号10055,10056）、残りの5講習を文京校舎で実施した。受講者から東京地区の講習の増加を望む声があり、昨年度より2講習多い規模として、東京地区で行う講習数を拡大した。

第3回の評価結果を見ると、10057～10062及び10050の講習で、満点(4.0)を含む多くの項目で高い評価を得ている。附属学校を会場に行われる比較的受講者数の少ない講習については、例年評価が高いが、さらに昨年度からは、文京校舎で行われた3講習(10054～10060)についても高評価を得ており、受講者にとって分かりやすく質の高い講習が行われたことが伺える。附属高等学校を会場に行った講習は会場の都合もあり、比較的少人数で行

われるために受講者の演習時間の確保や、受講者同士の交流についても十分に行われ、講師の実践的な講習内容に十分触れることができる。これらが高評価に表れていると思われる。

受講者が主体的に講習内容に関われることで、講習内容についての気付きや意欲が生まれ勤務校での実践化につながってくるのであろう。

以下に評価の高かった講習について、講習補助者や受講者のコメントを掲載する。

エ) 講習の様子と受講者のコメント

10055「幼稚園や小中学校等に在籍する気になる子への支援～発達障害に焦点を当てて～」

受講者は、各学校種とも 30 代の教員の割合が高かった。

| 科目別受講者層(学校種・世代・性別) | | | | 0人 | | 5人～9人 | | 10人～14人 | | 15人～ | | | | | | | |
|---|------|-----|----|-------------|-------------|-------------|----------------|----------------|----------------|----------------|--------------|---------------------|-------------|-------------|----|----|-----------|
| 講習科目名 | 受講者数 | 内訳 | | | | | | | | | | | | | 合計 | 合計 | |
| | | 世代 | 性別 | 幼稚園に勤務している者 | 小学校に勤務している者 | 中学校に勤務している者 | 義務教育学校に勤務している者 | 高等専門学校に勤務している者 | 中等教育学校に勤務している者 | 特別支援学校に勤務している者 | こども園に勤務している者 | 幼保連携型認定こども園に勤務している者 | 認可保育所に勤務する者 | 認可外施設に勤務する者 | | | 幼稚園と同一設置者 |
| 10055 【選択】幼稚園や小中学校等に在籍する気になる子への支援～発達障害に焦点を当てて～ | 51 | 30～ | 男 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 24 |
| | | ～39 | 女 | 0 | 11 | 1 | 0 | 4 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 20 | |
| | | 40～ | 男 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 | 12 |
| | | ～49 | 女 | 0 | 6 | 2 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 10 | |
| | | 50～ | 男 | 0 | 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 12 |
| | | ～59 | 女 | 0 | 5 | 2 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 9 | |
| | | 60～ | 男 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 |
| | 女 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 3 | | | |
| 合計 | | | | | 0 | 27 | 6 | 0 | 4 | 0 | 7 | 0 | 1 | 0 | 6 | 51 | 51 |

次に、講習補助者の報告を紹介する。

【講習形態】

午前の部では、特別支援教育の現状と課題についての講話があり、障害種別の視点から子どもたちが抱える困難さについて疑似体験を含めた講義が行われた。午後の部では、2グループに分かれて教材・教具に触れたり、実際に作ってみたり、活用方法等について話し合う活動が行われた。最後に、多様性を大切にした学級づくり、授業づくりという題で、全体のまとめが行われた。

【講習内容の概要】

本講習では、各学校に在籍する「気になる」幼児・児童・生徒の様子から、発達障害についての基本事項や特徴、具体的な事例を基にした支援の手立て等、特別支援教育コーディネーターの視点から具体的に考えを進める内容であった。さらに、肢体不自由教育、視覚障害教育、聴覚障害教育の各観点から、自校の様子や障害特性、気になる子への具体的な支援の仕方について講義が進められた。

後半は2グループに分かれ、各校で使われている教材・教具についての説明と体験活動、実際に教材を作りどんな活用の仕方が考えられるか、自由に話し合う体験を行った。まとめとして、森澤教諭と若井教諭から、多様性を大切にした学級づくり、授業づくりという題で、授業改善や学校力の向上、インクルーシブ教育の観点からまとめを行った。

【受講者の様子】

受講者の多くが小・中学校の先生方で、実際に支援を必要とする子どもを担当されていて、積極的に質問をしたり、自身の考えを発表したりと、意欲的に参加する様子が印象的であった。

前半の講義では、疑似体験や具体的な事例から、配布資料にメモを取る様子が多く見られた。後半のグループでの体験活動では、受講者の先生方同士で活用方法や支援の仕方等について積極的に話し合う様子が伺え、休み時間や講習が終わった後に講師へ質問する姿も見受けられた。

【感想】

本講義の内容は、特別支援教育について知りたいと思う受講者にとってニーズが高い内容だと感じる。1日の講義の中で、障害種別に実際の子どもの様子やどんなところに困り感が生じ、具体的な支援の仕方があることを知ることは、とても有益であると思われる。グループ活動を通して、受講者同士の考えをシェアすることができる場所もよかったと感じる。受講者からは、スライドが暗くて見えにくいという声もあったため、改善が必要だと思われた。

次に、受講者評価書に記載されているコメントを紹介する。異学校種の教員同士の交流も視点を広げることにつながっていることが分かる。

【主なコメント】

- ・「真のインクルーシブとは何か？」考える機会となった。
- ・大人に取り組みさせてから、考えを交流すべきでない。⇒参加者から主体的な発言がなかった。
- ・実物を見たり、実際にやってみたりすることができたので、いろんなアイデアがわいてきました。
- ・講師の先生方の持ち時間が短く、1人1人の話されたい内容を十分に聞くことができなかった。人数が少なくなってもよいのもっとじっくり聞ける構成の方がよかったかもしれない。
- ・各支援学校の先生方が、それぞれ専門家の視点で、困り感をかかえた子どもたちへの支援の仕方を具体的に教えて下さってよかったです。
- ・疑似体験、教材作り、教材の紹介など、実際にやってみる。実物を見たことで、大変勉強になった。学んだことを学校に持ち帰り、他の先生方にも紹介し、2学期からの実践に生かしたい。(他2名)
- ・ビヨーンキャッチや各種の教材には孫と遊ぶのに使えるような物や高齢者が使って便利そうな物等が沢山あった。障害のある人が使い易い物は、全ての人にとって便利な物であると、実感致した。また、 0° 30° 45° 90° 120° 180° の穴と表示がある分度器を早速プラ板で作りたいと思う。
- ・異なる学校種の先生方のお話をきくことは、ほとんどないので、とても刺激を受けました。
- ・私学の中学校に勤務しているので、正直思ったのとは違いました。でも、勉強になりました。
- ・講習30時間の中で、最終日の本日だけ筑波大を選びましたが、他大学の講習と異なり、実践に生かしやすい内容で勉強になりました。すべての障害種をもつ筑波ならではの特色だと思います。

10046・10047「エクセルとフリーソフトRを用いたやさしい統計教材の作成」

この講習の様子について、講習補助者からの報告等を参考に紹介する。

【講義内容の概要】

中学校・高等学校の授業の範囲内で統計の基本的な内容を学び、パソコンを用いて統計教材のやさしい作り方を学ぶ。使用するソフトウェアはエクセルとフリーソフトRで、ヒストグラム・度数多角形・累積度数多角形・箱ひげ図・散布図・分布関数などを簡単に描く方法を習得する。フリーソフトRはUSBメモリにインストールされているものを配布し、エクセルの教材も含めすぐに使える教材を持ち帰り可能

【講習の内容】

(1) EXCELを用いた教材開発

- ・ヒストグラム・相対度数分布・累積度数分布・相対累積度数分布などの作成
- ・平均・分散・標準偏差などの統計量の計算
- ・散布図・回帰直線の表示・相関係数の計算

- ・ 箱ひげ図の描き方と問題点
 - ・ 乱数の使い方
- (2) フリーソフトRを用いた教材開発

EXCELの場合とほぼ同様の内容について考察するとともに、以下の内容を扱います。

- ・ フリーソフトRのインストール方法
- ・ 二項分布・正規分布
- ・ 箱ひげ図の描き方（教科書の四分位数の定義で描きます。）
- ・ 乱数を用いた様々なシミュレーション（標本調査などを含む。）

次に、受講者評価書（事後アンケート）に記載された受講者からのコメントを紹介する。

【主なコメント】

- ・ 内容自体は良かったのですが、Excel の操作で分からないところがあると止まって先に進めないのが、サポート役の先生が1人では足りません。問題が解決した時に皆のやっている内容に行こうとしましたが、先に進みすぎていて何をやっているのか分かりませんでした。（追いつけないことが何度かありました）
 - ・ 私が知りたかった内容だったので、とても勉強になりました。ありがとうございました。
- 説明が丁寧で分かりやすかった。Excel は普段から使う機会も多いので、やや易しく感じたが、新しく知ることもあり、また、Rについては興味があつたので、今日ふれることができてよかった。
- ・ R のプログラムについても概略でよいので説明が欲しかった。
 - ・ 1 日で数学を学ぶ講習だったが、資料が丁寧で分かりやすかった。同一の目的であっても、エクセルとフリーソフト R の長所、短所が理解できそれぞれの良さをいかした活用場面を今後考えていきたい。

中・高・特別支援学校の数学科の教員を対象にした講習なので、受講者はどちらの講習日も 30 代の中・高の教員の割合が高かった。数学の専門の教員にとっては満足した内容となったようだ。しかし、対象者を理解したうえで受講した他教科の教員にとっては、戸惑いもあったようだ。そのため事後評価のポイントとしては、片方の講習は下がってしまったが、内容的には受講者のニーズにあったものであり、良い評価を得ている。

本年度の選択 B の全体の評価は、すべての項目で昨年度と同等、もしくは上回っており、講習により評価の差はあるが、全体的には大変良好な結果であると言える。

選択 B の講習内容は、「教科や領域の指導及び、生徒指導等に関する内容」を扱っているので、講習受講後もっとも実践化しやすい講習である。どの講習もすばらしく、受講者のニーズと合致し十分な成果が得られている。

今後の受講者のニーズとしては、全学校種共通のものは、特別支援教育や教育相談、いじめ防止等に関する項目、道徳教育についてである。また教員自身の専門教科の指導力向上のために対象を絞った講習も必要となってくる。

対面型の講習の良さは、各専門分野の最新の情報を得られることや演習等がある。しかし、少人数の講習を増やすことは容易ではない。今後は、選択 B の特性を考えながら、要望等を教育委員会等の関係機関とも連携して、対象職種や校種、講習の内容や流れなど、講習内容を精査しながら、全学校種共通の講習、専門分野での講習のバランスなどを考慮して講習の設定にあたりたい。また、受講者が主体的に講習を申し込むことができるように、具体的な講習イメージが持てる情報を提供する必要があると考える。講習のパンフレットやシラバスに記載する内容や表示を明確化して、今後とも選択 B の一層の改善に努めていきたい。

(4) 選択C－教師力（総合力・応用力）の向上－

① 選択C「教師力（総合力・応用力）の向上」の概要

選択Cは、「教師力（総合力・応用力）の向上」と題し、全学体制で取り組み、文化・歴史・科学・芸術・体育・医学など、各講師の専門性を生かして幅広く質の高い講習となっている。

講習時期を3回に分けて49講習(昨年度より3講習増)全て、開講した。会場は、第1回、第2回は筑波キャンパスを中心に、第3回は東京地区の文京校舎と附属視覚特別支援学校及び附属駒場中・高等学校で実施し各講習とも、講師の研究分野を中心とした専門的な内容を学校教育と関連させて提供している。

選択Cは、(公財)園芸植物育種研究所(千葉県松戸市)、ミュージアムパーク茨城県自然博物館(茨城県坂東市)、土木学会との共催の東京臨海広域防災公園(東京都江東区)の学外の施設を利用した講習も実施しており、専門的な施設を活用して受講できる講習だと好評である。

申込状況は、最終的には1,475人の受講決定者数となり、定員(2,599人)に対する定員充足率は約56.8%になった。受講対象者が減少したので、開設講習を減らす予定であったが、意欲的な担当講師が多く、結果的には昨年度より講習数は3講習増えた。そのため、定員充足率は下がっているが、申請しやすかったとの評価を得ることができ、結果的には受講者にはプラスになった。

以下、本年度の選択C講習の一覧を示す。

表 第1回選択C一覧

● 会場 筑波キャンパス (8講習)

6月23日(日)

| 講習名 | 講習番号 | 講師 | 定員 | 受講決定者数 |
|------------------------------|-------|---------------------|-----|--------|
| 学校の大規模災害対処と法的責任 | 10061 | 星野 豊 | 100 | 49 |
| 発見！「筑波山地域ジオパーク」 | 10062 | 久田 健一郎・荒川 洋二 | 40 | 39 |
| 知的興味を引き出す数学 | 10063 | 加藤 久男・井ノ口 順一 | 50 | 17 |
| 粒子線の医学利用～生活の質を高めるがん治療のために～ | 10064 | 高田 義久 | 40 | 9 |
| 水・流体と環境問題 | 10065 | 白川 直樹・京藤 敏雄 武若 聡 | 40 | 不開講 |
| 最新の健康・保健・スポーツ科学を保健体育の授業に活用する | 10066 | 久野 譜也・藤井 範久 | 50 | 17 |
| 水彩絵の具で描く ～静物～ | 10067 | 太田 圭・程塚 敏明 山本 浩之 | 25 | 24 |
| 食べ物を作る動物たち | 10068 | 田島 淳史 | 15 | 15 |

● 会場 (公財)園芸植物育種研究所 (2講習)

6月22日(土)・29日(土)

| 講習名 | 講習番号 | 講師 | 定員 | 受講決定者数 |
|---|-------|-------|----|--------|
| 丈夫でおいしい野菜の品種をめざして ～園芸植物育種研究所での体験型学習～ | 10060 | 野村 港二 | 20 | 20 |

| | | | | |
|---|-------|-------|----|----|
| 丈夫でおいしい野菜の品種をめざして ～園芸植物育種研究所での体験型学習～ | 10069 | 野村 港二 | 20 | 18 |
| 合 計 9 講習(1 講習不開講) 定員 360 人 受講決定者数 208 人 定員充足率 約 57.8% | | | | |

表 第2回選択講習C一覧

● 会 場 筑波キャンパス (26 講習) 7 月 6 日(土)・7 日(日)・20 日(土)・21 日(日)

| 講 習 名 | 講習 番号 | 講 師 | 定員 | 受講決 定者数 |
|--|----------|---------------------------|-----|------------|
| まだまだ伸ばせる、あなたの英語力！～小学校英語授業 に挑む教師のための、簡単英語で楽しむ講習～ | 10070 | 重松 篤美・野村 港二 | 30 | 29 |
| 学校の大規模災害対処と法的責任 | 10071 | 星野 豊 | 100 | 40 |
| コーパスで見る日本語の姿 | 10072 | 杉本 武 | 20 | 6 |
| 病気を治す材料の科学 ～薬物治療, 再生医療, 外科 治療で活躍する材料をいかにデザインするか | 10073 | 陳 国平・川上 亘作 田口 哲志・荏原 充宏 | 40 | 16 |
| 私たちの暮らしを豊かにする無機材料～「やきもの」から 「ファインセラミックス」まで～ | 10074 | 鈴木 義和 | 30 | 不開講 |
| 社会で役立つ数学 | 10075 | 吉瀬 章子・安東 弘泰 フンドック トゥアン | 40 | 15 |
| 健康と能力発揮のための心身の自己調整と他者理解 | 10076 | 坂入 洋右 | 100 | 78 |
| イタズラ実験オモシロ工作 | 10077 | 八畑 謙介・野村 港二 | 48 | 48 |
| 稲と米のはなし | 10078 | 加藤 盛夫 | 20 | 20 |
| 学校における個人情報保護 | 10079 | 星野 豊 | 100 | 19 |
| アジア・太平洋戦争を問い直す | 10080 | 伊藤 純郎 | 50 | 21 |
| 変動する大地 ～地震・津波・火山・地すべり～ | 10081 | 八木 勇治・八反地 剛 藤野 滋弘・池端 慶 | 60 | 14 |
| 病いとともに生きる～慢性疾患や発達障害等の子や家族 の支援を考える～ | 10082 | 出口 奈緒子・小澤 典子 | 40 | 37 |
| 基礎から学ぶ情報学最前線 | 10083 | 長谷部 浩二・鈴木 大三 二村 保徳 | 40 | 7 |
| 物性物理・原子層科学を例にした物理のおもしろさの起源 | 10084 | 神田 晶申 | 20 | 7 |
| 簡単にヴィジュアルプログラミング～楽しみながら魅力的な 教材をつくろう～ | 10085 | 善甫 啓一 | 60 | 53 |
| 学校トラブルへの法的対処(幼稚園・小学校編) | 10086 | 星野 豊 | 100 | 48 |
| 政治参加と選挙について考える: 日米英を題材に | 10087 | 近藤 康史・鈴木 創 | 50 | 5 |
| 色のいろいろと化学 | 10088 | 佐藤 智生 | 16 | 5 |
| デザインのアプローチと機器や身の回りのものの設計 | 10089 | 山中 敏正・小山 慎一 山田 博之 | 30 | 13 |

| | | | | |
|--|-------|---|-----|----|
| 楽しく学べるやさしい天気予報活用術※1 | 10090 | 川崎 宣昭 | 60 | 58 |
| 楽しく学べるやさしい天気予報活用術※1 | 10091 | 川崎 宣昭 | 60 | 60 |
| アジア・太平洋戦争を問い直す | 10092 | 伊藤 純郎 | 50 | 30 |
| 学校トラブルへの法的対処(中学校・高等学校編) | 10093 | 星野 豊 | 100 | 31 |
| 総合学習に取り入れる栽培学習 | 10094 | 林 久喜 | 20 | 19 |
| 里山探検隊 | 10095 | 澤村 京一・中山 剛 戒能 洋一・山岡 裕一 岡根 泉・八畑 謙介 阿部 淳一・ヒーター | 50 | 46 |
| 合 計 25 講習(1 講習不開講) 定員 1,304 人 受講決定者数 725 人 定員充足率 約 55.6% | | | | |

表 第3回選択講習C一覧

● 会 場 茨城県自然博物館(2 講習) 7 月 31 日(水)・8 月 22 日(木)

| 講 習 名 | 講習 番号 | 講 師 | 定員 | 受講決 定者数 |
|--------------------------------|----------|----------------------|----|------------|
| 動物観察ことはじめ —ミジンコの観察からクマの話まで— | 10096 | 池澤 広美・後藤 優介 野村 浩二 | 32 | 31 |
| 地学教育への基本講座—地層をつくる砂粒から恐竜化石まで— | 10105 | 小池 渉・加藤 太一 上松 佐知子 | 32 | 32 |

● 会 場 東京臨海広域防災公園(1 講習) 8 月 2 日(金)

| 講 習 名 | 講習 番号 | 講 師 | 定員 | 受講決 定者数 |
|----------------------------|----------|-------|----|------------|
| 実習と実験による役に立つ防災教育(土木学会との共催) | 10097 | 谷口 綾子 | 40 | 39 |

● 会 場 東京キャンパス文京校舎 (9 講習) 8 月 21 日(水)・22 日(木)・23 日(金)

| 講 習 名 | 講習 番号 | 講 師 | 定員 | 受講決 定者数 |
|--|----------|-------|-----|------------|
| アジア・太平洋戦争を問い直す | 10098 | 伊藤 純郎 | 50 | 35 |
| 学校における個人情報保護 | 10099 | 星野 豊 | 100 | 25 |
| アジア・太平洋戦争を問い直す | 10100 | 伊藤 純郎 | 50 | 12 |
| 学校トラブルへの法的対処(幼稚園・小学校編) | 10101 | 星野 豊 | 100 | 53 |
| メディアを読み解く「調べ学習」の実践:国内外の教材や事例を活用した体験的学習 | 10102 | 鈴木 佳苗 | 20 | 19 |
| アジア・太平洋戦争を問い直す | 10106 | 伊藤 純郎 | 50 | 27 |
| 学校トラブルへの法的対処(中学校・高等学校編) | 10107 | 星野 豊 | 100 | 37 |

| | | | | |
|--|-------|-------------|----|----|
| グローバルに活躍できる生徒を育てよう ～筑波大学の海外フィールドワーク研修の取り組み実践例～ | 10108 | 永井 裕久・木野 泰伸 | 30 | 26 |
| 子どもの心技体を高めるコーチング | 10109 | 尾縣 貢 | 80 | 43 |

● 会 場 附属駒場中・高等学校 (1 講習) 8 月 24 日(土)

| 講 習 名 | 講習 番号 | 講 師 | 定員 | 受講決定 者数 |
|--------------------------|----------|-------------|-----|------------|
| 発達期のこころと行動～小児科・精神科の視点から～ | 10111 | 石丸 昌彦・広瀬 宏之 | 120 | 111 |

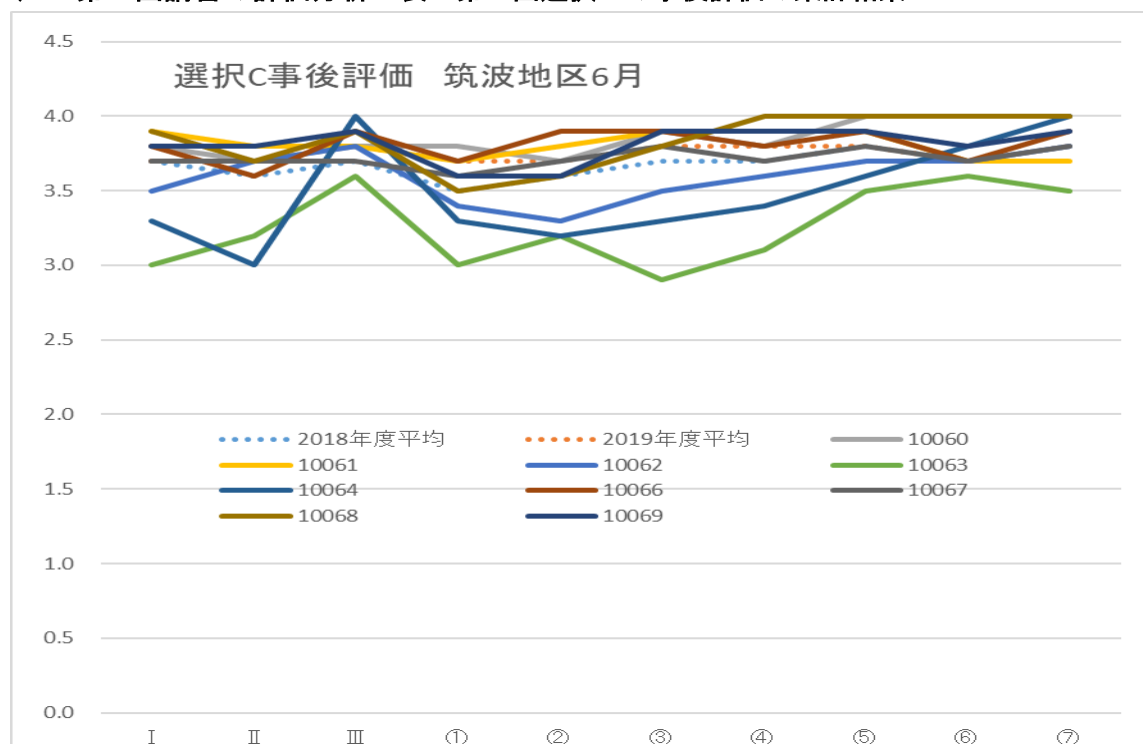
● 会 場 附属視覚特別支援学校 (3 講習) 8 月 22 日(木)・23 日(金)

| 講 習 名 | 講習 番号 | 講 師 | 定員 | 受講決定 者数 |
|---|----------|---------------|----|------------|
| 心から心に響くうた | 10103 | 小野山 幸夏・大野 徹也, | 20 | 17 |
| リハビリテーションの理論と実際 | 10104 | 山中 利明・工藤 康弘 | 20 | 20 |
| 東洋医学的アプローチによる生徒の健康管理 | 10110 | 高橋 智 | 21 | 19 |
| 合 計 16 講習 定員 865 人 受講決定者数 546 人 定員充足率 約 63.1% | | | | |

② 選択 C 「教師力(総合力・応用力)の向上」に対する事後アンケートの分析

ここでは、選択 C の評価について、さらに詳細な分析を加えてみる。

ア) 第 1 回講習の評価分析 表 第 1 回選択 C の事後評価の集計結果



第 1 回の講習は、6 月に筑波キャンパス(7 講習)と松戸市の園芸植物育種研究所(2 講習)で 9 講習を開講した。筑波キャンパスは、受講者数が規定に達しなかった 1 講習が開講しなかった。

選択 C は、受講者が興味・関心のある講習を選択して受講しているため、例年高い評価を得ている。特に、実習や実験、グループ協議などがある講習の事後評価は高くなる。

しかし、事後評価のポイントは各講習の平均であるため、高等学校教員など専門的に学びたい受講者にとっては満足度が高いケースもある。

イ) 講習の様子と受講者のコメントからの分析

| 科目別受講者層(学校種・世代・性別) | | | | 0人 | 5人～9人 | 10人～14人 | 15人～ | | | | | | | | | | |
|--------------------|----------------------------------|----|-----|-------------|-------------|-------------|----------------|--------------|----------------|----------------|--------------|---------------------|---------------|---------------|-------------|----|----------|
| 講習科目名 | 受講者数 | 内訳 | | | | | | | | | | | | | | 合計 | |
| | | 世代 | 性別 | 幼稚園に勤務している者 | 小学校に勤務している者 | 中学校に勤務している者 | 義務教育学校に勤務している者 | 高等学校に勤務している者 | 中等教育学校に勤務している者 | 特別支援学校に勤務している者 | しこも園に勤務している者 | 幼保連携型認定こども園に勤務している者 | 認可保育所に勤務している者 | 認可外施設に勤務している者 | 幼稚園と同一設置する者 | | 職（非現）その他 |
| 10066 | 【選択】最新の健康・保健・スポーツ科学を保健体育の授業に活用する | 17 | 30～ | 男 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 2 | 0 | 0 | 0 | 1 | 5 | 9 |
| | | | ～39 | 女 | 0 | 0 | 3 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 6 |
| | | | 40～ | 男 | 0 | 0 | 3 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 5 | 2 |
| | | | ～49 | 女 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| | | | 50～ | 男 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 |
| | | | ～59 | 女 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | | | 60～ | 男 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | | | | 女 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 合計 | | | | 0 | 1 | 8 | 1 | 3 | 1 | 2 | 0 | 0 | 0 | 1 | 17 | 17 | |

以下の講習を紹介し、講習の様子や受講者のコメントから、特徴を考察してみたい。

10066 「最新の健康・保健・スポーツ科学を保健体育の授業に活用する」

この講習の受講者は、中・高の保健体育科の教員が対象である。シラバスを紹介する。

【講習の概要】

- (1) 運動の評価のための標準動作モデルを理解する。
- (2) 最新の体育・スポーツ用具の開発状況を理解する。
- (3) 運動が健康に及ぼす影響の最新理論を理解する。
- (4) 我が国のスポーツの力による健康政策の方向性を理解する。

【講習の内容】

- (1) 標準動作モデルの作成方法を説明し、変動係数、動作逸脱度（Zスコア）を用いた動作の評価方法および注意点を講義する。
- (2) 3Dプリンターを活用した体育・スポーツ用具の開発の現状を講義し、3Dプリンターの実働状況を確認する。 体育の施設見学
- (3) スポーツ・運動と健康の関係の講義（80分）
- (4) スポーツの力による健康政策の講義（40分）、課題提示によるグループ討議（30分）、まとめ（10分）

次に、受講者評価書（事後アンケート）に記載された受講者からのコメントを紹介する。

【主なコメント】

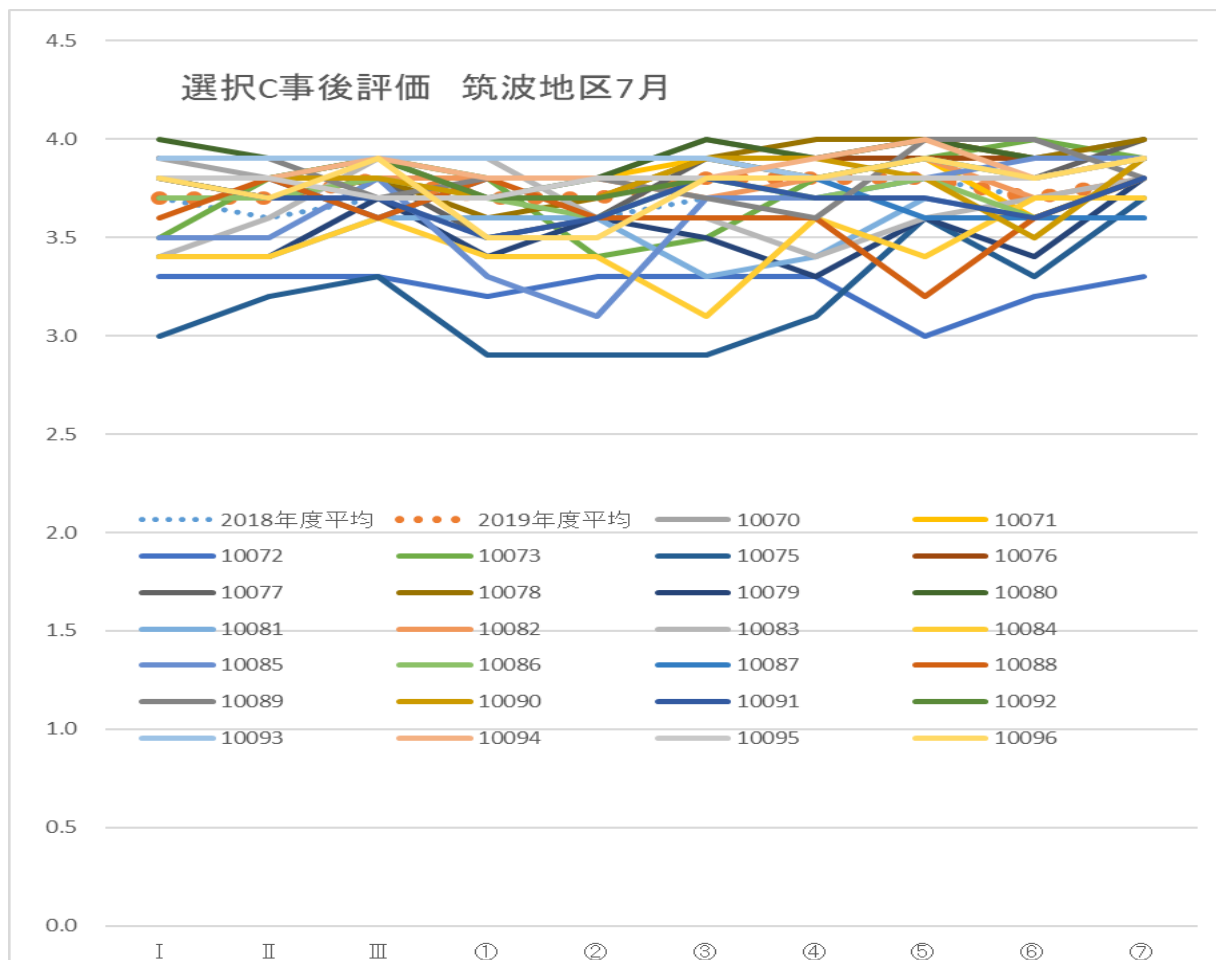
- ・最新ということで、3Dプリンターや、これからの保健、健康指導に役立つものが多く参考になりました。
- ・自分自身の知識を深め、意欲の向上に非常に有効な講習であった。そのまますぐに現場で役に立てる内容ではないですが、とても良かったです。
- ・内容が興味深く非常に勉強になりました。

スポーツ科学の分野の最新の情報等が分かる講習で、専門に指導している教員にとって刺激になったようで、事後評価も高かった。

ウ) 第2回講習の評価分析

第2回の選択C講習は、7月に筑波キャンパスを会場に26講習準備し、25講習(1講習不開講)を開講した。開設講習数の種類が多くあったので、1講習当たりの講習充足率は下がっている。人数が10人以下であったのが5講習あった。専門的な内容で充実した講習であったので、少人数ではもったいないというコメントが書かれ、項目⑤の受講者数のポイントが低い講習もあった。

評価の高い講習はやはり実習・実験やグループ協議が多い講習である。



| 科目別受講者層(学校種・世代・性別) | | | | 0人 | | 5人～9人 | | 10人～14人 | | | | 15人～ | | | | | | | |
|--------------------|-----------------------------|----|-----|-------------|-------------|-------------|----------------|--------------|----------------|----------------|--------------|---------------------|---------------|---------------|------------------|----------|----|----|---|
| 講習科目名 | 受講者数 | 内訳 | | | | | | | | | | | | | | | 合計 | | |
| | | 世代 | 性別 | 幼稚園に勤務している者 | 小学校に勤務している者 | 中学校に勤務している者 | 義務教育学校に勤務している者 | 高等学校に勤務している者 | 中等教育学校に勤務している者 | 特別支援学校に勤務している者 | 子ども園に勤務している者 | 幼保連携型認定こども園に勤務している者 | 認可保育所に勤務している者 | 認可外施設に勤務している者 | 幼稚園と同一設置に勤務している者 | その他（非現職） | | 合計 | |
| 10093 | 【選択】学校トラブルへの法的対処(中学校・高等学校編) | 31 | 30～ | 男 | 0 | 0 | 1 | 1 | 3 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 8 | 14 | |
| | | | ～39 | 女 | 1 | 0 | 3 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 6 | | |
| | | | 40～ | 男 | 0 | 0 | 1 | 1 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 5 | 8 |
| | | | ～49 | 女 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | |
| | | | 50～ | 男 | 0 | 1 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 6 |
| | | | ～59 | 女 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 | |
| | | | 60～ | 男 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 3 |
| | | | | 女 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | |
| 合計 | | | | 1 | 2 | 8 | 2 | 11 | 0 | 5 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 31 | 31 | | |

以下、特徴の見られる講習について、講習補助者の報告書や受講者評価書の自由記述などからその詳細を見てみたい。

10093「学校トラブルへの法的対処（中学校・高等学校編）」

【講習形態】

午前中は、学校におけるトラブルの近年の傾向や、問題発生メカニズムの説明、および設例に基づいた講義が行われた。午後には数人のグループに分かれ、事例をもととした設問についてグループディスカッションが行われ、各グループの代表者が結果を発表し、最後に講師が総括的な解説を行った。

【講義内容の概要】

近年、人格障害が疑われる保護者等による学校や教師に対する執拗な攻撃が目立って増えていることが指摘された。背景には社会全体としての人間関係の変化があり、その中で根源的規範が揺らいでおり、形式的な一般的規範による拘束的対応では問題は拡大するのみであるから、各人においては個々の事態について批判的自覚的に把握し柔軟に対応することの重要性が指摘された。

現状では、学校の組織的対応は信頼性に欠け、教員個人に負担がかかることが多いが、教員個人の対応では限界があるから、学校としては組織として対応できるよう体制を整える必要性が述べられた。しかし、近年は、学校が教員を、いわば、見放してしまうような扱いをする例が散見され、好ましくない、とされた。

また、最近、通学バスを待つ生徒や保護者が襲われるという事件があったが、通学路に関しては、問題が起こったときに法律的にどのような扱いがなされるのか、実は法律学においてほとんど議論がされていないという問題が指摘された。

午後には、数人のグループに分かれ、事例をもととした課題についてグループごとに関連して生じる細かい問題点と対応策について議論が行われた。各グループの代表者が議論を要約して報告した後、講師が総括的に解説し、また、課題のもととなった実際の事件の顛末についても説明がなされた。

【受講者の様子】

受講者の学校トラブルへの対処法への関心は高いようだった。また、後半のグループディスカッションでも活発な議論が行われていた。受講者である教員の職場である個々の学校でも、トラブルへの対処法はリアルな問題として強く意識されている様子であった。一般に、一人の教員が超過負担に陥るのを避けて学校が組織として対応するのが当然とする意見が、以前よりも増えてきたように思われ、教員の意識はそのような方向に少しずつ変化しているようでもある。

【感想】

早朝に小雨がぱらついたようで、昼になっても曇天で、気温はそれほど上がらなかった。しかし、湿度は高く息苦しくもあるので、空調が難しかった。室温環境がなかなか適切に調整できない。必ずしも快適な状況ではない受講者の方もいらしたかもしれないが、熱心に聴講され、議論も盛り上がったように思う。今年は気温が低めで、体調不良を訴える方も出ず、その点はよかったように思う。

次に、受講者評価書（事後アンケート）に記載された受講者からのコメントを紹介する。

【主なコメント】

- ・ディスカッション、良かったです。提示された内容以外に、時間があつたので他の先生方の学校のことなども聞けました。→リフレッシュできました。
- ・学校は、大きなことがあっても「法的対応」には消極的な気がします。人間的な信頼関係の崩壊が一つの基準かなと感じました。
- ・実務的な内容が多く今後に向けて一つの指針になった。法律のを中心とした軸をもつこと

の必要性を感じた。

・午後のグループでの課題の検討が大変有意義でした。校種の異なる先生方のそれぞれの立場からの意見にはっとさせられ、似た考えをもっていることに同じ教育者として根本の考えは一緒なんだということを再確認できました。午前中の講義も、ここ10年での保護者や学校を取り巻く環境が変わってきたことに触れられておりましたが、共感できるものばかりでした。今後は、どう対応していけば良いのかが確立されれば、現場としてはありがたいところです。

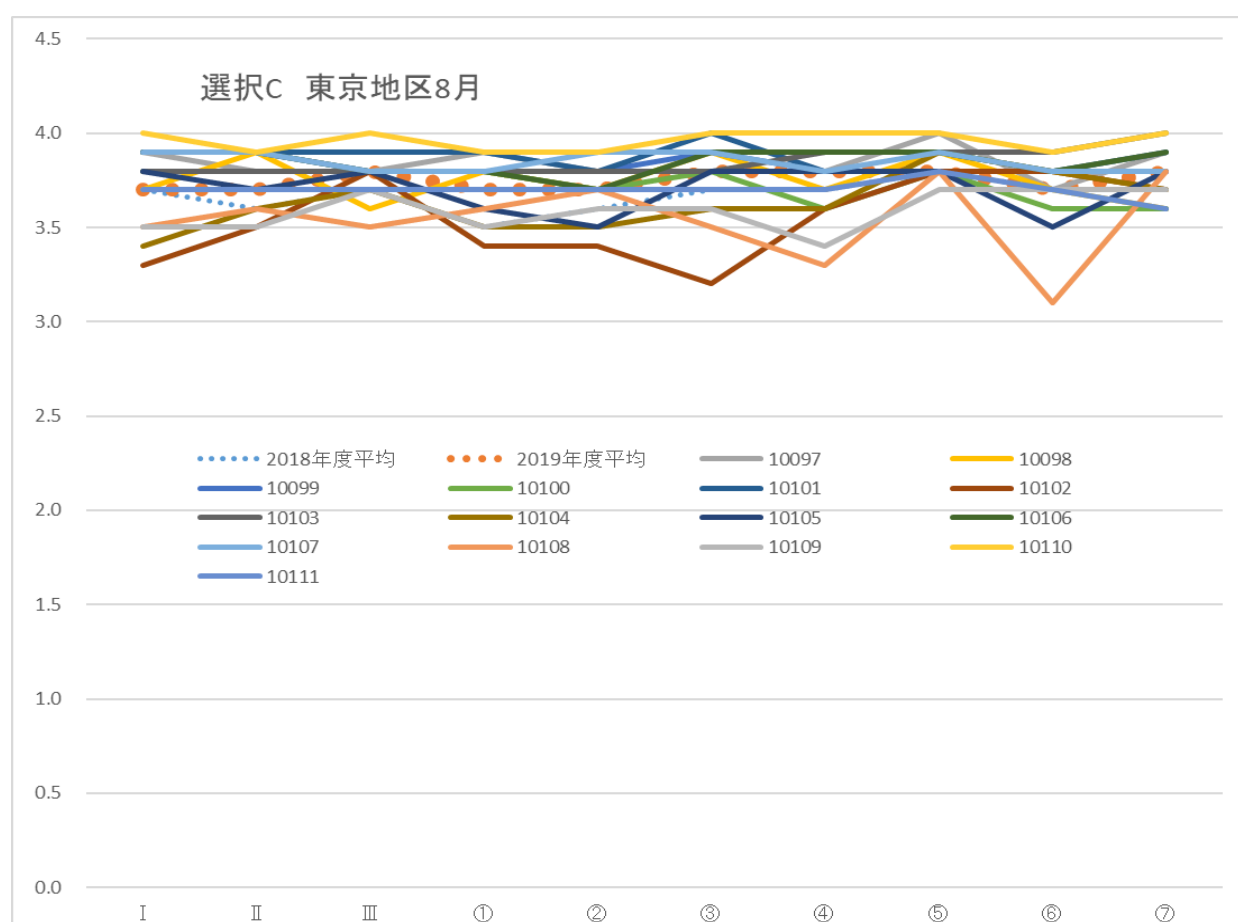
本講習は、午前中の講義と午後のディスカッションのバランスの良い講習である。中・高編ではあるが、幼稚園から特別支援学校まで幅広い学校種の先生方が受講している。午後のディスカッションが大変有意義であったとコメントにあるように大学の対面型の良さを活かした講習の構成となっており、各項目に対してポイントが高い。空調については、その日の天候によるので調整が難しい部分がある。

10090・10091「楽しく学べるやさしい天気予報活用術」

この講習は、昨年までは附属高等学校で開講していたが、今年度は初めて筑波キャンパスで開講した。担当講師とともに雷の専門家（理学博士）がゲストとして参加され指導を受けられるものである。東京地区にアクセスがしにくい受講者にとっては良い機会となった。

エ) 第3回講習の評価分析

表 第3回選択Cの事後評価の集計結果



第3回の講習は、8月に東京地区で13講習、茨城県自然博物館で2講習、東京臨海広域防災公園で1講習の合計16講習を実施した。

第3回の評価は全体的に高い。特に10110「東洋医学的アプローチによる生徒の健康管理」では、8割方が満点の項目である。

また、ミュージアムパーク茨城県自然博物館や東京臨海広域防災公園を会場とした講習も施設を利用した講習があり、受講率も高く事後評価が高い。

第3回の選択Cは複数の会場を使用して実施している。附属学校を活用する講習では、施設面の都合から定員数が限られてしまう状況がある。また、専門家を講師として招いての講習は、同じ課題を持つ受講者ニーズにとって、解決の糸口が見つけられるとして、この講習を求めて広範な地区から受講者が来ている。それらの課題に丁寧に対応し、受講者ニーズに合わせた満足度の高い講習になっていることが評価結果から伺える。

オ) 講習の様子と受講者のコメントからの分析

| 科目別受講者層(学校種・世代・性別) | | | | | 0人 | | 5人～9人 | | 10人～14人 | | | | 15人～ | | | | | |
|--------------------|------------------------------|-----|-----|-------------|-------------|-------------|----------------|--------------|----------------|----------------|--------------|----------------|------|-------------|-----------------|----------|-----|----|
| 講習科目名 | 受講者数 | 内訳 | | | | | | | | | | | 合計 | | | | | |
| | | 世代 | 性別 | 幼稚園に勤務している者 | 小学校に勤務している者 | 中学校に勤務している者 | 義務教育学校に勤務している者 | 高等学校に勤務している者 | 中等教育学校に勤務している者 | 特別支援学校に勤務している者 | こども園に勤務している者 | 認定こども園に勤務している者 | | 認可外施設に勤務する者 | 幼稚園と同一設置者が設置する者 | 職（他）（非現） | | |
| 10111 | 【選択】発達期のこころと行動～小児科・精神科の視点から～ | 111 | 30～ | 男 | 0 | 2 | 3 | 0 | 4 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 1 | 13 | 62 | |
| | | | ～39 | 女 | 2 | 16 | 4 | 0 | 10 | 0 | 10 | 0 | 5 | 0 | 2 | 49 | | |
| | | | 40～ | 男 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 3 | 26 |
| | | | ～49 | 女 | 1 | 6 | 4 | 0 | 3 | 1 | 7 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 23 | |
| | | | 50～ | 男 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 21 |
| | | | ～59 | 女 | 0 | 8 | 2 | 1 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 17 | |
| | | | 60～ | 男 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| | 女 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 | | | | |
| 合計 | | | | | 3 | 34 | 14 | 1 | 19 | 1 | 24 | 0 | 5 | 0 | 10 | 111 | 111 | |

10111「発達期のこころと行動～小児科・精神科の視点から～」

講習の様子や受講者のコメントから、特徴を考察してみたい。

【講習概要】

小児期から青年期に至る発達途上の子どもや若者の心理学・精神医学的問題について、小児科・精神科の視点から最近のトピックを紹介する。精神科の視点から、メンタルヘルスの動向について統計を交えて紹介した上、若者に見られる主な精神疾患（統合失調症、うつ病、パニック障害、摂食障害など）の特徴を解説。小児科の視点から、近年大きな話題となり、学校現場でも対応を迫られている発達障害（自閉スペクトラム症、ADHD、知的発達症、限局性学習症など）について、その概念の説明と対応のコツについて概説する。

【講習内容】

1. 精神科の視点から（9：00～12：30 講義＋試験：3時間、休憩：30分）

（1）メンタルヘルスの現状と主な課題（75分）

（2）うつ病その他の精神疾患（75分）

（3）筆記試験（30分）

2. 小児科の視点から（13：30～17：00 講義＋試験：3時間、休憩：30分）

（1）発達障害の概要（概ね75分）

（2）対応のコツ（概ね75分）

（3）筆記試験（30分）

次に受講者評価書（事後アンケート）に記載された受講者からのコメントを紹介する。

【主なコメント】

- ・前半は、興味のある事柄だったので事細かく学ぶことができてよかったです。後半の担当教師の講義を聴くためにこの講習を選んだので、とても勉強になりました。
 - ・日本では、まだまだ発達障害に対して学校でなかなか理解が得られないのが現実なんですね。参考図書などたくさん挙げていただきありがとうございました。
 - ・午前中の講習は、資料の全てのお話を聞けなかったのが残念だった。選んで受講したのに。せめてテスト問題の内容は最低限講義していただけるようにしていただきたかった。休日を利用して受けに来ているので、「資料の残りは持ち帰って・・・」というのではなく、講習の時間を充実させていただくことの方がありがたいと感じる。
 - ・医学的な面からのお話が聞け、今後の指導にいかしていきたいと思った。会場への案内やトイレの案内など、初めてこちらの施設を利用したので、不安を感じながらの移動・利用だった。案内図が同封されていたが会場にも明示していただけるとよかった。
 - ・受付方法：一度別の場所ですてからというのは分かりにくく面倒。
 - ・シラバスに書かれていた通り、上着を持ってきたがそれでも寒かった。省エネ等をうたっているのであれば、適切な温度設定もするべきでは？と疑問に思う。私は後ろの方に座っていたが、ひょっとしたら前と後ろで冷房の当たり方が異なるのかも。
 - ・認定講習中、ラインをずっとしてる・インスタを見ている受講生がいる。認定講習としていかなものか。
 - ・とても分かりやすく、面白い話だった。お勧めの本も知れたので、参考にしたい。
- 最終案内を送っていただいた際「メールで・・・」という文字があり、実際と異なりましたが、問い合わせに対して丁寧に対応していただきました。
- ・「小児科・精神科の視点から」という副題からもっと臨床例が多く、専門的なのかと考えておりました。しかし、良い意味で期待を裏切られました。概論、ケーススタディー、具体的な行動のポイント、そしてさらに学びを深めるための図書の紹介と盛りだくさんですが、実践につながる内容でした。
 - ・「みんな同じだったら、おそろしい世界、ロボット」この言葉に自分自身が救われました。具体的かつ最新の情報を教えていただきありがとうございました。紹介していただいた本からさらに勉強できる場、指針があり助かりました。
 - ・午前は午前で試験があり、午後の部と分かれていたので、しっかり内容を振り返りながら試験を受けることができよかったです。医療者（Dr.）の診断という目線、視点からの生涯に関する話を聞くことができたのが良かったです。

本講習は小児期から青年期に至る子どもたちの心理学的・精神医学的問題についての講習で、小児科医や精神科医の専門家の視点からの講義であるので受講者の申し込みが多い。学校現場での体験で対応している教員にとっても、医学的見地にたった知識を得ることにより、学校現場の対応について自信をもって行える手助けになっていることが事後アンケートからも読み取れる。

受講者が自信をもって学校現場での指導ができるようにすることが、教員免許状更新講習の目的でもあるので、今後も受講者のニーズを把握して講習を設定していきたい。

受講者が更新講習で受けた学習内容を学校教育でどのように活かせるか明確にしていることは、全学で共有できることから、他の講習にも活かしていく必要がある。

本学の選択 C は、総合大学として本学の特色が出ている講習区分である。講師の専門を基にした講習の内容により、各分野の最先端の情報を得られる。受講者の事後評価書のコメント欄に「現場での活用の仕方を具体的に示してほしい」等書かれていることがあるが、受講者側が、「得た知識を活用する力」の重要性については、日ごろ教師が子供達に求め、育成しているものである。指導する教員が自ら活用する力を付けておくことが大切である。

選択 C は、講師の専門分野に関する講習であるため、毎年、内容の難易度や受講者の職種・学校種によるニーズが評価に表れてしまう。専門分野をいかに分かりやすく受講者に伝えられるかは担当講師の努力事項である。そして、講習内容が教育現場でどう活用できるのか等については、担当講師は明確に示すのではなく、受講者側が主体的に学び、どのように学校教育で活かすことができるかを受講者に考えさせる時間までを組み込んだ授業構成をしていくことでより深い有意義な講習になると思われる。そのためにも、「伝える側」と「活かす側」双方向の観点から選択 C を充実させることが求められている。

一方、評価がマイナスの講習の特徴としては、受講者からのコメントによると講習内容が専門的すぎて受講者の求めるレベルに合わないことがあげられた。しかし、数多くの講習の中で受講者が選択してきたことを考えると、担当講師の考える「おもしろさ」や「初級」と受講者の捉えの差があるために難しい内容であったと感じてしまうのであろう。

運営側としてできることは、担当講師に対しては、①事前アンケートの工夫：スキルの把握の必要な講習は、受講者の現状が分かるような事前アンケートを作成する ②受講者の傾向の把握：学校種や年齢構成の集計表を作成する。受講者に対しては、①受講する際に、講習内容が分かるようなシラバスの提示、②スキルに応じた対応：TA の人数を増加して対応できる場合は、スキルに応じたグループ編成をする。受講者の知識やスキルは様々であり、通信型の更新講習でなく対面型の本講習を選択している受講者に対して、すべての希望に対応することは困難であるが、可能な対策を講じたい。

講習期間の猛暑対策として、冷房で対応しているが、冷房の状態は広い教室では同一にさせることは難しいことを周知し、受講者の協力を得ることが必要になってくる。

今年度は、更新講習の受講者の中で、今後講師として働く予定者の割合が増えた。また、2 巡目時期の特徴としては、64 歳・65 歳の受講者と採用が増えた 31 歳～の 30 代受講者というように幅広い年齢の受講者が増えてくる。

このような受講者の勤務経験の差を考慮しながら、どのように更新講習を充実させていくのかを考える必要がある。

(5) 選択D－附属学校実践演習－

① 選択D「附属学校実践演習」の概要

選択Dは、「附属学校実践演習」と題し、附属学校の教育現場の見学や、授業実践を参観して最新の教育方法等を実践的に学ぶ講習である。6月、7月、8・9月、10月以降の4回に分けて実施しており、本学の更新講習の大きな特色となっている。

本年度は16講習を各附属学校で実施した。11校ある附属学校が、それぞれ1回～3回開講している。人気のある講習であり、なかなか受講ができないという要望がある。しかし、本年度は附属学校の耐震工事が行われるため、講習数を減らさざるを得なかった。そこで、講習数を減らした附属学校は定員数を増やして対応した。対象者数の減少も考慮し、本年度は定員数を昨年度より24人減らして定員を582人にした。すぐに定員に達したが、受講者の都合によるキャンセルなどがあり結果としては、本年度の受講決定者数は424人であり、定員充足率は約72.9%であった。

表 選択D一覧

●会 場 各附属学校（16講習）

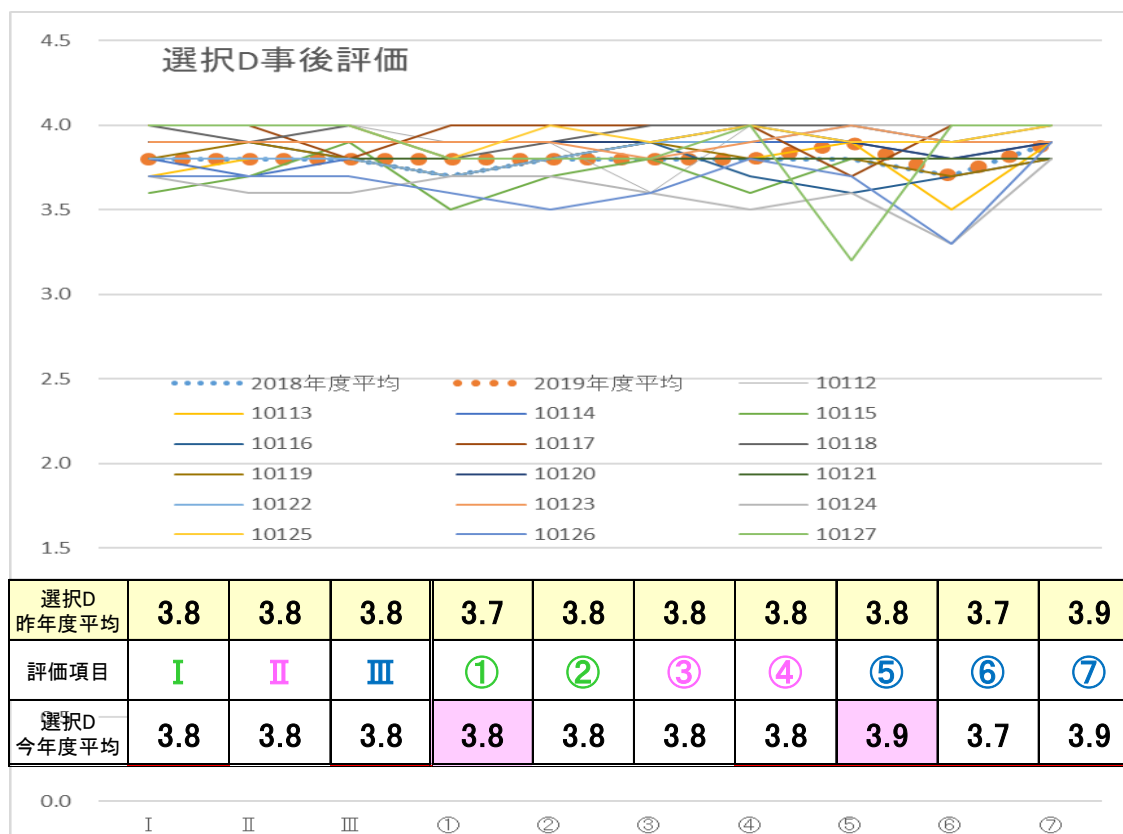
| 講習名 | 講習番号 | 期 日 | 定員 | 受講決定者数 |
|---|-------|---------------|----|--------|
| 附属視覚特別支援学校実践演習 | 10112 | 令和元年 6 月 15 日 | 24 | 24 |
| 附属大塚浜特別支援学校実践演習 | 10113 | 令和元年 6 月 15 日 | 36 | 34 |
| 附属桐が丘特別支援学校実践演習 | 10114 | 令和元年 6 月 15 日 | 16 | 15 |
| 附属小学校実践演習 | 10115 | 令和元年 6 月 22 日 | 40 | 37 |
| 附属中学校実践演習 | 10116 | 令和元年 6 月 22 日 | 60 | 16 |
| 附属聴覚特別支援学校実践演習 | 10117 | 令和元年 6 月 22 日 | 30 | 10 |
| 附属久里浜特別支援学校実践演習 | 10118 | 令和元年 6 月 22 日 | 25 | 16 |
| 附属高等学校実践演習 | 10119 | 令和元年 6 月 29 日 | 40 | 18 |
| 附属小学校実践演習 | 10120 | 令和元年 7 月 6 日 | 40 | 38 |
| 附属駒場中・高等学校実践演習 | 10121 | 令和元年 8 月 22 日 | 50 | 45 |
| 附属聴覚特別支援学校実践演習 | 10122 | 令和元年 8 月 26 日 | 40 | 36 |
| 附属小学校実践演習 | 10123 | 令和元年 9 月 7 日 | 40 | 39 |
| 附属大塚特別支援学校実践演習 | 10124 | 令和元年 11 月 2 日 | 36 | 35 |
| 附属久里浜特別支援学校実践演習 | 10125 | 令和元年 11 月 9 日 | 25 | 22 |
| 附属高等学校実践演習 | 10126 | 令和元年 12 月 7 日 | 40 | 34 |
| 附属坂戸高等学校実践演習 | 10127 | 令和元年 12 月 7 日 | 40 | 5 |
| 合計 16 講習 当初定員 582 人 受講決定者数 424 人 定員充足率 約 72.9% | | | | |

② 選択D「附属学校実践演習」に対する事後アンケートの分析

ここでは、Iの4の(2)⑥や(3)⑥で分析した選択Dの評価について、さらに詳細に分析する。

昨年度の選択D講習の受講者評価書(事後アンケート)の評価平均を基準に、各講習の項目の評価結果の様子を色分けして表した。

表 第1～4回選択Dの事後評価の集計結果



本学の選択Dの評価平均は、3.7～3.9となり、例年大変高い評価を得ている。選択Dの事後評価は毎年高いので、前年度の評価平均を上回することは難しいが、本年度も各附属学校の努力により昨年度の評価平均以上の評価を得ることができた。項目①ニーズと受講者数が0.1ポイントずつ上がった。

項目①受講者のニーズについては、講習担当者の講習内容や構成等に工夫がされた成果がでたと考えられる。項目⑤この受講者数は、今年度は、全体での対象者数が減少したので、申込みしやすかったためと思われる。

一方で上の表やグラフから分かるように、⑤受講者数と⑥環境について低くなっている講習がある。この講習の事後評価のコメントを見ると、「素晴らしい講習であったのに受講者数が少なくもったいない。是非、PRして受講者数を増やすべきだ」という旨の内容が書かれていた。受講者数や講習環境に対する不満ではなく、広報活動に対する要望であった。

各校とも日々多忙な中、公開研究会と更新講習を開催している現状の中、毎年良い評価を維持できるように校内の体制づくりや運営方法の工夫改善が必要になる。

10115, 10120, 10123「附属小学校実践演習」

本講習は、6月・7月・9月の3回、附属小学校を会場に実施した。公開する教科を変え、開講しているという特徴がある。6月は37人、7月は38人、9月は39人が受講した。受講者は、小学校の30代の教員の割合が高い。ここでは附属小学校で行われた3つの講習について、受講者のコメントから講習の様子を見る。

| 科目別受講者層(学校種・世代・性別) | | | | 0人 | | 5人～9人 | | 10人～14人 | | 15人～ | | | | | | | | | |
|--------------------|---------------|----|-----|-------------|-------------|-------------|----------------|----------------|----------------|----------------|--------------|---------------------|-----------------------|---------------|----|------------------|----------|----|---|
| 講習科目名 | 受講者数 | 内訳 | | | | | | | | | | | | | 合計 | | | | |
| | | 世代 | 性別 | 幼稚園に勤務している者 | 小学校に勤務している者 | 中学校に勤務している者 | 義務教育学校に勤務している者 | 高等専門学校に勤務している者 | 中等教育学校に勤務している者 | 特別支援学校に勤務している者 | こども園に勤務している者 | 幼保連携型認定こども園に勤務している者 | 認可こども園及び認可保育所に勤務している者 | 認可外施設に勤務している者 | | 幼稚園と同一施設に勤務している者 | その他（非現職） | 合計 | |
| 10115 | 【選択】附属小学校実践演習 | 37 | 30～ | 男 | 0 | 6 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 6 | 19 | |
| | | | ～39 | 女 | 0 | 11 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 13 | | |
| | | | 40～ | 男 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 8 |
| | | | ～49 | 女 | 0 | 5 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 7 | |
| | | | 50～ | 男 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 6 |
| | | | ～59 | 女 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 4 | |
| | | | 60～ | 男 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 4 |
| | | | | 女 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | |
| 合計 | | | | 0 | 31 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 5 | 37 | 37 | | |

【主なコメント】

<10115> (国語・家庭科・総合的な学習)

・大変勉強になりました。とても面白くわくわくしながら受けることができました。資料もありがとうございます。家庭科は専科が行っていたので、理解が難しかったが、事例を多く紹介してくださり、もっと学びたいと思いました。自校でも共有していきます。

・実践的な内容で明日からの授業にすぐ生かしたいと思いました。(他2名)

・新学習指導要領の内容についても踏まえつつ、講義してくださり、分かりやすかった。国語と家庭科のセットだったのはなぜか。できれば主要教科のセットにしてほしかった。(家庭科は専科のため)でも、家庭科も他教科に活かせる内容でとても分かりやすかったです。

・大変分かりやすい講義をありがとうございました。ただ、パワーポイントの資料は情報量が多すぎて、記録しきれませんでした。特に重要な箇所だけでも紙面でいただくか内容を絞るかしていただけると助かります。(他3名)

・国語はとても楽しく子どもの気持ちになって考えることができたし、今まで指導されてきた教材においてもまた新しい視点で考えることができた。

・授業を参観してからの講義のためイメージしやすく、実践につながる内容でした。(他7名)

・国語の授業で、発問の仕方や子どもたちの考えを広げてつないでいく姿が素晴らしくとても勉強になった。

<10120> (音楽・算数)

・教師が子どもにどれだけ深く考えさせられる授業をしているか振り返ることの大切さをしみじみ感じました。

・初めて良い音楽の授業をみました。子どもたちの生き生きとした姿、むしろ生き生きとさせる先生の

技術にわくわくしました。音楽がしたい！と思う時間になりました。

- ・授業を見て共通の土台があったからこそ、理解が深くなったと思いました。(他 4 名)

また、音楽と算数を対比することで新しく見えてくることもありました。

- ・本日の講義をうかがって自分の考えが間違っていなかった！と思えた。
- ・「音楽の授業は」と思っていたのですが、大変学びが多く、すぐに 1 年生と「音楽づくり」、「鑑賞」、「踊りの創作」もやってみたいと思いました。今日来なければ、ずーっと「うた&ピアノカ指遣い」だけの楽しくない授業だけだったかもしれません。
- ・様々な研修会に行ってさらに学んでいきたいです。
- ・いつも学校で見る形式的な研究授業ではなく、普段の授業を見られたのが良かった。子供のつぶやきの拾い方、雰囲気作り、私も大切にしていきたい。
- ・お二人の先生の授業を拝見して、子どもにとって学びの多い授業を作るには広く豊富な知識が不可欠だと思いました。自身の研鑽を積んでいかねばと思いました。(他 1 名)
- ・今後の自身の実践につなげていきたい。(他 6 名)

<10123> (算数・国語)

- ・主体的・対話的な学びについてあいまいであったところが明らかにできた。授業参観で児童とのやりとり反応を見ることができ大変勉強になりました。
- ・学びがたくさんありました。やはり、実際の子どものすがたを生で見られるのはうれしいです。
- ・自分が普段行っている授業をもう一度見直そうと思えました。筑波大学附属小の先生方の授業はいつも大変勉強になります。また、公開に来させていただきます。
- ・先に指導案をいただけて良かった。とても勉強になりました。明日からいかしていきたい。(他 3 名)
- ・できれば授業後は講演だけでなく、協議会のような場があるとより実践的な研修になったかと思う。
- ・授業や学級経営をどうしたらよいか模索しているが、自分の教師生活を振り返って今後を考えていくうえでも有意義であった。
- ・主体的・対話的な学びと言われてもよくわからない部分が多かったが、本日の授業参観で少しイメージが持てたように思います。
- ・附属小学校の先生方の授業を参観したいと以前から思っていましたものの、なかなかできないのが現実でした。今回は免許更新の機会に貴重な時間を過ごすことができました。
- ・国・算その都度テストというのも書きやすかったです。
- ・授業を見せていただけることがとてもありがたいです。講義ももちろん素晴らしいのですが、授業が見られることは本当に良いことです。職場でもみんなに「おすすめ」しています。貴校でも負担だと思いますが、今後は是非続けてください。(他 15 名)
- ・どんな授業をすればよいのか、様々な視点からお話いただき今後の授業の組み立てや子どもとの関わり方のヒントとなりました。
- ・講義の教室の冷房が少し寒かった。
- ・昼休みをもう少し増やして外で食べられるようにしてほしい。筑波大学に関するのではないが、行政の制度として、研修を区や都の研修に振り替えられるようにしてほしい。

コメントから本講習が実践的で、受講者が求めている授業力向上に大きく資する内容であったことが分かる。本講習を受講することで、新たな意欲をもち、自己研鑽し指導に臨もうとする受講者の変容が見て取れる。授業を公開することで実践研究の成果を示すことの意義を感じる。

附属小学校の事後評価において、以前は附属小学校の学習環境と勤務校との差を感じて、実践が難しい旨のコメントが書かれていたが、今年度は明日からは是非実践したいという前向きなコメントが増えた。担当講師による実践化の説明が丁寧にされていたことや意欲の高い受講者が多くなったことが考えられる。意欲の高さは、小学校の受講率からもうかがえる。「10115」が93%、「10120」が95%、「10123」が98%であり、定員に達していたが、キャンセルのために100%にならなかった講習である。結果的に先着順となったこの講習の受講者は、意欲が高かったことが分かる。

6月に実施された附属中学校と附属高等学校は、受講率は27%、45%とやや低くなった。これは、対象受講者数の減少と学校行事等で忙しい時期であることが考えられる。しかし、6月の実施について受講者からは、「年度初めのこの時期の研修会等は実施されていないので、参考になる。」という意見も寄せられている。反対に「良い講習であったのに受講者が少ないのが残念である」として、事後評価の項目受講者数のポイントを下げている受講者がいた。8月に実施の附属駒場中・高等学校の実践演習は、90%と高い。

12月に「附属高等学校」と「附属坂戸高等学校」の実践演習が設定され、内容的には双方充実したものであったが、実施日が同日であったことが影響してかアクセスしやすい都内の高等学校の方に多く受講者が集まってしまった。

上記の講習以外では、「附属視覚特別支援学校」、「附属大塚特別支援学校」、「附属桐が丘特別支援学校」、「附属久里浜特別支援学校」、「附属聴覚特別支援学校」において、各校の強みをいかした講習がなされ、4.0のポイントを得ている。

10113, 10124「附属大塚特別支援学校実践演習」

本講習は、6月と11月に附属大塚特別支援学校を会場に実施した2つの講習の受講者のコメントを紹介する。どちらも定員36人に対して、6月は34人、11月は34人が受講し、受講率は94%と高かった。

【主なコメント】

<10113>

- ・支援を要する子への手立てになれば、と思い、受講を希望しました。
- ・最新の技術であっても、あくまで子どもの目標や目指す姿に達するための手段として、学校全体で活用していこう、と考えていることが分かり、非常に感銘を受けた。また、個別の指導計画の評価形式など、自身にとって、新しい情報も得られたため満足できた。
- ・配布された資料の一部の文字がとても小さくて読み取れず、(高齢で) ちょっと残念でした。お話の内容はとてもわかりやすく聴きとりやすく、良い学びになり明日からの活力になった。

- ・土曜日の授業公開となり、普段、他校の授業公開に行く機会がないので、とても参考になりました。
- ・貴校がやってくれればモデルとなるかもと期待しています。一日を通して、自分の支援、指導をふり返し、見直す機会となりました。
- ・自身の学級経営や授業に役立てたいと思います。

<10124>

- ・案内等も とても丁寧でした。ありがとうございました。
- ・全ての校種を参観でき、大変参考になりました。
- ・授業を見て、子供たちが生き生きと活動する工夫が多くされていてとても勉強になった(他 3 名)。
- ・地域支援部の先生が研修などもされると聞き、是非お招きしたいと思いました。特別支援の視点を自分の学校の職員にも多く持ってほしいと改めて感じました。
- ・会議室が狭かったので、もう少し広い教室だとありがたいです。
- ・校舎地図が欲しかった。(他 1 名)
- ・スライドが見づらかった。(会場が窮屈だった) 資料に参考文献を入れてほしい。
- ・授業参観に講義と大変充実した内容でした。ありがとうございました。
- ・丁寧に計画・実践されていると感じました。また、高等部のイメージマップは本人の授業への意識も変わり、とても良いものだと思います。参考にさせていただきます。
- ・授業参観の時間は貴重ですが、少し長く感じました。授業の意図やプロセスについて、教材の工夫等についてより深めていただけるとさらに充実すると思います。ありがとうございました。
- ・午後の中等部の講義について、スライド資料提供ありがとうございます。個人情報等以外はできるだけスライドを入れてほしいと思いました。
- ・受講前に郵送で本日の案内をいただけたのはとてもありがたかったです。

受講者のコメントを総括してみると、授業参観後に講義を行うという形式が、受講者にとって講習内容を理解しやすく高評価を得ている。附属学校を会場として実施する選択 D は本学の大きな特色であり、附属学校の知名度や、これまでの実績により、関東圏を中心に、北海道や愛知県、新潟県など遠方からの受講者もいる。

更新講習 2 巡目となり、更新講習の年齢別割合をみると、30 代の受講者が増えてきている。学習指導の向上を図ることが特に目標となっている 30 代の受講者には、是非積極的に実践演習を受講してもらいたいと考える。

遠方から参加する実践演習の受講者も毎年おり、内容に対する期待は大きい。実施する附属学校の負担もあるだろうが、先進的な取り組みや指導方法を提案していくのも附属学校の使命でもあるので、容易なことではないが各学校の講習レベルを維持してほしい。

しかし、受講者の全ての要望に応えることは難しい。附属学校が会場であるので、あらかじめ受講者に了承を得たうえで、講習を始めることが必要になってくる。担当講師や講習事務担当者には負担がかかることは軽減していくべきなので、附属学校と連携を密にしながら、事務手続き等の負担を軽減して、担当講師が、更新講習の充実に向けて教材研究に専念できる体制を整備できるよう努めたい。

(6) 東京地区での講習

① 附属駒場中・高等学校での講習

本校の特色を生かした附属学校実践演習および多様な講習

附属駒場高等学校 副校長 梶山 正明

2019 年度は 8 月 22 日（木）～24 日（土）の 3 日間にわたって、本校および本校に隣接する NTT データの研修施設で教員免許状更新講習を実施した。この日程は、地方の受講者も集中的に受講できるよう、東京キャンパス文京校舎での講習と一部重なる形で設定したものである。一方、学校現場では、近年 2 学期の開始を早める傾向があり、受講者のニーズに沿った日程設定の難しさを感じている。8 月 22 日（木）は本学附属学校の特色を生かした選択 D「附属学校実践演習“筑駒の教育”」、8 月 23 日（金）は 2 講習（選択 B）、8 月 24 日（土）は 3 講習（選択 B：2 講習，選択 C：1 講習）を開講した。その結果、選択 B は計 4 講習（昨年度と同数）で 66 名（昨年度 76 名），選択 C は 1 講習（昨年度は 3 講習）で 111 名（昨年度 224 名），選択 D は 45 名（昨年度 46 名）が受講し、総受講者数は 222 名（昨年 346 名）となった。専門性の高い一部の講習を除き、定員の充足率は 9 割を超えている。最近では本校で開講する講習の数が減少傾向ではあるが、本校教員や元教員が講師を務める講習も多く、講習に対応するスタッフの人数を考えると、講習数も受講者数も今年度程度の規模が妥当と考えられる。

昨年度の反省を踏まえて改善した点を中心に、今年度の講習の特徴と今後の課題を挙げる。

- ・定員の多い講習は NTT データの研修施設を使用し、今年度は土曜日 1 日の開催とした。例年のことだが、土曜日はレストランが営業していないので、受講者が昼食難民とならないよう、会場周辺の飲食店マップを配布するなど案内した。今後も継続したい。
- ・NTT データのイベントホールは、会場が広いため空調の調整が難しいため、シラバス記載の「受講当日の準備物」に上着を持参するよう記載したが、今年度も「教室内が寒すぎた」などの感想がいくつかあった。来年度は、直前に郵送する「ご案内」にも明記して注意を促したい。
- ・今年度も開講する時期に合わせて受付終了日を設定した。開講した 6 講習は、どの講習も定員を満たさなかったが、一つの講習を除き 9 割以上の充足率を得ることができた。また、選択 D の附属学校実践演習については、複数の講座から受講者が希望する講座を選択するため受講講座の確認作業が必要になるが、教員免許状更新講習推進室をはじめ、運営スタッフの方々にご協力いただき、大変助かった。
- ・選択 D の附属学校実践演習には、受講者が中学 1 年生の授業に参加する講座があるが、昨年度までシラバスにその記載がなかったため、「高校生の授業が見たかった」という意見が散見された。そのため今年度は、中学生の授業ということを明記した。一方、通常の

授業も参観したいという意見もいくつか寄せられたので、11月開催の本校教育研究会（公開授業）を積極的に紹介していきたい。

- ・NTT データの研修施設借用費は比較的高額であり、NTT データの研修施設での開講については一考の余地が残った。

次に、今年度開講した選択 B・C・D の各講習について簡単にまとめる。

選択 B の 4 講習は、本校の特色がよく表れた講座である。担当した 5 人の講師は本校教諭が 2 人、筑波大学非常勤講師（本校非常勤講師）1 人、元教諭が 1 人である。6 年目となる『書写指導』は、全国的に開講数の少ない芸術系の講習である。受講者のニーズが高く、評価も高いので今後も継続していきたい。また、『演劇の専門家とつくる教室』も受講者の評価が高い講習である。実際に演劇の専門家に参加してもらい、本校生徒も交えてさまざまな体験型ワークショップを行っている。この講座も継続したい。昨年から、『5 年後の ICT 技術と授業・教室～エバンジェリストと教員の対話～』を開講したが、小学校でのプログラミング教育が話題となる中で ICT の専門家を招いての講習は、パソコン初心者でも参加できることもあって高評価を得ることができた。

選択 C 講習『発達期のこころと行動』は、受講希望者が多いため、例年 NTT データのイベントホールで実施している人気の講座である。2 人の専門家（小児科・精神科の医師）による講義には、さまざまな校種の教員から受講申し込みがあった。

選択 D の附属学校実践演習は「体験講座を通して学ぶ“筑駒の教育”」と題し、第 1 部で『学校概要説明』を行い、学校紹介のスライドや学校行事の DVD 映像を使って、受講者に本校の特色を紹介した。第 2 部は体験講座として『①生活のなかの数学』『②英語ディベート入門』『③保健体育授業の新たな教材を探る』『④古典を用いて絵の〈謎〉を解く』『⑤身のまわりの環境地図お助け講座』『⑥大地の語り部“化石を学ぶ”』の 6 講座を用意し、受講者には事前に①～③から 1 つ、④～⑥から 1 つをそれぞれ選択して、2 つの講座を受講していただいた。本講習は、受講者ばかりでなく本校の教員や参加生徒にとっても貴重な学びの場であり、筑波大学の附属学校が目指す「教師教育拠点」としての重要な機能であると再認識した。

② 附属視覚特別支援学校での講習

-現場で活かせる講習をめざして-

附属視覚特別支援学校 副校長 石井裕志

夏の初めに選択講習D「附属学校実践演習」、夏真っ盛りに選択講習B「教科・領域の指導力を磨く」、選択講習C「教師力（総合力・応用力）の向上」、合計8つの講習を附属視覚特別支援学校で実施しました。

6月の「附属学校実践演習」では、「視覚に障害のある幼児・児童・生徒の学びを肌で感じよう」を講習テーマに、幼稚部、小学部、中学部、高等部の実際の活動・授業の様子の参観、「図を触って捉える」演習やアイマスクをつけてのサウンドテーブルテニス（卓球）の体験を交えながら、「見えない、見えにくい」視覚障害についての理解とその配慮、工夫などについて具体的・実践的に考えました。

この講習では、特に「見る以外の力」として「触る力」と「聴く力」に焦点をあてています。サウンドテーブルテニスでは、最初のうちは直立してプレーしていた受講者も、時間の経過とともに音をよく聞こうと、前傾姿勢をとるようになります。触り方についても最初のうちは課題の図を受講生はそのまま触っていますが、次第に図の向きを変えたり、自由に触ったりするようになります。そういう中で、円だと思っていた図形が、実は多角形である事を発見したりします。視覚に障害があるため、これらの感覚を活用しなければならないという観点ではなく、これらの感覚を使う事自体を楽しんで頂きたいと考え、工夫をしています。来年度以降も質を維持しながら、受講者に楽しんで頂ける内容にしたいと思っています。以下に感想を、いくつかご紹介します。

- ・特別支援学校の先生方から直接、講義いただくことなど、めったにない貴重な機会。しかも、授業まで参観させていただき本当にありがとうございました。私は通級指導ですが、視覚認知力の弱い生徒の支援のヒントになることが多く学びました。ありがとうございました。免許更新講習に限らず、このような機会があるとありがたいです。
- ・忙しい中、授業をしてくださった先生が質問にこたえてくださったが、時間が短かった気がした。どの授業も講義も、児童生徒に寄り添ったあたたかみのある指導、自立支援でした。先生方の研究や努力はものすごいと思います。通常(一般)の学級でも、活用できるところを取り入れていきたい。ありがとうございました。

授業参観後の協議の時間については、昨年よりも長く設定しましたが、もう少しとって欲しいという要望がありましたので、改めて検討したいと思います。

8月後半の選択講習B「教科・領域の指導力を磨く」及び選択講習C「教師力（総合力・応用力）の向上」は、3日にわたって実施しました。特に、本校には音楽科、鍼灸科、理学療法科という他の学校には無い課程があり、選択講習Cはバラエティに富んだ講座を開講出来ていると思います。講習のタイトルを見ると「心から心に響くうた」、「リハビリテーションの理論と実際」、「東洋医学的アプローチによる生徒の健康管理」となっており、同一の曲で斉唱・独唱・重唱・合唱を体験したり、肩こりや腰痛といった症状に対する西洋及び東洋医学的アプローチの概要を実践とともに理解したり、肢体不自由児のリハビリ

リテーションを学んでいます。これらの講座に寄せられた感想も以下にご紹介します。

- ・全員で合唱を作りあげていく過程が大変楽しかった。各自の得意、不得意を共有しつつ積みあげていけたのが現場でいかせると思った。
- ・とても充実した一日でした。触って考えるだけではなく、立体の見方についても新しい発見がたくさんありました。正多面体は、教科書にのっている向き（上下など）でしか考えたことがなかったのですが、正八面体が反三角柱であることや、他にもたくさんの気づきがあり、とても有意義で楽しい講義でした。今後の授業にも取り入れていきたいと思います。ありがとうございました。
- ・視覚障害の有無に関わらず、教材教具の工夫は学習する子ども達にとってよいか悪いかの視点を忘れてはいけないことを改めて感じました。さらに視覚障害を意識したUDの実践により、通常級の中で実践力を高めていこうと思います。本当にありがとうございました。

これらのB・C講習は、視覚、聴覚、知的、肢体不自由、自閉症の各障害に特化した特別支援学校5校と普通附属学校6校を有する筑波大学の特徴を活かした講習であり、特別支援学校3校の教員が講師を務め「幼稚園や小中学校等に在籍する気になる子への支援～発達障害に焦点を当てて～」という講座を昨年から復活させ受講者からも高い評価を得ることが出来ました。このような講座も筑波だからこそ開講出来るものです。もちろん、それらは講師や実技実習担当者、TAをはじめ、開講までの諸準備、当日の受付、片付けなど、多くの教職員の協力体制があって成立するものですが、本校だけでなく筑波大学の附属学校を知っていただく良い機会でもあります。

今後も、これからの教育動向を見据えながら、受講者にとって現場で活用できる内容を提供出来るよう努めていきたいと考えています。

Ⅱ．筑波大学教員免許状更新講習 シンポジウム

1. テーマ： 学び続ける教師のための教員免許状更新講習

(1) シンポジウムの概要

本年度のシンポジウムは昨年度に引き続き「学び続ける教師のための教員免許状更新講習」をテーマに開催した。例年の参加者の多くは次年度の受講予定者であるが、今年度は第一部の講師に本学大学院卒の千田健太氏（フェンシングロンドン五輪男子フルーレ団体メダリスト）を招聘し講演を行うに当たり、本学の更新講習のPRも兼ねて第一部は一般参加者も募った。シンポジウムは、今まで同様に、本学の更新講習の特色や今年度の実施状況等にもふれ、新時代の教育を担う教員にとっての望ましい更新講習の在り方について迫ることをねらった。

シンポジウム実施計画

- 1 テーマ 学び続ける教師のための教員免許状更新講習
- 2 期 日 令和2年2月15日（土）
- 3 会 場 筑波大学 3A202 教室（約180人収容）
- 4 講 演 千田 健太 先生（日本スポーツ振興センター）
- 5 パネルディスカッション
 コーディネーター 濱本 悟志（筑波大学附属学校教育局 教授 教育次長
 ・教員免許状更新講習推進室 室員）
 パネリスト 柳橋 茜（茨城県つくば市立吾妻小学校 教諭）
 加瀬 雄一（茨城県つくば市立秀峰筑波義務教育学校 教諭）
 杉本 クニ子（茨城県立つくば特別支援学校 教諭）
 井田 仁康（筑波大学人間系 教授
 ・教員免許状更新講習推進室 室長）
 雷坂 浩之（附属学校教育局 教授 教育長補佐
 ・教員免許状更新講習推進室 室員）
 奥谷 雅恵（教員免許状更新講習推進室 教授）
- 6 参加者 国・公・私立学校教職員，教育委員会，大学関係者，
 第一部は学生及び一般の方も参加
- 7 日 程 12:30 受付開始 全体司会 野村 港二（筑波大学 教授）
 13:00 開 会（主催者あいさつ，来賓あいさつ・紹介，日程説明）
 13:20 第一部 講 演 千田 健太 先生
 演題「オリンピックの舞台裏
 ～3大会のオリンピックチャレンジを通して～」
 14:35 第二部 パネルディスカッション
 ・趣旨説明
 ・自己紹介
 ・筑波大学における更新講習について意見交換
 ・フリートーク，会場からの意見・質問
 16:10 第三部 令和2年度 筑波大学教員免許状更新講習の説明
 16:30 閉 会
- 8 後 援 茨城県教育委員会

シンポジウムは三部構成で行い，第一部は千田健太氏の講演，第二部は受講者代表を交

えたパネルディスカッション，そして第三部は令和 2 年度更新講習の概要説明を行った。

（２）シンポジウムの報告

シンポジウムの参加者は 106 人（一般参加者 85 人，講演講師 1 人と県教育委員会 2 人，パネリスト 3 人を含む本学関係者 21 人）で，一般参加者の多くは教員であった。参加者の学校種では，幼稚園・保育所・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校でさらに今年度は学生を含む大学関係者や行政その他の業種の参加となった。

開会行事では，はじめに茂呂 雄二 副学長が主催者あいさつを行い，次に，後援をいただいている茨城県教育委員会を代表し，茨城県教育庁の森作 宜民 学校教育部長（岡野 洋一 特別支援教育課長補佐代読）より来賓あいさつをいただいた。

第一部の講演では，千田 健太氏から「オリンピックの舞台裏 ～3 大会のオリンピックチャレンジを通して～」という演題でお話をいただいた。

オリンピアンとして，世界の舞台で戦っていくための努力，周囲への感謝等，人間としての生き方や教員として子供たちを育てる上においてその可能性を引き出すためのエピソードをお話いただいた。世界で上位に立つには，戦略が重要であること，自分自身の技術・精神面の向上には，自分自身を客観的に分析し，弱点をカバーするだけではなく，強みを見つけて伸ばしてきたこと，今まで諦めずに試行錯誤しながらの取り組みなどを話されていた。また，幼少時代のスポーツとの関わりや周囲のサポート，さらに出身地である気仙沼の方々とのお話など，体験をもとにお話いただいた。「強み」を見つけることは，自己肯定感が増し，学びに向かう意欲が上がる。参加した教員自身にとっても自己肯定できる講演内容であった。アンケートの自由記述からも「貴重な体験を聞かせてもらった。指導者の在り方について参考になった。」等の声が多数あった。

第二部のパネルディスカッションでは，パネルディスカッションの趣旨説明の後，各パネリストから以下の内容について発表があった。

- 趣旨説明（奥谷）
 - ・ 筑波大学の更新講習（筑波カリキュラム）の特色
 - ・ 令和元年度の更新講習事後評価から（受講者の事後評価結果）
- 筑波大学の更新講習講師として（井田教授）
 - ・ 必修講習を担当しての感想
 - ・ 講習講師としての工夫点や課題
 - ・ 更新講習に対する意見
- 選択講習及び附属学校における更新講習の実際（雷坂教授）
 - ・ 附属学校における選択講習の実際
- 受講者代表から（※ 意見の詳細は資料参照）
（加瀬教諭）（柳橋教諭）（杉本教諭）
 - ・ 筑波大学で受講した理由
 - ・ 申し込みまでの実際
 - ・ 受講した講習の様子
 - ・ 受講しての感想
- ディスカッション
 - ・ コーディネーターである濱本教授を中心に，更新講習の現状や今後の見直しについて話し合いが行われた。
- フロアーからの質問
 - ・ 参加者から，講習内容や講習の選択の仕方などについて意見や質問があった。
- コーディネーターのまとめ（濱本教授）

パネルディスカッションでは，本年度の更新講習の振り返り，通信型講習と対面型講習について率直な意見交換をした。また，フロアーからの質問や疑問にパネリストが本音で答えるなど活発な意見交換により，今後の更新講習の在り方について共に考えることができた。

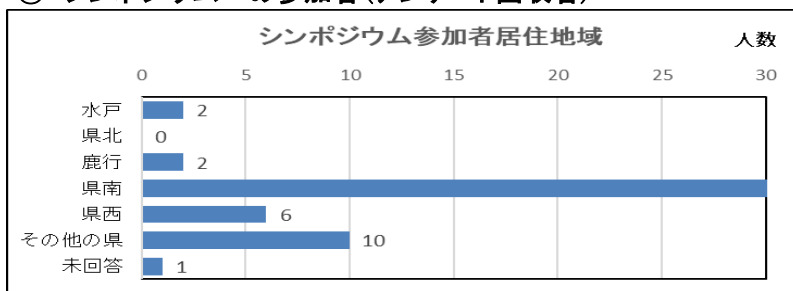
第三部の令和 2 年度講習の案内では，堀川副室長から暫定版の実施要項や開設計画の紹介，申込手続きの方法についての説明を行った。Web システムについては，順を追って具体的な申込方法について説明し，受講予定者の不安解消を目指した。

参加者にはアンケートへの回答をお願いし、午後 4 時 30 分頃に終了した。

(3) シンポジウムの事後アンケート結果

シンポジウム終了後に一般参加者(85 人)にアンケートを実施し、59 人(回収率約 69%)から回答があった。以下、その集計結果から今回のシンポジウムについて検証する。

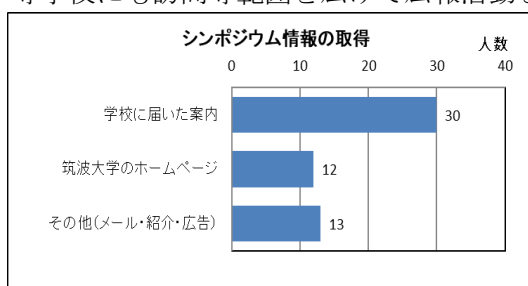
① シンポジウムへの参加者(アンケート回収者)



幼稚園から特別支援学校、大学関係者まで茨城県内を中心に幅広い参加者がいた。

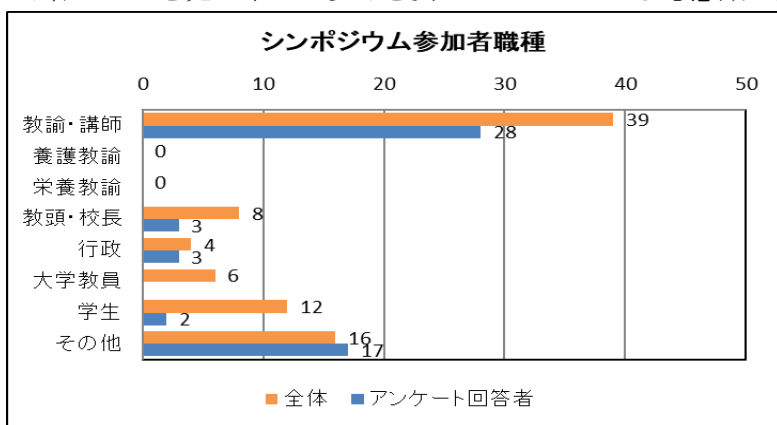
昨年度の参加者が少なかったため、今年度は各学校にポスターを配布するだけではなく、近隣の市町

村教育委員会への訪問による広報や公立学校の教務主任会での説明、また公立学校、私立高等学校にも訪問等範囲を広げて広報活動を行った。



第一部は、学校関係者に限らず、一般の方にも参加していただいた。参加者数は昨年度より増え大学関係者も含めると 106 人となった。上のグラフの参加者居住地域を見るとやはり近隣の県南地区が多い。県内の参加者の多くは、学校に届けたパンフレットを見て参加していた。しかし、千葉県や埼玉県、福島県、神奈川県からの参加者もあった。他県からの参加者は、大学の

HP を見て参加している。大学の HP については、免許状更新講習以外の案内もあったので、免許状更新講習を検索しないとすぐには分からない状況があったにもかかわらず、2 割の参加者が HP を見て早めに参加を決めていたことから意識の高さがうかがえる。



その他には、更新講習を担当している講師や TA を経験した学生に直接メールによるお知らせを送った。更に筑波大学が実施している教員免許状更新講習で、教員は免許更新のための研修を行っていることを多くの人たちに知ってもらう意味も込めて、地域の週刊新聞にも掲載を頼んだ。

「折角だから、多くの教員に伝わるような広報活動の工夫が必要である。」との指摘をシンポジウム参加者からいただいた。毎年各学校には、パンフレットを配布し周知しているが、11 年目でありながら、初めてシンポジウムを実施していることを知った教員は非常に多く、免許状の更新が我が身でなければ、関心がないのだろうとも感じた。

今回のシンポジウムでは、講習担当講師や学生など本学の関係者に対しても参加を呼び掛けたので、参加者全体の大学関係者の割合が高いが、各学校種における割合は、次年度の対象者の割合とほぼ同じで、小学校、中学校、高等学校の順に多い。

参加者受付データによると、今回のシンポジウムでは、参加者の半数が現職の教員で、養護教諭や栄養教諭の参加はなかった。今回は、県内の教育行政機関や講習担当者、学生等の参加もあり、参加者の幅が広がった。多くの方々に、アンケートの解答にも協力していただ

いて、今までと違った角度からの意見を得ることができた。

② 年齢区分と次年度の受講予定

シンポジウム参加者は 50 代 40 代 30 代と年齢が高い順に多かった。アンケートの分類項目に 20 代 60 代の項目がなくその他項目の記入となったためその他の数も多かった。

また、参加者のうち受講予定者は、全体の約 54%であった。第一部の講演のみの参加者も多かった。

シンポジウムに参加の次年度受講予定者は、今回は 30 代の参加者が増えていた。その後も 11 人と多い。その他の受講予定者は、20 代はいないので 60 代の参加者が増えたことになる。

40 代や 50 代の参加者は、免許状更新講習の受講は 1 巡したので、Web 申込については更新講習が始まったところよりも抵抗は減ったと思われる。また、2 回目の更新講習なので、講習の取り方についても理解できているためであろう。しかし、今回の第 1 グループから旧免許状第 6 グループまでは、以前は必修講習が 2 日間あり、選択必修がまだ設定されていなかったもので、この違いについて確認したい受講者もいるのであろう。

新免許状所持の 30 代の参加者は、大まかな情報はあるものの初めての更新であるので、来年度の講習に関する情報などを得ることを目的としていると考えられる。シンポジウムが受講予定者にとって必要な情報提供の場となるよう、今後も内容や方法を検討していきたい。

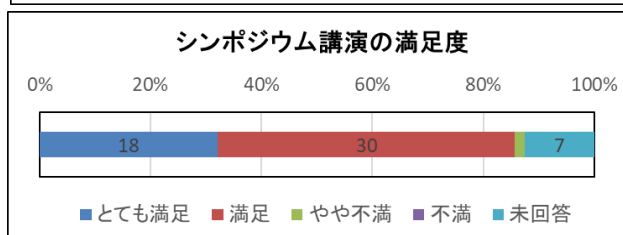
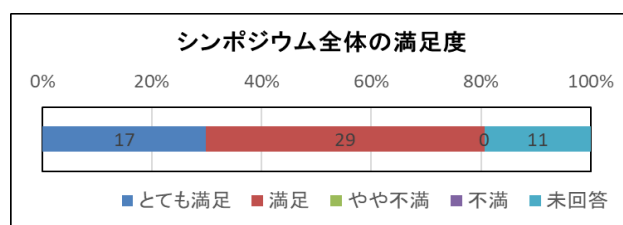
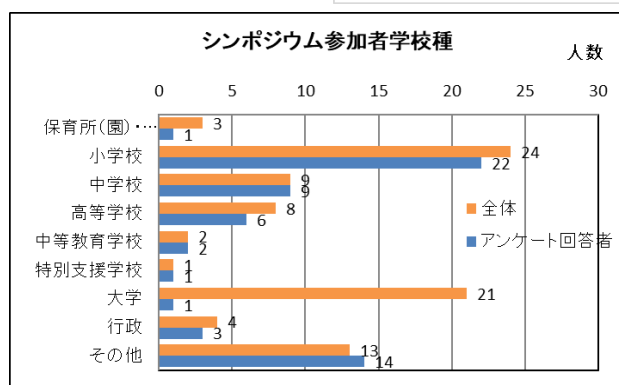
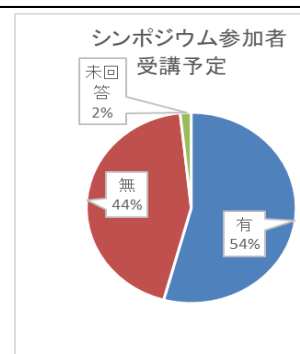
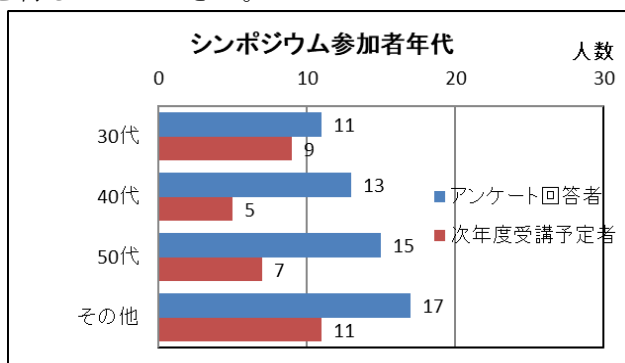
③ シンポジウム全体の満足度

グラフより、「とても満足」約 30%、「満足」約 51%、「未回答」約 20%と回答している。未回答者は、シンポジウムの 1 部しか参加していなかった参加者であった。「不満」となる項目の解答は無であったので、シンポジウムの内容、運営等については、おおむね満足していると考えられる。次年度の受講対象者は、旧免許状所持者は更新講習が 2 回目となるが、30 代の新免許状所持者が増えており、シンポジウム全体として必要な情報が得られたのであろう。

④ 講演の満足度

第一部で実施した講演で 80%以上が満足と回答している。内訳は、「とても満足」32%と「満足」が 54%である。やや不満は 1 名で、第二部からの参加者の 7 名が未回答となっている。

千田健太氏の経験を踏まえた具体的な講演は、多くの参加者の共感を得ていた。教員以外の一般参加者も満足し



ていたとの感想があった。

今後もシンポジウムの柱になるような内容の講演を企画するとともに、講演内容についての広報活動を重視していきたい。

〈シンポジウム感想より〉

- ・千田先生のお話、とても感動しました。努力の大切さ、身にしました。
 - ・トップアスリートのお話を伺えたのは、貴重な経験となった。千田先生の講演とシンポジウムテーマをどのように結び付けて意義付けしていくといいのか、もう少し明確にしてもらえると助かると思います。
 - ・オリンピックについて考えさせられました。ありがとうございます。
- 大変勉強になりました。「学び続けることの大切さ」について改めて考えることができました。
- ・千田健太先生のお話は大変参考になりました。ありがとうございました。
 - ・オリンピックのメダリストの話聞くことができ、オリンピックイヤーの気持ちを高めることができた。試合を記録した映像解析を含めた情報戦がオリンピックの戦術の要だと分かった。

⑤ パネルディスカッションの満足度

第二部のパネルディスカッションに参加していない方々もいるので、全体のグラフの数値は「とても満足」「満足」との回答は54%であるが、実際の参加者の97%が満足と回答している。質疑応答の際は、フロアーからの質問も多く、受講経験者側の感想の他に担当講師側からの実際の講習の進め方などが話された。

アンケートの感想からも参考になっていることが分かる。また、担当講師側にとっても受講者の本音を聞くことができよかったとのコメントをいただいた。

今後も参加者のほとんどが受講予定者であることを踏まえ、パネリストの選定やディスカッションの内容、参加者との意見交換の方法などを検討していきたい。

参加者の感想より

〈30代感想〉

- ・手続きの仕方が分かり、見通しがもてました。
- ・はじめての免許更新なので、不安でしたが、今回参加して更新の流れが分かりました。ありがとうございました。（他2名）
- ・大変参考になりました。ありがとうございました。
- ・受講に関しての心配事が減りました。ありがとうございました。
- ・夏休み中（7月下旬～8月下旬にかけて）の平日の方が研修に出やすいです。
- ・来年度受講するため、見通しを持つことができました。

〈40代感想〉

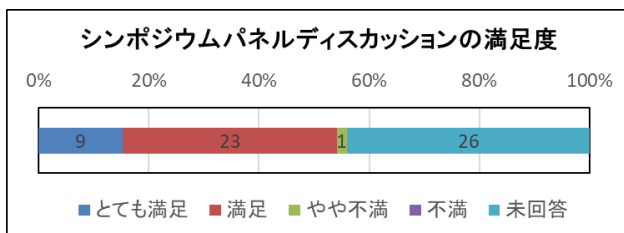
- ・講演はなじみのない内容だったため、興味深く聞くことができました。来年度の免許更新講習についても、詳しく知ることができてよかったです。今日はお世話になりました。ありがとうございました。
- ・詳しく分かりやすかったです。
- ・「生の声」が聞けてありがたかったです。

〈50代感想〉

- ・次年度教員免許状更新講習(2回目)を迎え、貴大学から資料と説明を頂き、とても参考になりました。本日参加できてとても良かったです。ありがとうございました。
- ・更新講習の貴重な30時間をより有意義なものにしたいと思います。参考になりました。
- ・大変有意義な研修を積むことができました。ありがとうございました。
- ・資料の文字が小さい。話す人が早口傾向です。内容はよいのですが、老眼、難聴が起こる世代が参加していることをご理解ください。

〈その他〉

- ・講習を経験した先生方から貴重なご意見を聞くことができ、とても勉強になりました。
- 更新講習を筑波大学で受けるとどのような流れ、特徴、利点があるのかよくわかり良かったです。申込みシステムについても具体的で分かりやすかったです。

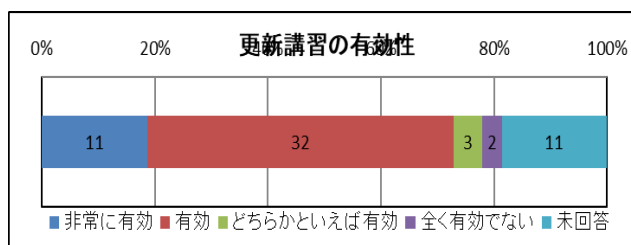


- ・充実した資料とお話をいただき、ありがとうございました。
- ・教師は学校教師というとらえ方を確認させられました。
- ・学び続ける教師のための更新講習のテーマのとおりとても充実した素晴らしい内容です。とても分かりやすく筑波大学で勉強させていただく意欲が向上しました。
- ・最初に更新講習の概要を説明してほしいです（初めてでわからないので）
- ・筑波大学としての更新講習の方針を担当者から直接伺えてよかったです。講習講師をさせていただく自分として大変有意義であり心強く感じました。また、受講者の方々の本音を聞くことができたので、次年度の講習にいかしていきたいと思います。お世話になりました。

⑥ 更新講習の有効性

更新講習の有効性については、約78%の参加者が「有効」であると回答しているが、「全く有効でない」と回答したのは2人であった。更新講習に対しては「やるべきもの」と肯定的にとらえる傾向ができたようだ。しかし、

費用等の受講者の負担があり、高い受講料を払ったのだから、それに見合う内容かどうかのチェックも厳しいのであろう。費用については、都道府県の対応により差がある。充実した講習が望まれ、受講したい講習に対する記述も多かったことからそれがうかがえる。以下は、挙げられた受講に対する要望や意見である。



受講したい講習及び講習に対する要望

〈30代〉

- ・体育実技 ・道徳
- ・丈夫でおいしい野菜の品種をめざして
- ・専門的な知識がなくても受講でき、知識を広げられるもの
- ・専門教科外（道徳、図工、音楽、書道等を充実させたい）
- ・学校を巡る近年の状況の変化
- ・児童生徒の望ましい人間関係づくりを身に付けよう、イタズラ実験オモシロ工作

〈40代〉

- ・「使って伸ばそうあなたの英語力」「グローバル時代の教育課題」に興味がある。
- ・附属学校での授業参観 ・食品添加物、ゲノム・代替肉等食品について
- ・生徒指導（不登校児童生徒への具体的な支援の在り方）

〈50代〉

- ・道徳の時間の授業実践のポイント、新学習指導要領における評価（教師が自信をもって評価できるように）

- ・「粒子線のがん治療応用～生活の質の改善をめざして～」
- ・「病とともに生きる～慢性疾患や発達障害等の子や家族の支援を考える～」

- ・メンタルヘルス関係 ・法律、食育

〈その他〉

- ・世界の教育事情について ・STEAM教育について
- ・発達障害、自閉症の最新情報
- ・東洋医学的アプローチによる生徒の健康管理 ・実践演習（附属大塚特別支援学校）
- ・障害がある生徒との関わりや仲間づくり。 ・国語科の教員としての力をつけるもの。

2. まとめ

筑波大学教員免許状更新講習シンポジウムの開催は、今年で 11 回目になる。例年、内容に関しては概ね好評という評価を得ている。関係者を含めた参加者数の推移は、右のグラフのとおりである。

2017 年度までは 100 人前後の参加者があったが、Web 申込が定着し受講予定者の半数が更新講習を受講した 2014 年度からは、シンポジウムへの参加者が減少した。2018 年度は、近隣校へのポスター配付と HP での広報を行ったが、参加者 41 人となった。

人数の減少という結果を踏まえて、今後のシンポジウムを開催するかどうかについて検討した。人数減少の要因の 1 点目は、

「旧免許状のグループは 1 巡したので、更新講習の不安は払しょくされた」、2 点目は、「周知不足で、開催していることを知らない」の 2 点が考えられる。そこで、今年度は、時間のある限り近隣の市町村教育委員会や幼稚園から小・中・高等学校を訪問して周知を図った。また、第一部の講演の参加者を数多く募り、聴講してもらうことや教員の更新講習についても理解してもらうよう広報活動をした。結果、100 名を超える参加数となった。

これまでの参加者の多くは、次年度の受講予定者であり、講習の内容や手続きの仕方、講習の選び方などについての疑問や不安を減らそうとシンポジウムに参加していた。例年、50 代の参加者が多く、申込の操作手順の説明等を求めているが、今年度は、新免許状所持の 30 代の教員の受講者の参加率が増えて、教員免許状更新講習の内容や講習の流れなどについての説明も希望している。

シンポジウムは受講予定者の他、様々な立場の方々の生の声が聞ける貴重な場である。

今後、シンポジウムを企画するに当たっては、2 巡目に入った本学の教員免許状更新講習の方向性を明確にし、それを踏まえた内容にしていかなければならない。今後については、参加者が求めているものを分析しつつも、シンポジウムの役割を再検討して、魅力あるシンポジウムになるようにしたいと考える。

また、昨今インターネットによる e-ラーニング形式の教員免許状更新講習の受講者も増えている。受講料は、本学の講習と比較するとやや高くなるが、交通費がかからず、勤務先の行事の影響を受けずに受講できて認定がはやいことも利点だと思われる。

しかし、大学での対面式講習を希望する意見も多い。シンポジウムで実施したアンケートから推測すると、「質の高い実践」「運動や観察・実験、実習などを伴うもの」「特別支援教育や生徒指導」「アクティブ・ラーニング」などの喫緊の学校現場における課題に関する講習が求められていることが分かる。

上記の意見や要望を受け止めつつ、本学の教員免許状更新講習を受講する利点である、担当講師から直接最新の教育情報を得られること、他の受講生と意見や情報共有ができること、現地での活動・演習や授業参観ができることなどを周知して、教育の根幹となる考え方や現在の課題や時代が求める指導法等を示しながら、「受講者がわざわざ本学に通って教員免許状更新講習を受講するよさとは何か」を追求していきたい。そして、本学の教員免許状更新講習のモットーの「『受講してよかった』と思える講習を実施します」となるようにしていきたい。



参考としてアンケートに書かれた内容を掲載する。

次回の講演で聞いてみたい内容

- ・芸術家やアーティストから見た教育の在り方
- ・縄跳びパフォーマンスの方の話 ・ラグビー日本代表選手の話
- ・東京五輪のオリンピック、パラリンピックに出場した選手の話（他 5 名）
- ・「感染症から子どもたちを守る」「世界から見た日本人」 ・NHK アナウンサーとしての仕事・思い
- ・人材の育成に関わっている方の講演 ・企業経営と人材育成について

新しい時代に求められる教師像

〈30 代〉

- ・学び続けること考え続けること，成長し続けること(他 1 名)
- ・教職という仕事の魅力をつくり発信していく力 ・その時代に合った教育に柔軟に対応できる力
- ・体力 ・柔軟な対応力及び信念 ・子どもや保護者の小さな変化に気付くこと
- ・時代の変化においていかにするための智慧と新しさを受け入れられる心と脳の容量

〈40 代〉

- ・未来を担う子供たちの人材形成に直接携わるという強い使命感，教える者こそ学ばなければならないという謙虚さ
- ・時代の変化に対応できる力 ・親子に働きかけること
- ・子どもと保護者の教育的ニーズに応えること，自己研鑽とストレスマネジメント
- ・小学校においては，多様な対応力の様なものが大切だと思う
- ・現場の教員にとってニーズのある研修を受講することで，これからの時代に求められる教育を理解し，日々の教育実践にいかすことができること
- ・一人一人の主体性を伸ばす，多様性ダイバーシティを視野に入れた教育の視点を取り入れていくことが将来の教育の基本を持した上で必要になってくると考えている。
- ・今まで以上に人とのコミュニケーション能力がもためられると思う。

〈50 代〉

- ・子供達に学びを通して自己肯定感を持たせること，グループアプローチにより人間関係を育むこと，将来社会で生き抜くためのキャリア教育の充実を図ること
- ・教育として必要な近年の状況の変化と，特別なニーズのある子どもの理解
- ・お仕着せの講習ではなく，自分で学びたいことを学ぶ教師
- ・柔軟性のある様々な人，もの，事に対応できる人 ・情熱
- ・授業力（他 1 名）コミュニケーション力(他 1 名)，想像力，子供に寄り添う態度
- ・変化の激しい時代をいち早くキャッチできる情報収集力と活用力，教育機器(ICT)活用力
- ・マネジメント力（学校組織，人材育成，教育活動，授業等で）と問題解決力
- ・子供の特質をつかむ力量と新しい価値観を現在のものに入れ替えて，さらに深化させられる柔軟性と創造性（発想力）

〈60 代〉

- ・学び続ける探求心 ・余裕，幅広い人間性
- ・「不易流行」柔軟に変えるべきこと，変わってはいけないことを見極めて体現する
- ・自己主張も大切だが，相手のことを思う思いやりの気持ちを持つこと
- ・常に変化する情勢に対応できる教育の実践のため，行政や研究職との連携・交流を身近に求めることのできる柔軟性。自分の授業を変える勇氣
- ・新しい教育に対応できる能力 ・時代の変化，社会の変化への対応力 ・ゆとり ・柔軟性
- ・新しい技術や世界の動き ・教育事象に対するあくなき探求心 ， こどもたちの創造性の涵養
- ・行きたくなる学校 会いたくなる先生をめざして教育に取り組ませていただきたいと思います。児童生徒を心から愛する教師でしょうか。

〈その他〉

- ・学ぶことの楽しさを子どもと共に共有することがとても大切だと思う
- ・教科の力，生徒に寄り添い，その生徒が抱える課題にどう対応するのかを指導する力

III. 本学の教員免許状更新講習について

筑波型免許状更新講習の在り方について

附属学校教育局 教授 雷坂 浩之
(教員免許状更新講習推進室員)

必修領域 60%、選択必修領域 72%、選択領域 66%、この数値は、令和元年度に全国の認定大学等が実施した免許状更新講習における通信等による講習の受入人数の比率です。必修領域だけは、ここ数年 60%台前半で推移していますが、選択必修領域と選択領域に関しては、顕著な増加傾向が見られます。そもそも通信等による受講者が多いのは、例えば義務化された講習とはいえ、休日や夏季休暇中にわざわざ講習会場まで出向くことや長時間拘束された聴講の負担感が大きいためなのでしょう。確かに通信等による受講の場合には、受講する日時を自分で決めることができますし、聴講の途中で中断や再開にも自由度がありますし、何といても会場に移動せずに自宅や職場での受講が可能です。受講生は、こうした身体的にも精神的にも負担の少ない環境で受講ができるということに魅力を感じているからなのかも知れません。

こうした傾向の中で、免許状更新講習が開始されて以降、筑波型免許状更新講習は頑なに対面型の講習スタイルを貫いてきました。本学が開講する講座の中には、フィールドワークや討議を取り入れたものもあり、そもそも通信による配信が難しいと言う事情があります。また、筑波大学の最たる特色でありかつ「うり」でもある、附属学校各校が行う実践演習などの講座（選択D）は、授業参観や研究協議を組み入れたものが多く、これまた通信による配信が困難であると言った事情もあります。しかし、講義が主体の講座までも対面型にこだわってきたことには、配信する上での技術的な困難よりも、もっと大きな理由があります。それは、通信等によるものよりも対面型の方が、講義者と受講者との距離が近いからに他なりません。距離の違いによって、伝えられるものにも違いが生じると考えています。

教員としての「必要な資質能力」と「最新の知識・技能」は、いずれも免許状更新講習を通して受講生に伝えるべき項目として義務づけられています。教員の資質能力や知識・技能とは、教育者としての使命感、教科等に関する専門知識、実践的な指導力などを意味します。また、今後特に求められるものとしては、地球的視野に立って行動するための豊かな人間性、変化の時代を生きる社会人に求められる課題探求能力等に関わるもの、教職に対する愛着や誇りなども含まれます。免許状更新講習のこうした目的を達成するためには、通信等によるものよりも対面型の講習に分があると考えます。また、本学の研究者や附属学校の教員の多くが抱く理想的な教師像に必要な「マインド」こそは、対面型でしか伝えられないと思っています。

最近では、免許状更新講習を中堅教諭等資質向上研修（かつての 10 年経験者研修）として認定する動きも出てきました。これも教員の研修に対する負担感の軽減を図るねらいがあるものと思われます。教育現場における教員の働き方改革を推進することも大切ですが、こうした動きには本来目指すべき教員の資質向上のための研修が形骸化されそうな不安も抱きます。本学においては、引き続き対面型にこだわり続け、質の高い更新講習、さらには教員研修の充実に貢献していくべきであると考えます。

本学に求められるこれからの教員免許状更新講習

教員免許状更新講習推進室 教授 奥谷 雅恵
(教員免許状更新講習推進室員)

教員免許状更新講習は、2007年6月の改正教育職員免許法の成立により、2009年4月1日から教員免許更新制が導入されました。それに先駆けて本学では2008年度の予備講習から始まり、必修A「教育の最新事情」と3区分の選択の4つの区分からなる独自のカリキュラムを設定して2008年度から2015年度まで実施しました。2016年度からは必修の内容の1つを選択する選択必修が設定されたので、必修講習A「共通内容からなる教育の最新事情」、選択必修a「教育の最新事情：現代の教育課題等」、選択B「教科指導や生徒指導等に関する内容が中心で、受講者の指導力を高める講習」、選択C「教養も含め、様々な講習により、教師の総合力や応用力、つまりは教師力を高める講習」、選択D「附属学校における実践演習」の5つの区分で構成される筑波カリキュラムを実施して、各領域からバランスよく1講習ずつ受講してもらうことを薦めています。

現場の教員は、多忙の中、10年毎に教員免許状更新のために30時間の研修を受講します。ですから、現場で活かせる更新講習の内容を求めています。講習によっては、実践的なスキルアップ講習もあれば、10年先を見据えて活かせる考え方を学ぶ講習、さらに教育の原点を見つめなおす講習等があります。本学の更新講習は、「今」だけにとらわれるのではなく、未来を拓く子どもたちの今後を見据えた学びができる講習を示していきたいと考えています。これからの教員は、社会の変化を踏まえつつ教育活動を行っていくことが求められています。今後の社会構造の変動は大規模で急激なものになることが考えられ、今までのように教師の経験だけで対応できるものではなくなります。現在の変化に迅速にかつ適切に対応していくためには、高度な専門的知識や技能を修得し、適時に刷新するなどの取組が必要なのです。社会の教育は何がどう変わっていくのか等、不易と流行について一人一人が見直し、対峙していく講習でありたいです。

学校現場では、更新講習1巡目に多数を占めた50代の教員が定年退職となり、徐々に若手の教員が増加しています。そのような環境のもと、教員免許状更新講習は、2巡目に入りました。今年度の特徴としては、1つは、現職教員の本学受講率の減少や教員勤務予定者の受講率の増加です。現職の教員の減少は、大学の講習予定によって学校行事や自身の予定を変更しなくて済む通信型の講習の受講者が増えたことも一因にあるようです。逆にいうと対面型の本学の受講者は、意欲的な方が多く、受講者の変容（習得）ポイントが高くなりました。2つ目は、新免許状を所持する30代受講者と2度目の更新となる受講者（40代、50代、さらに60代）と受講者と年齢層が広がったことです。60代の受講者や学校勤務予定者の増加は、学校現場の講師不足により、ベテラン教員や以前に取得した教員資格を活かして働く希望者が増加したためと考えられます。

筑波大学の更新講習の良さは、総合大学である本学の講師陣による高い専門性・最先端の講習（教育学に始まり、全学の分野に至る）、附属学校での実践演習、さらに配慮を要する受講者へのニーズに応じた対応です。対面型だから得られる「担当講師との直接のやりとりや演習を含む活動」、「受講者同士の情報交換ができる協議」「授業を実際に参観してのスキルアップ」の周知を図り、「受講してよかった」と感じてもらいたいと考えています。私たち教員免許状更新講習の運営側は、受講環境の整備、本学の更新講習で受講した内容が、各勤務先でどのように活かされたか等を検証し、未来(少なくとも10年先)を見通した更新講習を常に目指して努力していきたいと考えております。

おわりに

本書は、令和元年度の筑波大学教員免許状更新講習の実施結果に関する報告書です。筑波大学教員免許状更新講習の報告書も12冊目となります。昨年度で一巡し、初めの頃に受講していただいた方が、10年経って二巡目に受講される時期となってきました。

講習を振り返ってみますと、「明日の授業で使えそうだ」「すぐに使えてうれしい」という感想がごございます。が、一方でそのようにすぐに使える新しい内容と、10年たっても本質は変わらない教育がありますので、また初心に戻って講習を聞いていただきたいという部分がごございます。更新講習を利用していただきながら、もう一度教育の本質、「教育とはなぜやるのか」「教育にはどんな意味があるのか」「子どもたちにとって本当に教育の効果があるのか」など再考していただきたい内容もいくつかそろえてあります。「10年たってもまた同じ話」ということもあり得ますが、10年分の経験がその本質論と絡まって、また新たな発見をすることがあると私たちは考えています。そういう意味では何年たっても重要なことは同じで、動かさずにやるというのも一つの方針です。

一方で、教育内容、教育方法、変わっていますから、新しい方策を取り上げています。筑波大学は専門の先生がたくさんおり、その専門内容が多く出ています。そのような研究の先端を学ぶことができるのも、筑波大の講習の大きな特徴だと思います。

われわれ企画する側としては、本質的な、ある意味普遍性があるものと、それから先端的なものも組み合わせながら講習を提供できればと考えています。

受講者の皆様には、明日の授業のことだけではなくて、教育の本質を考えて、もちろん明日の授業、あるいは本当の最先端のことなど、そのようなことを含めて、内容を取り入れていただいて、幅広く更新していただければと考えております。場合によっては、「ニーズに合わない」とお感じの方もおられますが、もう1度「ニーズを考え直していただくのも一つの目玉」かもしれません。大学でも先生方のニーズに合わせていろいろな科目を提供していきます。そのような相互作用によってさらに良い研修ができればいいと考えています。

今後もアンケート結果等を踏まえ、受講者の声に耳を傾けつつ、一層の改善を図っていく所存です。筑波大学の教員免許状更新講習は、他大学及び他機関の教員免許状更新講習と比較しても充実した内容であると自負しております。来年度以降も受講者の期待に応えるためのさらなる努力は惜しまない所存です。お近くに受講予定の方がおられましたら、本学の教員免許状更新講習をご紹介いただけると幸いです。

このような充実した講習を開講できるのも、学内外の多くの講師の方々や関係者のご協力とご支援のお陰です。この場をお借りして、厚く御礼を申し上げますと存じます。また教員免許状更新講習推進室の奥谷雅恵教授、濱本悟志教授、雷坂浩之教授、堀川俊行副室長を

はじめとする推進室の皆さん，社会連携課 豊田謙一課長，人間エリア支援室 羽子田誠室長，
学校支援課 石塚陽二課長並びに関係者の皆様のご協力によって無事に令和元年度の講習
を終えることができました。衷心より感謝を申し上げます。

令和 2 年 3 月 吉日

教員免許状更新講習推進室長
人間系教授 井田仁康

教員免許状更新講習委員会委員名簿

平成31年4月1日現在

| 氏 名 | 職 名 | 所 属 |
|-------|-----|------------------------|
| 茂呂 雄二 | 副学長 | |
| 清水 諭 | 副学長 | |
| 清水 美憲 | 教 授 | 人間系 |
| 伊藤 純郎 | 教 授 | 人文社会系・教員免許状更新講習推進室員 |
| 森田 憲右 | 准教授 | ビジネスサイエンス系 |
| 佐藤 智生 | 准教授 | 数理物質系 |
| 塙 有紀 | 教 授 | システム情報系 |
| 津村 義彦 | 教 授 | 生命環境系 |
| 岡崎 慎治 | 准教授 | 人間系 |
| 石崎 和宏 | 教 授 | 芸術系 |
| 大宮 朋子 | 准教授 | 医学医療系 |
| 池内 淳 | 准教授 | 図書館情報メディア系 |
| 根津 朋実 | 教 授 | 人間系・教員免許状更新講習推進室員 |
| 加藤 克紀 | 准教授 | 人間系・教員免許状更新講習推進室員 |
| 岡崎 慎治 | 准教授 | 人間系・教員免許状更新講習推進室員 |
| 雷坂 浩之 | 教 授 | 附属学校教育局・教員免許状更新講習推進室員 |
| 佐藤 稔晃 | 部 長 | 教育推進部 |
| 井田 仁康 | 教 授 | 人間系・副委員長・教員免許状更新講習推進室長 |
| 濱本 悟志 | 教 授 | 附属学校教育局・教員免許状更新講習推進室員 |
| 奥谷 雅恵 | 教 授 | 教員免許状更新講習推進室員 |
| 野村 港二 | 教 授 | 生命環境系・教員免許状更新講習推進員 |
| 星野 豊 | 准教授 | 人文社会系・教員免許状更新講習推進室員 |
| 三田部 勇 | 准教授 | 体育系・教員免許状更新講習推進室員 |
| 緒方 昭広 | 教 授 | 人間系・理療科教員養成施設 |
| 石井 裕志 | 副校長 | 附属視覚特別支援学校 |

教員免許状更新講習推進室 室員名簿

| 氏 名 | 区 分 | 所 属 ・ 職 名 |
|-------|-----|------------------------|
| 井田 仁康 | 室 長 | 人間系（教育学域）教授 |
| 堀川 俊行 | 副室長 | 教育推進部社会連携課教員免許状更新講習推進室 |
| 奥谷 雅恵 | 室 員 | 教員免許状更新講習推進室 教授 |
| 濱本 悟志 | 室 員 | 附属学校教育局 次長 教授 |
| 雷坂 浩之 | 室 員 | 附属学校教育局 教育長補佐 教授 |
| 野村 港二 | 室 員 | 生命環境系 教授 |
| 星野 豊 | 室 員 | 人文社会系 准教授 |
| 根津 朋実 | 室 員 | 人間系（教育学域）教授 |
| 加藤 克紀 | 室 員 | 人間系（心理学域）准教授 |
| 岡崎 慎治 | 室 員 | 人間系（障害科学域）准教授 |
| 三田部 勇 | 室 員 | 体育系 准教授 |
| 嶋田 輝夫 | 室 員 | 教育推進部社会連携課 主幹 |
| 羽子田 誠 | 室 員 | 人間エリア支援室 室長 |
| 長谷川 修 | 室 員 | 東京キャンパス事務部学校支援課 主幹 |

事務局

| | | |
|--------|--------------|---------|
| 豊田 謙一 | 教育推進部社会連携課 | 課長 |
| 倉持 雅子 | 教育推進部社会連携課 | 係長 |
| 戸波 ちよの | 教育推進部社会連携課 | シニアスタッフ |
| 狩野 ゆり | 教員免許状更新講習推進室 | 事務補佐員 |
| 鈴木 和江 | 教員免許状更新講習推進室 | 事務補佐員 |

教員免許状更新講習「東京地区」実施委員会委員名簿

平成 31 年 4 月 1 日現在

| 氏 名 | 所 属 ・ 職 名 | 備 考 |
|--------|---------------------|-----|
| 雷坂 浩之 | 附属学校教育局 教育長補佐 | 委員長 |
| 濱本 悟志 | 附属学校教育局 次長 | |
| 山本 良和 | 附属小学校 教諭 | |
| 升野 伸子 | 附属中学校 副校長 | |
| 新井 直志 | 附属中学校 教諭 | |
| 多尾 奈央子 | 附属駒場中学校 主幹教諭 | |
| 岡部 玉枝 | 附属高等学校 主幹教諭 | |
| 梶山 正明 | 附属駒場高等学校 副校長 | |
| 吉岡 静 | 附属坂戸高等学校 教諭 | |
| 岩井 香奈 | 附属坂戸高等学校 教諭 | |
| 石井 裕志 | 附属視覚特別支援学校 副校長 | |
| 山口 崇 | 附属視覚特別支援学校 主幹教諭 | |
| 塚田 理恵 | 附属視覚特別支援学校 教諭 | |
| 眞田 進夫 | 附属聴覚特別支援学校 主幹教諭 | |
| 横山 知弘 | 附属聴覚特別支援学校 教諭 | |
| 若井 広太郎 | 附属大塚特別支援学校 教諭 | |
| 田丸 秋穂 | 附属桐が丘特別支援学校 副校長 | |
| 岡部 盛篤 | 附属桐が丘特別支援学校 主幹教諭 | |
| 塚田 直也 | 附属久里浜特別支援学校 教諭 | |
| 緒方 昭広 | 理療科教員養成施設 施設長 | |
| 奥谷 雅恵 | 教員免許状更新講習推進室 教授 | |
| 堀川 俊行 | 教員免許状更新講習推進室 副室長 | |
| 石塚 陽二 | 東京キャンパス事務部 学校支援課 課長 | |

<東京地区事務局>

長谷川 修 (学校支援課主幹)
 市野塚 浩子 (学校支援課教職員・学事係長)
 浅岡 香菜子 (学校支援課教職員・学事係)
 今井 敏江 (学校支援課教員免許状更新講習担当)

講習補助者

<講習 T A>

※50 音順

| | | | |
|--------|----------|---------|--------|
| 青木 匠 | 青木 拓也 | 青柳 翔也 | 石川 美穂 |
| 泉 彩夏 | 伊藤 智比古 | 伊藤 周 | 上ノ山 智貴 |
| 大橋 伊織 | 加藤 空 | 加畑 碧 | 上村 奎斗 |
| 川那邊 宥樹 | KIM BOYE | 木村 百合子 | 吉良 洋美 |
| 倉友 乃康 | 來司 信博 | 小玉 雅弘 | 小林 佳世子 |
| 小松崎 優 | 古村 嘉奈子 | 齋藤 敬 | 齋藤 航己 |
| 櫻田 直弘 | 佐々木 達人 | 澤田 祐輝 | 下郡 正嗣 |
| 白井 蒼 | 末松 正貴 | 菅原 悠人 | 杉山 悠希 |
| 鈴木 花 | 宋 一萱 | 鷹嘴 正人 | 竹内 真里 |
| 竹田 美玲 | 竹原 稔 | 土屋 康平 | 友利 ひかり |
| 永野 恭子 | 永山 可菜 | 永吉 航 | 名田 卓磨 |
| 錦織 和希 | 半沢 康至 | 広瀬 愛希子 | 藤田 駿介 |
| 細田 善嗣 | 真柴 雄一 | 丸山 達法 | 三代 侑平 |
| 峯 啓太郎 | 宮川 春菜 | 村井 輝久 | 村瀬 茜 |
| 茂木 彰紀 | 森脇 透 | 八重樫 真優子 | 山田 一希 |
| 楊 格 | 頼常優 | 李 花子 | 立石 倫子 |

<総括 T A>

| | | | |
|--------|-------|-------|--------|
| 青木 栄治 | 芦沢 柚香 | 岩松 親博 | 岡元 挙 |
| 小山田 建太 | 海沼 亮 | 小牧 叡司 | 佐藤 美咲 |
| 関口 裕也 | 高野 雅暉 | 藤井 慎吾 | 松田 万里阿 |
| 宮本 慧 | 若槻 郁 | | |

講習 T Aの皆様には、講師の補助や受講者への対応をご支援いただき、ありがとうございました。
受講者からは、その誠実で丁寧な対応に対する感謝の言葉をたくさんいただきました。

総括 T Aの皆様には、当日以外にも事前準備から事後の事務までご協力いただきました。
皆様のご協力に心より感謝申し上げます。